福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集

県道大野・二丈線関係
埋蔵文化財調査報告 I

—西区所在金武古墳群の調査—

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1980

福岡市教育委員会

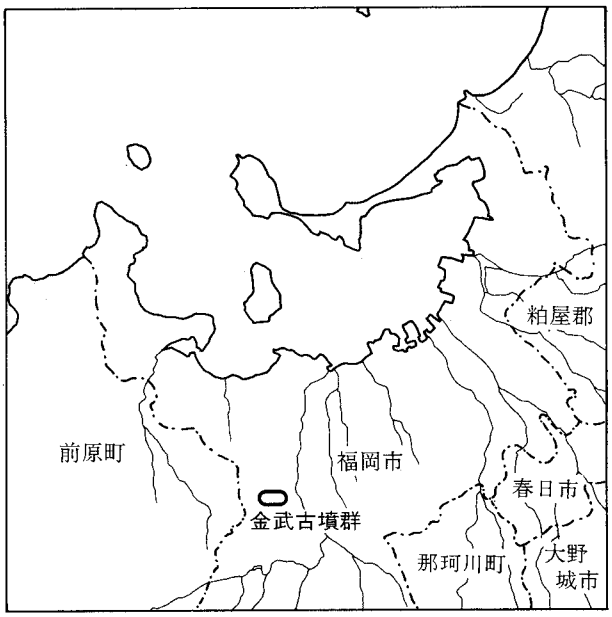
「県道大野・二丈線関係」正誤表

頁	行	誤	正
7	2	147基（うち現在113基）	147基（うち現存113基）
8	6	主体部・墳丘外去のほか	主体部・墳丘外表のほか
8	18	乙武C1号墳	乙石C1号墳
17	7	5の高が6より	5の方が6より
17	16	Ⅳ区墳丘裾部	Ⅲ区墳丘裾部
23	Fig・18	0 15	0 15cm
36	4	天井部は平担を	天井部は平坦を
40	2	細長く長い羨道が	狭く長い羨道が
40	6	やや張りの台形	胴張りの台形
41	25	½に回転を	½に回転ヘラ削りを
42	Fig・33	0 5cm	0 15cm
43	8	大部分を欠失するので	削除
47	Fig・36	Fig・36－－－アミは花崗岩露頭部	削除
48	Fig・37	Fig・36－－－	Fig・37－－－アミは花崗岩露頭部
52	2	ロクロ回転は時計回し。	ロクロ回転は時計回り。
58	4	乙石C3墳	乙石C3号墳
61	9	1号墳と同じように	3号墳と同じように
62	30	飽和溶液によって浸されず	飽和溶液によって侵されず
70－71	Fig・45	上より乙石C2，乙石C1，吉武E4，吉武E3，吉武E5，乙石C3号墳	
PL・14	(1)	(1)－－－波線内は鉄滓	(1)－－－破線内は鉄滓

福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集

県道大野・二丈線関係
埋蔵文化財調査報告 I

—西区所在金武古墳群の調査—



昭和55年3月

福岡市教育委員会

序　　文

本市西南部一帯の丘陵部は、萩原古墳群等を始め著名な古墳が群集している地域です。

近年、これらの丘陵地帯にも開発事業の波が押し寄せ、消滅する遺跡の数も増加の一途をたどっております。教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については、事前の発掘調査をもって、記録保存につとめています。

今回の発掘調査は、県道大野・二丈線改良に伴う第一次の緊急発掘調査で、昭和53年度に実施した古墳6基の調査報告書です。

なお、計画路線内には、弥生時代から古墳時代に至る遺物包含層が確認されており、今後継続して発掘調査を実施していく予定です。

調査に際しましては、多くの方々のご協力をいただき、多大の成果をあげることができました。厚く謝意を表する次第です。

本書が市民各位の文化財保護思想育成に活用されると共に、学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

昭和55年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　津　茂　美

例　言

1　本書は、昭和53年度県道大野・二丈線の改良工事に伴い、福岡市教育委員会が行った埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2　発掘調査を行った埋蔵文化財は、西区金武（カナタケ）・吉武（ヨシタケ）に分布する金武古墳群の一部にあたる。調査した古墳の地籍は次のとおりである。

　吉武Ｅ３・４・５号墳　西区吉武字長石
　乙石（オトイシ）Ｃ１・２・３号墳　西区金武字乙石

3　発掘調査は教育委員会文化課が行い、事務は三宅安吉・国武勝利が担当し、柳沢一男・山崎龍雄が現場を担当した。

4　本書の執筆は次のとおりである。

　Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ…柳沢　　Ⅲ・Ⅳ…山崎
　Ⅴ…大澤正己（新日鉄株式会社技術部技術研究室）

5　本書に掲載した図の作製は、柳沢・山崎が行った。

6　本書に掲載した写真は、現場を柳沢が、遺物の撮影を山崎が行った。

7　本書に使用する方位は、すべて磁針方位である。真北からの偏差は西偏 6°40′ である。

8　本書の編集は、柳沢・山崎が担当した。

本 文 目 次

頁

Ⅰ　はじめに ……1

1　調査に至る経過……1

2　古墳群の位置と環境……2

3　金武古墳群の構成……7

Ⅱ　調査の概要 ……8

Ⅲ　吉武Ｅ群の調査……9

1　吉武Ｅ群の調査概要……9

2　吉武Ｅ３号墳……11

3　吉武Ｅ４号墳……18

4　吉武Ｅ５号墳……24

Ⅳ　乙石Ｃ群の調査……29

1　乙石Ｃ群の調査概要……29

2　乙石Ｃ１号墳……30

3　乙石Ｃ２号墳……38

4　乙石Ｃ３号墳……44

Ⅴ　金武古墳群乙石Ｃ群３号墳及び吉武Ｅ群３・４・５号墳
出土鉄滓の調査 ……58

Ⅵ　まとめ ……63

1　古墳の位置と墳丘の構造……63

2　横穴式石室の平面図形について……64

3　石室石積み技法について……70

4　出土遺物について……71

5　おわりに……73

図 版 目 次

本文対照頁

PL. 1　金武古墳群空中写真……2

PL. 2　吉武E群遠景……9

(1) 北東から　(2) 近景（北東から）

PL. 3　吉武E群全景……9

(1) 調査前（南から）　(2) 調査終了後（南から）

PL. 4　吉武E3号墳……11

(1) 調査前全景（南から）　(2) 表土除去後

PL. 5　吉武E3号墳……11

(1) 墳丘除去後全景（南から）　(2) 玄室奥壁

PL. 6　吉武E3号墳……13

(1) 石室掘方（北から）　(2) 石室掘方（西から）

PL. 7　吉武E3号墳……14

(1) 閉塞状況（玄室から）　(2) 閉塞石除去後（玄室から）

PL. 8　吉武E3号墳石室各部……14

(1) 袖石（羨道から）　(2) 羨道右壁前面列石

PL. 9　吉武E3号墳出土遺物……15

PL. 10　吉武E4号墳……18

(1) 調査前全景（北から）　(2) 表土除去後（西から）

PL. 11　吉武E4号墳……20

(1) 表土除去後（南から）　(2) 石室掘方（南から）

PL. 12　吉武E4号墳……20

(1) 掘方と石室（北から）　(2) 掘方と石室（南から）

PL. 13　吉武E4号墳……20

(1) 奥壁　(2) 前壁（閉塞状況）

PL. 14　吉武E4号墳……22

(1) 閉塞状況と遺物出土状況（南から）　(2) 遺物出土状況（上から）

PL. 15　吉武E5号墳……24

(1) 調査前全景（南から）　(2) 完掘後（南から）

PL. 16　吉武E5号墳……26

(1) 石室全景（東から）　(2) 石室全景（西から）

ＰＬ．17　吉武Ｅ５号墳……26
(1)　奥壁　(2)　前壁および閉塞状況
ＰＬ．18　吉武Ｅ５号石室各部……26
(1)　玄室（上から）　(2)　前壁及び羨道（東から）
ＰＬ．19　吉武Ｅ４・５号墳出土遺物……22・26
(1)　Ｅ４号墳　(2)　Ｅ５号墳
ＰＬ．20　乙石Ｃ群遠景……29
(1)　東から　(2)　調査終了後（北から）
ＰＬ．21　乙石Ｃ１号墳……30
(1)　調査前（西から）　(2)　調査終了後（西から）
ＰＬ．22　乙石Ｃ１号墳……32
(1)　石室全景（東から）　(2)　石室全景（西から）
ＰＬ．23　乙石Ｃ１号墳……33
(1)　羨道閉塞状況（玄室から）　(2)　羨道閉塞状況（上から）
ＰＬ．24　乙石Ｃ１号墳石室各部……33
(1)　第１梱石及び第２梱石（羨道から）　(2)　羨道左側壁壁体構築状況
ＰＬ．25　乙石Ｃ１号墳遺物出土状況……33
(1)　轡　(2)　玄室右袖隅角部
ＰＬ．26　乙石Ｃ１号墳出土遺物Ⅰ……34
ＰＬ．27　乙石Ｃ１号墳出土遺物Ⅱ……36
ＰＬ．28　乙石Ｃ２号墳……38
(1)　調査前全景（西から）　(2)　調査前全景（東から）
ＰＬ．29　乙石Ｃ２号墳……40
(1)　石室全景（東から）　(2)　石室全景（西から）
ＰＬ．30　乙石Ｃ２号墳石室各部……40
(1)　玄室（西から）　(2)　玄室左壁（北から）
ＰＬ．31　乙石Ｃ２号……40
(1)　奥壁　(2)　前壁
ＰＬ．32　乙石Ｃ２号墳石室各部……40
(1)　羨道閉塞状況（開口部から）　(2)　羨道閉塞状況（上から）
ＰＬ．33　乙石Ｃ２号墳遺物出土状況……41
(1)　左袖隅角部分（北から）　(2)　同上（近接）
ＰＬ．34　乙石Ｃ２号墳出土遺物……42

ＰＬ．35　乙石Ｃ３号墳……44
(1) 調査前全景（南から）　(2) 表土除去後（東から）
ＰＬ．36　乙石Ｃ３号墳……44
(1) 石室全景（東から）　(2) 石室全景（西から）
ＰＬ．37　乙石Ｃ３号墳石室各部……45
(1) 奥壁　(2) 前壁及び梱石
ＰＬ．38　乙石Ｃ３号墳石室各部……49
(1) 羨道閉塞状況（西から）　(2) 羨道閉塞状況（東から）
ＰＬ．39　乙石Ｃ３号墳遺物出土状況……49
(1) 玄室及び羨道　(2) 右袖隅角　(3) 羨道内
ＰＬ．40　乙石Ｃ３号墳出土遺物Ⅰ……51
ＰＬ．41　乙石Ｃ３号墳出土遺物Ⅱ……51
ＰＬ．42　各古墳出土供献鉄滓……59
ＰＬ．43　鍛冶滓・製錬滓の顕微鏡組織……59

挿　図　目　次

頁
Fig. 1　早良平野の古墳群・鉄滓出土地分布図……3
Fig. 2　金武古墳群分布図（1:8000）……折り込み６－７
Fig. 3　古墳各部の名称……8
Fig. 4　吉武Ｅ群発掘作業風景……9
Fig. 5　吉武Ｅ３～５号墳地形測量図（1:300）……10
Fig. 6　Ｅ３号墳墳丘遺存図（1:200）……11
Fig. 7　Ｅ３号墳地山整形図（1:100）……12
Fig. 8　Ｅ３号墳閉塞部実測図（1:50）……14
Fig. 9　石室基底面実測図（1:60）……15
Fig. 10　Ｅ３号墳Ⅲ区墳丘裾部鉄滓出土状況……15
Fig. 11　Ｅ３号墳遺物実測図Ⅰ（1:2）……16
Fig. 12　Ｅ３号墳遺物実測図Ⅱ（1:3）……16
Fig. 13　Ｅ４号墳墳丘遺存図（1:200）……18
Fig. 14　Ｅ４号墳地山整形図（1:100）……19
Fig. 15　Ｅ４号墳閉塞部実測図（1:50）……21
Fig. 16　Ｅ４号墳石室基底面実測図（1:60）……22

Fig. 17　Ｅ４号墳遺物出土状況図（1:40）……23
Fig. 18　Ｅ４号墳遺物実測図（1:3）……23
Fig. 19　Ｅ５号墳掘方測量図（1:80）……24
Fig. 20　Ｅ５号墳墳丘断面図（1:60）……25
Fig. 21　Ｅ５号墳閉塞部実測図（1:50）……26
Fig. 22　Ｅ５号墳遺物実測図（1:3）……28
Fig. 23　乙石Ｃ群発掘作業風景……29
Fig. 24　乙石Ｃ群周辺地形図（1:1200）……30
Fig. 25　Ｃ１号墳地形測量図　（1:200）……31
Fig. 26　Ｃ１号墳閉塞部実測図（1:50）……32
Fig. 27　Ｃ１号墳遺物出土状況図（1:40）……33
Fig. 28　Ｃ１号墳遺物実測図Ⅰ（1:2）……34
Fig. 29　Ｃ１号墳遺物実測図Ⅱ（1:3）……36
Fig. 30　Ｃ２号墳閉塞部実測図（1:50）……38
Fig. 31　Ｃ２号墳地形測量図　（1:200）……39
Fig. 32　Ｃ２号墳遺物実測図Ⅰ（1:2）……41
Fig. 33　Ｃ２号墳遺物実測図Ⅱ（1:3）……42
Fig. 34　Ｃ３号墳地形測量図　（1:200）……45
Fig. 35　Ｃ３号墳墳丘遺存図　（1:200）……46
Fig. 36　Ｃ３号墳閉塞部実測図（1:50）……47
Fig. 37　Ｃ３号墳地山整形図　（1:100）……48
Fig. 38　Ｃ３号墳遺物実測図Ⅰ（1:2）……49
Fig. 39　Ｃ３号墳遺物出土状況図（1:40）……50
Fig. 40　Ｃ３号墳遺物実測図Ⅱ（1:3）……51
Fig. 41　Ｃ３号墳遺物実測図Ⅲ（1:3）……53
Fig. 42　各古墳石室平面図　（1:100）……65
Fig. 43　Ｃ１、２号墳石室の方眼による操作結果（1:60）……66
Fig. 44　Ｃ３、Ｅ３、４、５号墳石室の方眼による操作結果（1:60）……68
Fig. 45　各石室周壁展開図（1:80）……折り込み70―71
Fig. 46　須恵器杯蓋の分類（1:6）……72

付　図　目　次

本文対照頁

Fig. ①　吉武Ｅ３号墳墳丘断面図……13
Fig. ②　吉武Ｅ３号墳石室実測図……13
Fig. ③　吉武Ｅ４号墳墳丘断面図……20
Fig. ④　吉武Ｅ４号墳石室実測図……20
Fig. ⑤　吉武Ｅ５号墳石室実測図……26
Fig. ⑥　乙石Ｃ１号墳石室実測図……30
Fig. ⑦　乙石Ｃ２号墳石室実測図……38
Fig. ⑧　乙石Ｃ３号墳墳丘断面図……44
Fig. ⑨　乙石Ｃ３号墳石室実測図……44

表　目　次

頁

Tab. 1　金武古墳群一覧……折り込み6—7
Tab. 2　吉武Ｅ３号墳出土土器計測表……55
Tab. 3　吉武Ｅ４号墳出土土器計測表……55
Tab. 4　吉武Ｅ５号墳出土土器計測表……55
Tab. 5　乙石Ｃ１号墳出土土器計測表……56
Tab. 6　乙石Ｃ２号墳出土土器計測表……56
Tab. 7　乙石Ｃ３号墳出土土器計測表……57
Tab. 8　鉄滓・鉱滓の出土状態……59
Tab. 9　吉武Ｅ群・乙石Ｃ群各古墳規模一覧……63
Tab. 10　各古墳石室計測表……65
Tab. 11　吉武Ｅ群・乙石Ｃ群出土遺物一覧……おり込み70—71
Tab. 12　鉄滓供献古墳追加一覧……72
Tab. 13　杯蓋の分類対照表……73

Ⅰ はじめに

1 調査に至る経過

県道大野・二丈線は、日向峠をその境として、早良平野南部と糸島平野を結ぶ交通路である。昭和の初期に、今日の道路（4～5 m）に拡幅されたが、蛇行する山道のうえ各所で落石の危険があるため、昭和53年度より一部改良を含めて新設されることになった。

昭和53年度当初、教育委員会に対して土木局より大野・二丈線の工事計画と着工の通知があった。協議の結果、今年度工事施工区は、金武古墳群より西側に限られることとなり、54年度以降に金武古墳群以東の埋蔵文化財の調査を実施することになった。

ところが、その後の公共事業の増加に伴って、年度内施工区が延長され、金武古墳群を横断する路線を含むことになった。しかし、この計画変更は教育委員会に未連絡のまま行なわれ、9月には当該路線工事が発注・着工されるに至った。9月中旬、土木局より古墳発見の通報があり、ただちに文化課職員（柳田）が現場におもむいて踏査した。その結果すでに工事着工の路線内に3基（乙石C1～C3号墳）と、未着工路線内に2基（吉武E3・4号墳）の古墳が確認された。前者の3基のうち、1基は玄室の大半が削りとられ、他の2基も墳丘裾の一部が削平されていたのである。

教育委員会は、かかる事態を重視し原局に対して厳重に注意するとともに、当該部分の工事を停止させて原局との協議を行った。その結果、路線変更ならびに施工期間の延長が不可能という状況から、年度内施工路線内に存在する6基（先の5基に加えて、調査中に1基検出）の古墳を発掘調査することになった。発掘調査は、53年9月27日より11月5日までの略1月を要した。調査対象となった6基のうち、工事によって全壊する4基については全面調査を、一部が路線内にかかる2基については、主体部ならびに当該部分の調査を行った。

調査の構成と組織は以下のとおりである。

1 構成

調査委託者	福岡市土木局
〃 主体	〃 教育委員会

2 組織

調査担当	教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係
事務担当	三宅安吉（埋蔵文化財係長）国武勝利
発掘担当	柳沢一男・山崎龍雄
〃 補助	宮内克己・福尾正彦・長津宗重・為貞由起・横大路俊明（以

上九州大学考古学研究室）福岡大学歴史研究部考古学班（千々和謙策班長）

地元協力者　牛尾準一・牛尾くめ・青柳みち子・結城しず・結城きみえ・結城ちか子・忽慶とみ子・細川正枝・細川綾子・柴田信子・伊藤みどり・平田くま・吉住ふさの・平田キミ子・青浦八重子

2　古墳群の位置と歴史的環境（Fig. 1）

本書に収めた吉武E群・乙石C群は，金武古墳群と総称される大形群集墳の支群である。金武古墳群は早良平野の南西端に近く、室見川左岸に発達した扇状地と、その周囲をとりまく山麓に分布する古墳群である。国土地理院作製の 1／5 万地形図（福岡）では、上端より31.8cm、左端より10.5cmの位置にあたる。

早良平野および周辺山麓部における遺跡、古墳群の調査は、開発事業の増加に伴ない、この10年間で50遺跡をこえる。そのうち古墳の調査は、16の古墳群にわたり、計92基におよぶ。昭和53年度の早良平野分布調査によって約 700 基の後期群集墳が確認されている[1]。先の調査古墳は、1・2例を除いてすべて後期群集墳であり、全体の 1 割強を占める。地域的には限られた傾向にあり、必ずしも全域の様相を適確に把握されているとはいいがたいが、これまで蓄積された資料と、分布調査のデーターによって、早良平野の後期群集墳を概観しておきたい。こうした作業は、特異な政治過程にあった 6・7 世紀の早良地域史の復原を目指すと同時に、新たに発見された後期群集墳の保存論理を組みたてる基礎作業でもある。

早良平野は、西を長垂・叶嶽山塊、東を油山から北に延びる飯倉丘陵によって画された沿岸性の小平野である。後期群集墳は、平野をとりまく山麓、丘陵部を埋めつくすように分布している。とくに叶嶽東麓、油山西北麓には大形群集墳の形成がみとめられる。まず、古墳群の分布状況から 7 つの地域に分け、群の具体的な様相をみておきたい。

① 長垂山東麓部[2]（Fig. 1　1～5）

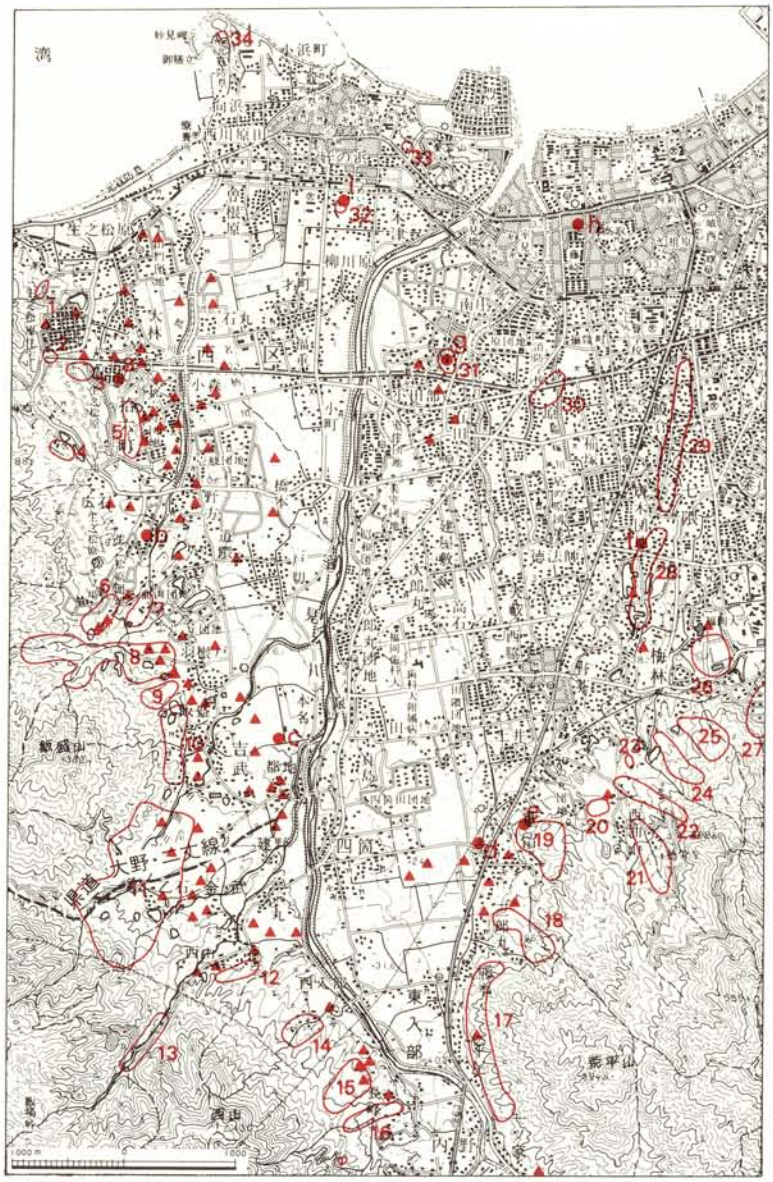
開発に伴って調査された古墳群が多く、現存するものは少ない。以前、ゴルフ場造成の際に相当数の古墳が破壊されたと伝えるが実態は明らかでない。それを除けば、1～5の古墳群は規模が少さく、10基をこえるものはない。また各群の分布は散慢で、墓域の設定は小範囲に点在して行なわれた傾向をみせる。このなかで、墳丘、石室規模の突出した群はみられず、支群中にやや優位性を窺わせる規模の古墳がみとめられる程度である。たとえば、草場 1 号墳、高崎 2 号墳が方墳を採用し、石室規模も通有なものに較べて大形である。

本地域における後期古墳の出現は、高崎古墳群の 1・6 号墳に求められる。両者とも竪穴系横口式石室を主体部として、6 世紀第 2 四半期の造営である。6 世紀も後半代になると、他の

群においても古墳の造営が開始され、7世紀第1四半期には終焉する。その後、一部に7世紀後半代の終末期古墳ともいうべき小形石室が造営されているが、数は少ない。

② 叶嶽東麓部（Fig.. 1　6～11）

飯盛山を境に、二つの大形群集墳（羽根戸．金武）と、20基前後からなる野方、羽根戸南古墳群および飯盛古墳群（4基）がある。



1．草場古墳群（6）
2．草刈古墳群（6）
3．高崎古墳群（6）
4．広石古墳群（9）
5．コノリ古墳群（8）
6．野方古墳群（18）
7．野方観進古墳群（1＋α）
8．羽根戸古墳群（143）
9．羽根戸南古墳群（20）
10．飯盛古墳群（4）
11．金武古墳群（147）
12．西山古墳群（3）
13．黒塚古墳群（4）
14．黒塔古墳群（9）
15．白塔古墳群（22）
16．長峰古墳群（19）
17．荒平古墳群（31）
18．三郎丸古墳群（17）
19．重留古墳群（26）
20．山崎古墳群（10）
21．西油山古墳群（33）
22．霞ヶ滝古墳群（54）
23．影塚古墳群（2）
24．駄ヶ原古墳群（54）
25．大谷古墳群（11）
26．七隈古墳群（8）
27．倉瀬戸古墳群（16）
28．干隈古墳群（13）
29．飯倉古墳群（7）
30．原古墳群（2）
31．有田古墳群（2）
32．五島山古墳群（4）
33．景雲寺古墳
34．小戸古墳
a．宮の前C1号墳
b　野方箱形石棺墓
c．樋渡古墳
d．灰塚古墳
e．重留石棺墓
f．干隈A2号墳
g．有田1号墳
h．藤崎石棺墓
i．五島山古墳

Fig．1　早良平野の古墳群・鉄滓出土地分布図　▲は鉄滓出土地　○は古墳群　古墳群の（　）内は基数

羽根戸古墳群[3]は、立地と分布状況によって15支群に分けることができる。支群構成は様々である。そのなかでもH群（3基）は、他の支群を稜駕する規模の一群であり、いわば羽根戸古墳群を統括する首長世代墓と解される。6世紀第3四半期（Ⅰ期）、第4四半期（Ⅱ期）7世紀の第1四半期（Ⅲ期）に各1基づつ造営されている。また、首長墓群と通有な小形墳群との中間規模の支群や、さらに大形墳を含む支群などの存在は、大形群集墳を構成する集団内部の階層分化を表出したものであろうか。

羽根戸古墳群の形成開始期は、調査例が少なく明らかでないが、第Ⅰ期首長墓造営をやや遡る時期に求めるのが妥当であろう。大半の支群は第Ⅱ期に始まり、第Ⅲ期でその造営を終える。しかし、7世紀中葉以降になって、従来墓域が設定されなかった場所に、新たに単次葬の小形古墳が造営されている。

羽根戸古墳群の南・北側には、20基前後からなる羽根戸南・野方古墳群がある。野方古墳群は2次にわたって16基が調査され、その形成開始期は6世紀前半代にあるという[4]。

羽根戸南古墳群は、5支群からなり、いづれも2～3家族の世代墓と思われる。突出した支群はないが、大形墳を含む支群がある。6世紀第3四半期に造営が開始され、7世紀第1四半期に終える。終末段階の小形石室墳は見あたらない。なお金武古墳群は後節で扱うので、ここでは割愛する。

③　西山北東麓部（Fig.1　12～16）

北麓に黒塚・西山古墳群[5]がある。谷あいを入った位置にあり、小規模な群である。6世紀後半に始まり、7世紀第1の四半期には造営を終えており、大形墳はみあたらない。

東麓には、谷に沿った斜面、丘陵上に10～20基からなる古墳群がある。白塔・黒塔・長峰古墳群は、各々独立した墓域を設定しているが、同質的な群構成がみとめられる。いずれも2～3の支群からなり、各4～9基程度のまとまりがあって，家族世代墓の複数構成である。支群中に大形墳はみとめられるが、突出した群は存しない。6世紀第3四半期に始まり、7世紀第1四半期に終える。

④　油山西麓部（Fig.1　17～19）

各古墳群は、最大9基，他は2～4基程度の支群で構成される。きわだった群集性はなく、尾根線や傾斜面ごとにまとまる。規模の大きな古墳も1、2みとめられるが、突出したほどのものはない。6世紀後半～7世紀前半の造営で、墓域の設定は①、③地域に類似する。

⑤　油山西北麓部[6]（Fig.1　20～26）

広く西油山古墳群と称すべき地域である。一古墳群の構成基数が多く、支群の群集性も高いが、七隈・大谷古墳群は、尾根頂部に古墳を造営する特異な分布をしめしている。

規模の突出した支群はないが、影塚古墳群（2基）は、山麓の丘陵上にあって他の群とは構成が異なり、相対的にやや大形といえる。他に支群中に大形墳を含むものもあるが、継続して

造営された様相はみとめられない。

本地域の古墳造営開始期は、6世紀の第3四半期の初め頃に求められ、第4四半期にはすべての群で造営が行なわれている。7世紀第2四半期には造営は休止するが、後半代になって単次葬の小規模石室墳が営まれている。この段階の古墳が群集する支群もある。

なお27の倉瀬戸古墳群以東の東油山古墳群も律令時代早良郡に含まれるが、ここでは扱わない。

⑥　飯倉丘陵部（Fig.1　28・29）

低丘陵尾根部の平坦面に分布する古墳群がある。その大半は宅地開発によってすでに失なわれ、現存する古墳は少ない。未調査のまま破壊された古墳が多いため、不明瞭な点が多い。全体的に分布状況は散慢で、密集例は少ない。近年調査された干隈B群2号墳[7]は、竪穴系横口式石室を内部主体にしており6世紀前半代に遡る例である。

⑦　平野北部[8]（Fig.1　30〜33）

32・33の単独墳を除いて、破壊され現存しない。他に古墳があった可能性もあるが、これまでの聞き込み調査では不分明である。これまで見てきた古墳群の墓域配置などからして、群集墳の形成された可能性は少ないと思われる。小戸古墳は6世紀第4四半期の造営である。

以上、各地域の群集墳について駆足で概観した。紙数の関係で充分な記述はできなかったが、つぎにいくつかの問題点を整理して早良平野の群集墳を考えてみよう。

まず第1に、群集墳形成前段階との関係である。すでに明らかにされているように、早良平野には前〜後期を通じて前方後円墳がみとめられないのである。森貞次郎氏は、早良平野の自然条件が充分でないこと、交通、産業資源上の拠点たりえないこと、それにまして、弥生時代以降、怡土、那国の権力にはさまれ、自立性が弱く、6世代には磐井の乱以後中央勢力の北部九州滲透の一拠点になったことに起因すると指摘されている[8]。以後の調査の成果によって，自然条件等による要因は訂正されねばならないが、前〜中期の造墓活動の乏しさは、否定しえない。前方後円墳以外に系譜を辿ることができる大形墳の系列もなく、平野を統括する権力は析出されていない。中期段階で、平野を三分するごとく三基の大形円墳（c、d、g）があることは、一定の地域を支配する首長の存在が予想されるが継続しない。

つぎに、6世紀後半以後の群集墳形成にふれておこう。上述したように、群集墳形成前の造墓活動は乏しく、その直接の関連はみとめられない。かつて、亀井明徳氏は、早良平野内の群集墳は地域的に7つの群に分かれ、それが律令時代下の郷に大略一致するとし、その総体が早良郡になるとされた。氏はさらに、観世音寺奴婢帳の天平2・3年の記事に早良郡司として「擬少領無位早良勝在判第子」の名前がみえることから、早良平野の古墳時代に、渡来人の文化が残されているのではないかと問題を提起され[9]、また早良郡の条里を復原した日野尚志氏も早良の地名が朝鮮語で大きな集落を意味するセフリ・シウリ・ソールに通じるとして、早良

平野の開拓に渡来人が関与した可能性があるとされた⑩。

両氏とも、その具体的内容には触れていないが、ここ数年の調査によって、早良平野が古墳時代後期から律令時代にかけての鉄生産に重要な位置をしめていることが明らかになったことは重要である。現在、鉄製錬の際排出される鉱滓の出土地は、平野内ですでに100ケ所以上を数え、また周辺に分布する群集墳への鉄滓供献例も40例をこえている。

また古代朝鮮三国時代の文物も数多く出土している。陶質土器は、広石古墳群より百済土器⑪、金武古墳群吉武L群より新羅土器3点、有田遺跡では数点が出土し⑫、室見川左岸扇状地の二ケ所から新羅土器が採集されている。このように豊富な朝鮮系文物と、鉄生産を営なんだ背景には、渡来人の存在を抜きには考えがたい。この意味で奈良時代の初めに、勝姓郡司がみられることは、当時の鉄生産体制を考えるうえで示唆的である。

以上述べきたったところから導びかれて、早良の群集墳形成に上述の鉄生産が大きな基盤となったと考えたい。早良郡の郷名に中央氏族名が冠せられたことは、古墳時代後期以降、鉄生産が豊富で良質な砂鉄を背景に中央権力主導のもとに行なわれた結果と想定される。三個所の大形群集墳は、かかる鉄生産に関与した集団の墓域であり、中・小群集墳を在地共同体の墓域と考えることもできるのではなかろうか。

註① 福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）1979

② 本地域にはつぎの調査報告がある。三島格・村岡和夫・松村道博『草場古墳群・斜ケ浦瓦窯址』1974
栗原和彦ほか「高崎古墳群」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』Ⅰ・Ⅲ 1970・73
山崎純男・柳沢一男・浜石哲也『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）1977

③ 浜田信也『羽根戸古墳群』（福岡県埋蔵文化財調査報告第57集）1980

④ 調査を担当した鈴木重治氏の教示による。

⑤ その後の分布調査によって，本書に述べる名称に変更した。
佐田茂ほか『金武古墳群調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集）1971

⑥ 本地域にはつぎの調査報告がある。
佐藤伸二・藤田和裕『影塚第1号墳発掘調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集）1972
緒方勉ほか『大谷古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集）1972
福岡大学歴史研究部『駄ケ原古墳群・霞ケ滝古墳群分布調査概要』1976

⑦ 1979年調査。調査を担当した井沢洋一氏の教示による。

⑧ 森貞次郎編『有田遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集）1968

⑨ 亀井明徳「古墳時代の早良平野」『宮の前遺跡（A～D地点）』所収 1971

⑩ 日野尚志「律令時代における早良平野の開発」『有田遺跡』所収 1968

⑪ 柳沢一男「福岡平野を中心とした古代製鉄について」 大澤正己「福岡平野を中心にした鉱滓の分析」『広石古墳群』所収

⑫ 山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」『古文化談叢』第6集 1979

Fig. 2　金武古墳群分布図（1:8000）

Tab. 1　金武古墳群一覧　（1980年３月現在）

地図番号	支群名称	所在地	総基数	現存基数	群の概要	備考
1	吉武A群	吉武・長石	5	5	３つの単位群を含む。１号墳は終末期。５号墳は６Ｃ後半。２号墳は６Ｃ末。３・４号墳は石室埋没，不明。	
2	〃 B群	〃・〃	10	10	単位群は不明。１・２・３・５・８は６Ｃ後半。９号墳は７Ｃ初。４・６号墳は終末期。７号墳は不明。	
3	〃 C群	〃・〃	7	4	３つの単位群を含む。２号墳は６Ｃ後半。３号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。１号墳は終末期。一家族世代墓。他は不明。	
4	〃 D群	〃・〃	12	12	単位群は不明。11号墳は複室で６Ｃ後半。12号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。９号墳は終末期末期。一家族世代墓。他は不明	
5	〃 **E群**	〃・〃	5	2	２つの単位群を含む。３～５号墳は７Ｃ中葉以降の終末期１・２号墳は石室埋没，詳細不明。	３～５号墳は本書収録
6	〃 F群	〃・〃	2	1	１つの単位群。１号墳は６Ｃ後半。石室は川の崖面に⅓残存。２号墳は昭和30年代に破壊。詳細不明。	
7	〃 G群	〃・七郎谷	4	4	２つの単位群を含む。１・２号墳は６Ｃ後半。３・４号墳は６Ｃ末～７Ｃ前葉。二家族の世代墓。	
8	〃 H群	〃・〃	10	10	５つの単位群を含む。１・５・７・８号墳は６Ｃ後半。２・３・４・６号墳は石室埋没。10号墳は単独６Ｃ後半。	
9	〃 I群	吉武・萩原 金武・乙石	6	2	２基のみ現存。他は昭和20～30年代に破壊。詳細不明。２・３号墳も墳丘の一部を残すのみ。	
10	〃 J群	〃・萩原	8	8	単位群は不明。１～４号墳は西に，５～８号墳は東に開口する石室。３・７号墳は複室。６Ｃ中～後半。	
11	〃 K群	〃・鳥越	12	9	単位群は不明。９号墳は複室。２・６・８号墳は６Ｃ中葉７・９・10号墳は６Ｃ後半。７号墳は奥壁に彩色画	通称熊山古墳群
12	〃 **L群**	〃・塚原	8	0	単位群は不明。１・３・４号墳は首長墓の系列か。４・６号墳は６世紀前～中。他は６世紀中～後。	通称塚原古墳群　①
13	〃 M群	〃・七郎谷	3	3	１つの単位群。１号墳は６Ｃ後半。２号墳は７Ｃ初。３号墳は終末期。一家族の世代墓。	
14	〃 N群	〃・仙谷	3	3	２つの単位群を含む。３号墳は単独，終末期。２号墳は６Ｃ後半。３号墳は後半～末。２・３号墳は家族世代墓。	
15	〃 O群	〃・草場	5	5	単位群は不明。２・３号墳は複室，６Ｃ後半。２・４号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。１号墳石室は埋没。二家族の世代墓。	
16	〃 P群	〃・牛谷	10+α	10	単位群は不明。２・３・８・９・10号墳は６Ｃ後半。４・５・６号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。１号墳は終末期。	
17	〃 Q群	〃・仙谷	2	0	昭和の初期に開墾のため破壊。詳細不明。	
18	〃 R群	〃・道面	2	2	やや離れた２基からなる。１号墳は大形石室，６Ｃ後半。２号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。	
19	乙石A群	金武・乙石	3	3	２つの単位群を含む。１・２号墳は６Ｃ末。３号墳は７Ｃ前葉。２・３号墳は一家族世代墓か。	
20	〃 B群	〃・〃	7	7	単位群は不明。１・５号墳は６Ｃ中～後半。３・４号墳は６Ｃ後半。６号墳は６Ｃ末。他は石室埋没，詳細不明。	
21	〃 **C群**	〃・〃	3	2	２つの単位群を含む。１・２号墳は６Ｃ末。３号墳は７Ｃ初。２・３号墳は一家族世代墓。	１～３号墳は本書収録
22	〃 D群	〃・〃	1	1	単独墳。周辺に古墳をみない。墳丘北半を削除されている石室は不整な複室構造。６Ｃ中～後半	
23	〃 E群	〃・〃	4	4	３つの単位群を含む。１・３号墳は６Ｃ後半。２・４号墳は石室埋没。３・４号墳は一家族世代墓か。	
24	〃 F群	〃・平原 笹原	8	8	５つの単位群を含む。２・４・６・７・８号号墳は６Ｃ後半。１・３・６号墳は６Ｃ末～７Ｃ初。７号墳は折上天井	
25	〃 G群	〃・頭ノ尾	3	0	昭和30年代に破壊。詳細不明	
26	〃 **H群**	〃・〃	2	2	金武古墳群の首長墓群。２号墳は径30mをこえる。１号墳は単室，２号墳は複室。２→１号墳。６世紀後半～末。	通称夫婦塚　②

① 1979年市教委調査『吉武塚原古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集）1980

② 1978年　〃　『四箇周辺遺跡調査報告書(3)』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集）1980

3　金武古墳群の構成（Fig. 2）

金武古墳群は、147基（うち現在113基―1980年現在）からなる大形群集墳である。その分布は、室見川に流入する日向川の扇状地平坦面、周囲の丘陵、山麓斜面や尾根上に拡がり、東西1.2㎞、南北1.5㎞の範囲である。本古墳群の南北の境は明瞭であって、墓域が限られた範囲に設定されたといえる。

本古墳群は、分布状況、立地ならびに古墳相互の関係から、26の支群に分かたれる。一支群の構成は、単独墳、1単位群からなるもの、数個の単位群を含むもの、あるいは一時期に集中して群をなすばあいもある。すべての古墳を実見し、まとめたメモを基礎にして各支群の概要をTab. 1に記した。誤まりも少なくないと思われるが、一つの傾向は理解されるであろう。

これまで調査され、内容の明らかな支群について概要を紹介しておこう。

① **吉武L群**（通称吉武塚原古墳群）……1979年市教育委員会調査[1]

日向川によって成形された扇状地平坦面に、8基で構成されている。本支群は、すべての古墳に幅4～8 mの周溝がのこり、墳丘規模も大きい。6世紀の第2四半期に始まり第3四期、第4四半期に各1基づつ造営された3基の大形墳の系列と、それによりやや小形の古墳（6世紀第2四半期と第3四半期の造営）5基に分かれる。大形墳の系列は、後に述べる金武H群との関係が問われる。本支群は豊富な遺物を出土し、とくに3点の新羅土器と鋳造鉄斧、および全古墳から多量の鉄滓が出土したことは注目される。3・5号墳の墳丘盛土内からは鞴羽口が検出され、5号墳では、椀形滓（鍛冶滓）が伴っている。

② **乙石H群**（通称夫婦塚）……1978年市教育委員会調査[2]

径30m余りの二基の大形墳からなる。1号墳は、全長10.5mの単室の横穴式石室、2号墳は10.5mの複室構造の横穴式石室を内部主体とする。2号墳は6世紀第4四半期、1号墳は、それよりやや遅れた造営であり、金武古墳群の後半期を統括した首長墓群といえる。二基とも玄室～羨道・墓道から鉄滓が出土している。

③ **吉武E群・乙石C群**……1978年市教育委員会調査（本書収録）

吉武E群は、終末期段階に新たに墓域が設定され、造墓を行った小形墳で構成される支群であり、調査した3～5号墳から鉄滓が出土した。乙石C群は3基からなり、6世紀末～7世紀初め頃造営された古墳群である。3号墳から鉄滓が出土した。

他に、吉武L群の東側丘陵上のK群7号墳は、奥壁に赤一色の彩色画がある。いまのところ、金武古墳群の形成開始期は、吉武L群にみとめられ、造営の終末は吉武E群のように7世紀中～後半代にあると想定される。群を統括する首長の墓域は、吉武L群と金武H群であり、前者から後者へと墓域を移動したものと思われる。

註① 調査を担当した二宮忠司氏の教示による。『吉武塚原古墳群』（福岡市埋文報告第54集）1980。
② 調査を担当した塩屋勝利氏の教示による。『四箇周辺遺跡調査報告(3)』（福岡市埋文報告第51集）1980。

Ⅱ　調査の概要

1）経　過

発掘調査地点は、吉武Ｅ群・乙石Ｃ群の二支群に分かれていたため、工事関係者との協議によって、吉武Ｅ群を先に行い、その完了前に乙石Ｃ群の調査に入った。吉武Ｅ群の調査は９月27日より10月17日まで、乙石Ｃ群は10月15日より11月５日まで行った。

吉武Ｅ３～５号墳は、路線拡幅によって全壊するために、主体部・墳丘外去のほか封土を除去して基底面を露出する全面調査を行った。乙石Ｃ群は路線工事が一部着工され破壊部分もあったことと、墳丘の大部分が工事対象外でもあったため、１・２号墳は主体部のみを、３号墳は全面調査を行った。調査における地区設定、石室各部の名称は Fig.3 のように統一した。

2）各古墳の概要

吉武Ｅ３号墳は、横穴式石室を内部主体とした小形の円墳である。傾斜面に立置したため、墳丘盛土の残存状況はよくない。石室内はすでに荒され、土師器のほか鉄滓が出土した。

吉武Ｅ４号墳は、横穴式石室を内部主体とした小形の円墳である。墳丘の遺存状況は悪い。石室内はすでに荒れており、わずかに羨道閉塞石前面に、最終追葬時に伴う土器・鉄滓が出土した。

吉武Ｅ５号墳は、横穴式石室を内部主体としているが、以前の道路拡幅の際石室の南半が削除されていた。石室内より土器・鉄滓が出土した。

乙武Ｃ１号墳は、工事によって玄室後半部を失ったが、約10mほどの円墳である。玄室前半部ならびに羨道後半部から土器・鉄製品が出土したにすぎない。墳丘未調査。

乙石Ｃ２号墳は、横穴式石室を内部主体としている。墳丘は未調査。玄室は、略円形の胴張りプランである。石室内はすでに荒れており、玄室、羨道から須恵器数点が出土した。

乙石Ｃ３号墳は、横穴式石室を内部主体とした小形の不整な円墳である。墳丘の遺存は悪い。石室内はすでに荒れており、土器・鉄斧・鉄滓が出土した。

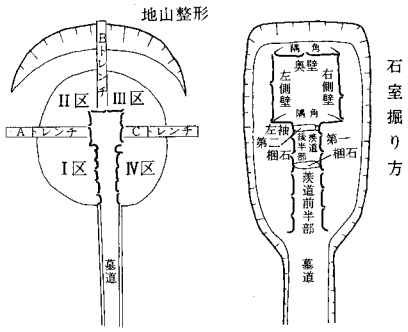


Fig.3　古墳各部の名称

Ⅲ　吉武E群の調査

1　吉武E群の調査概要

本古墳群は、福岡市西区吉武字長石に所在する。飯盛山（標高 382m）の南東にのびる尾根筋の南西斜面に立地する。同斜面にはE群の５基をはじめとして、他に30基前後の小古墳が群集している。斜面下方には日向峠に源を有する日向川が流れ、谷を形成している。E群５基中３基を調査した。古墳番号は福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）に従って、吉武E３、E４、E５号墳と呼ぶ。

３～４号墳は、調査前には斜面上部からの流土の堆積によって深く埋没し、明確な墳丘を認めることはできなかった。わずかに露出した天井石や、開口した石室、斜面と墳丘を画する凹地によって識別しうる程度であった。５号墳は斜面崖面上に位置し、３・４号墳の調査中、偶然に発見された。３号墳から５号墳まで、直接距離にして 40m 位であるが、標高は90～103mとかなり比高差を持つ急斜面に構築されている。

調査は３・４号墳を中心にそれぞれトレンチを入れた範囲を全面発掘した。しかし５号墳においては、調査中の発見及び時間の制約、さらに崖面に立地するという条件の悪さから主体部の調査のみに終った。

調査の結果、石室は３・４号墳墳とも斜面に直交して南東方向に開口する。しかし５号墳は、斜面に斜交して東方向に開口する。又古墳築造法から見ると、斜面に立地する古墳に通有の地山整形が認められた。本群の場合、地形の高所部の斜面にのみ行なわれており、平面形は馬蹄形を呈する。各古墳ともすでに盗掘を受け、出土遺物は総じて少量であった。

Fig. 4　吉武E群発掘作業風景

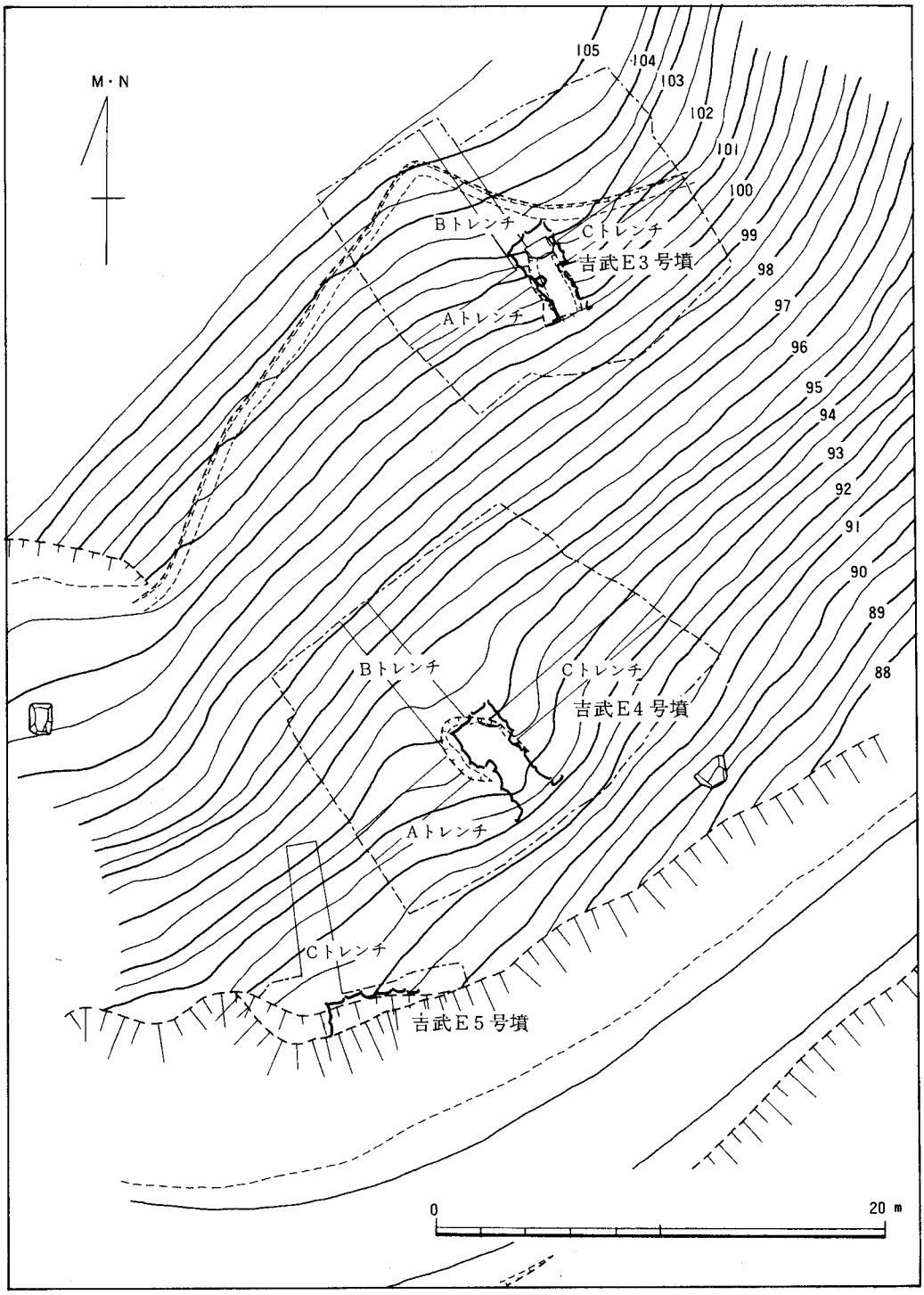


Fig. 5　吉武E３～５号墳地形測量図（1:300）

2　吉武E３号墳

1）位置と現状（Fig.5、6、7）

丘陵の南西斜面標高 99～104m に位置し、３基中最も高所にある。周囲は所々花崗岩岩脈の露頭が見られる。比較的灌木が多く、荒れた感じを受ける。調査前の観察では、墳丘はほとんど高まりを持たなかった。ただ石室玄室部が陥没し、天井石の一部が露出していた事から、古墳の存在が確認出来た。調査の結果、小規模ではあるが、やや変則的な単室両袖型横穴式石室を検出した。

2）墳　丘（Fig.②、7）

地山整形　本墳は丘陵の南東側の比較的急な斜面に、等高線に直交して石室を構築する。石室背後の高所部Ⅱ区からⅢ区にかけて、地山整形による馬蹄形溝がめぐる。馬蹄形溝の起点

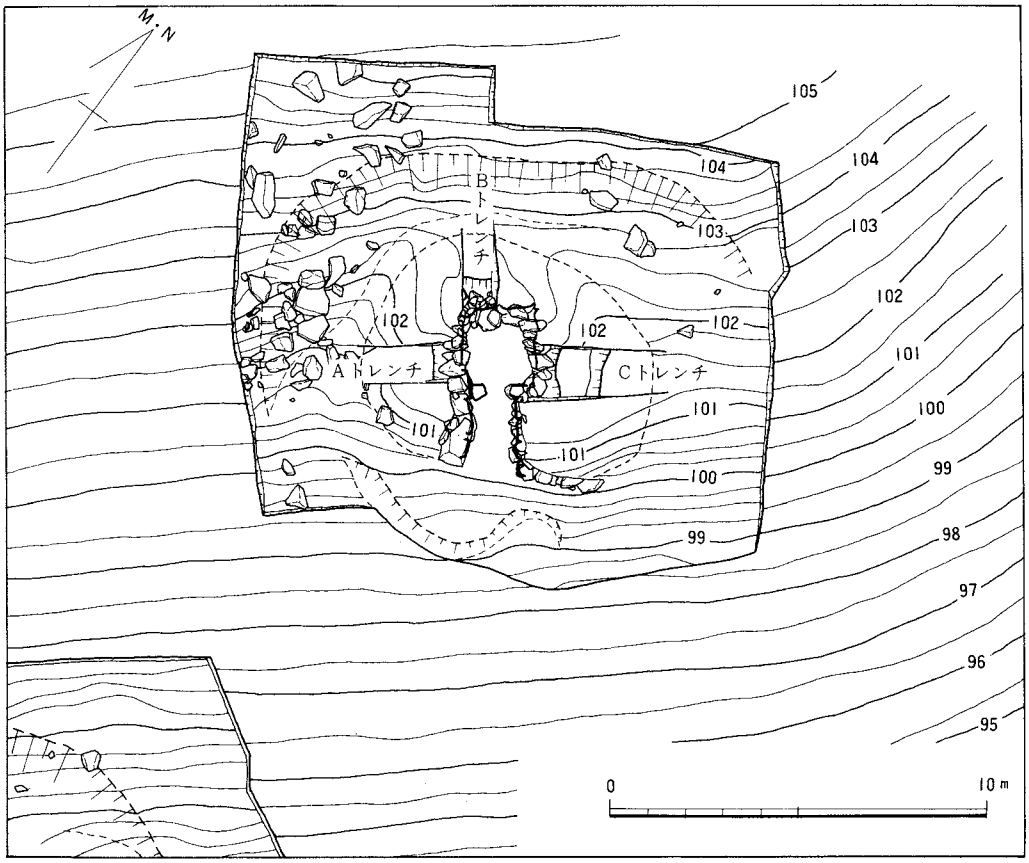


Fig.6　E３号墳墳丘遺存図（1:200）

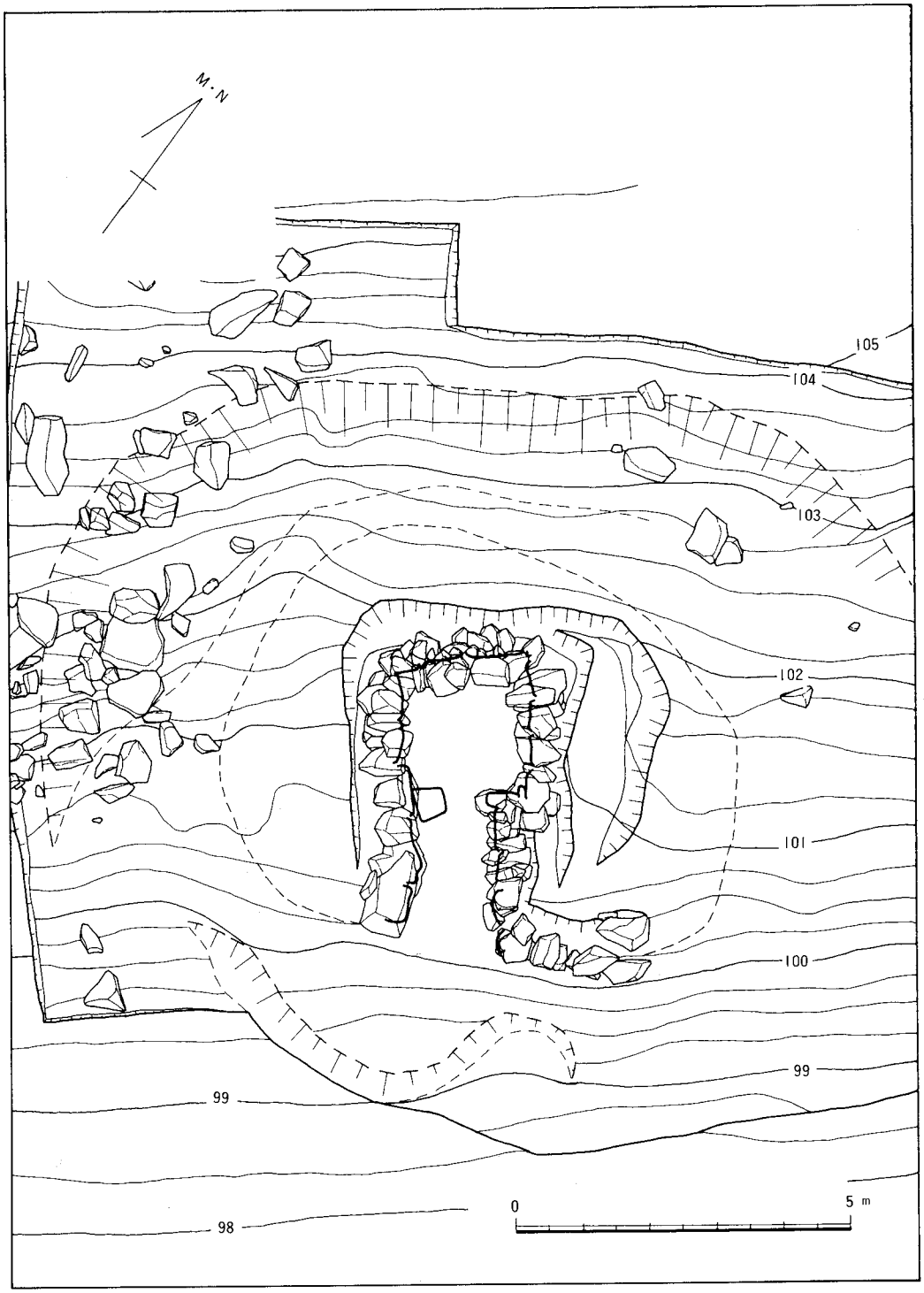


Fig. 7　E 3 号墳地山整形図（1:100）

はBトレンチにおいては、二次堆積層を切り込むように始まる。幅は２～３ｍ、浅くくぼむ程度である。馬蹄形溝前面は、墳丘基底面としてテラス状に張り出すように削平整地される。

墳丘　急斜面に位置しているためか、現状ではかなり盛土が流出している。現存高は、石室奥壁部で基底面より1.5ｍを測る。墳丘の直径は、東西８ｍ、南北6.5ｍを測り、不整の楕円形を示す。

墳丘盛土は、地山と同じ花崗岩バイラン土を主に用いる。墳丘盛土の形成は大きく二段階に分けることが出来る。第一段階は石室構築における裏込め的なものとして、壁石の積み上げに平行して、叩きしめ盛り上げる。叩きしめは弱い。第二段階は、天井石の被覆と墳形を整えるために雑に盛り上げる。全体的に盛土はさほど丁寧に行なっておらず、層位の違いはそれほど明瞭でない。

３）横穴式石室（Fig.②、７、８、９）

本墳の埋葬施設は、開口主軸方向をＳ－36°－Ｅに取り、略南東方向に開口する単室両袖型横穴式石室である。石室の遺存状況は、一部天井石まで残り比較的良好であったが、石室内部は、流土によって深く埋没していた。

石室平面形は、方形の玄室とほぼ同じ長さの羨道を連接する。石室全長は、左壁3.7ｍ、右壁4.45ｍを測り、右壁がやや長い。右壁先端から連続して列石が墳丘南東裾をめぐる。使用石材はすべて花崗岩であった。

玄室　奥壁幅1.93ｍ、前幅1.70ｍ、左壁長1.75ｍ、右壁長2.00ｍを測る。やや形のいびつな方形プランを呈す。壁体の遺存状況は、左右両壁とも奥壁に近い部分程上段まで残存し、特に奥壁は天井石架構面まで残存した。

各壁体の構成は、左壁は腰石３石、内２石は横位に、１石は縦位に立てる。未加工の転石を用い、奥壁に近い部分程大ぶりの石材を使用する。石積みに目立った特徴は見られず、腰石から内傾して持ち送る。右壁は腰石４石で、幅は平均50～60㎝、高さ平均１ｍ前後の細長い転石を、すべて縦位に立てる。全体に上下・左右に目路が通るように内傾して積み上げる。石材は上に行く程小さくなり、各壁石間には左壁と同様に小ぶりの転石を充塡して上端をそろえる。奥壁は腰石３石で、左から0.9ｍ×0.3ｍ、1.0×0.6ｍ、1.0×0.95ｍを測り、左の２石は縦位に、右の１石は横位に立てる。右の一石が奥壁幅の1/2を占める。２段目以上は、大きさの不ぞろいな転石を用いて、雑に積み上げる。各壁石間には小ぶりの石材が補充される。壁体は腰石から内傾し持ち送る。最上部５段目に天井石が架構される。壁面の現存高は、奥壁で、石室基底面から最高2.02ｍを測る。

玄門部は、ごく簡単な袖石が両側につく。左袖幅0.45ｍ、右袖幅0.55ｍを測る。玄門は玄室中軸よりやや左にずれる。右袖石は、高さ１ｍ位の細長い石材を羨道側に内傾気味に立てる。

左袖石は、底面が0.45×0.5mの方形を示し、高さ約0.7mの四角錐を呈する石材で、内傾気味に立てられる。玄室左壁から羨道左壁と直接に続く事から、本来は片袖型石室を意図していたと思われる。

床面は撹乱を受けているためか、敷石は玄門に近い部分のみ残存したにすぎない。石材は20～30cm位の扁平な転石である。

羨道　左壁長2.30m、右壁長2.40mを測り、やや右壁が長い。奥幅は玄門部で0.7m、前幅は開口部1.25mを測り、玄門部のみ狭くなる。

各壁体の構成は、左壁は2段迄しか残存していないが、腰石は玄室腰石とほぼ同規模の石材を用いている。2段目以上もかなり大きな石材を積み上げる。特に左壁先端は、長さ1.2m程度の巨大な石材を積む。右壁腰石は玄室よりやや小さめの石材を用いて、2段目以上も更に小ぶりの転石を使用する。袖石の間には0.67×0.40m、厚さ0.3mの断面長方形の梱石を配している。羨道床面は中程から急に傾斜して下方に向う。

墓道　認められない。明確な墓道はなかったと考えられる。

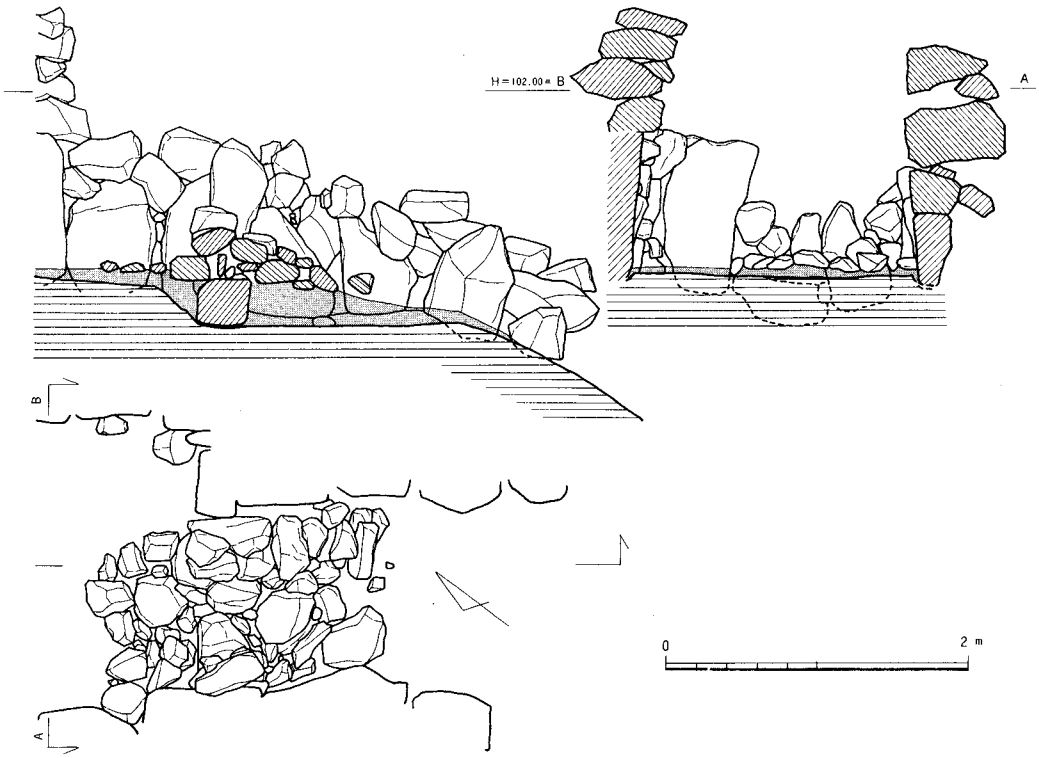


Fig. 8　E 3号墳閉塞部実測図（1:50）

閉塞施設　梱石上から長さ1.2m、高さ0.3mで上半部を欠失して存在した。積み方は閉塞前面及び内面も雑に積み上げる。石材は花崗岩の転石を用いる。大きさは、人頭大からこぶし大まで、大小さまざまである。

石室掘方　斜面に直交して掘削されている。長さ4.5m、最大幅4.9m、深さ1.26mの隅丸方形をしめし、右側は２段の掘り方を有す。掘方はやや勾配をもって掘り下げる。腰石の安定をはかるために、わずかな腰石掘方が作られている。

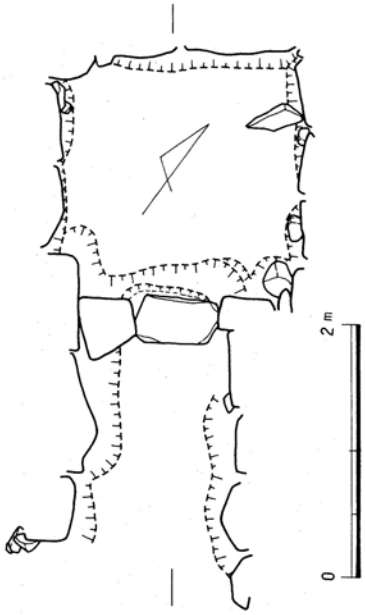


Fig. 9　石室基底面実測図（1:60）

４）出土遺物（Fig. 12）

遺物は、石室内、及びⅢ区墳丘より出土した。玄室内はすでに盗掘を受け、ほとんど遺物が出土しなかったが、若干土師器の盤や杯蓋、U字形鋤先、鉄滓（６個）が出土した。Ⅰ区墳丘土からは、土師器の盤、Ⅲ区墳丘裾部より鉄滓が１個出土した。総じて出土量は少ない。

本墳から出土した遺物は次の通りである。

農　工　具

　鋤　先　　１個体出土

容　　器

　土師器　　７個体出土

そ　の　他

　鉄滓・小鉄塊　　７個体出土

農　工　具

Fig. 10　E３号墳Ⅲ区墳丘裾部鉄滓出土状況（矢印）

鋤先（Fig.11）　玄室内より出土。刃部中央が丸味をおびる大型のU字型鋤先である。左側刃部の一部が残り現存長13.7cmを測る。全体に腐食がひどくもろい。刃部は先端がやや丸みをおびる。木質部を挿入する部分は前、背二面に分れる。

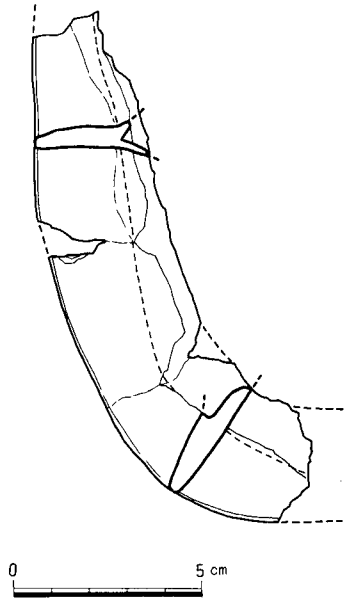


Fig.11　E 3 号墳遺物実測図Ⅰ (1:2)

土師器（Fig.12—1～7）

杯蓋（1）　天井部中央に扁平な宝珠形のつまみを有する。つまみは中窪みになるが、中心がわずかに尖り、宝珠形つまみの面影を残している。表面は磨滅がひどく、調整痕が明確でないが、外面はヘラ研磨、内面はナデ調整を施している。口縁端部は短く屈曲する。色調は明赤褐色を呈す。焼成は普通、胎土は少量砂粒混。口径13.4cm、器高3.3cmを測る。

杯身（2）　墳丘上から出土。底、体部の境はゆるく屈曲し、体部はやや外反気味に、上方にのび端部を丸くおさめる。体内外面は横ナデ、底部内面は不整方向のナデを行う。底部外面は、ヘラ切り離しした後、ナデで底部を丁寧に仕上げる。色調は明橙色を呈し、焼成は良好。胎土は砂粒を少量混入する。口径12.3cm、器高4.3cmを測り、ロクロ回転は時計回り、1と2はセット関係をなす。

杯（3）　復元口径8.9cmを測る。底部から体部は外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさ

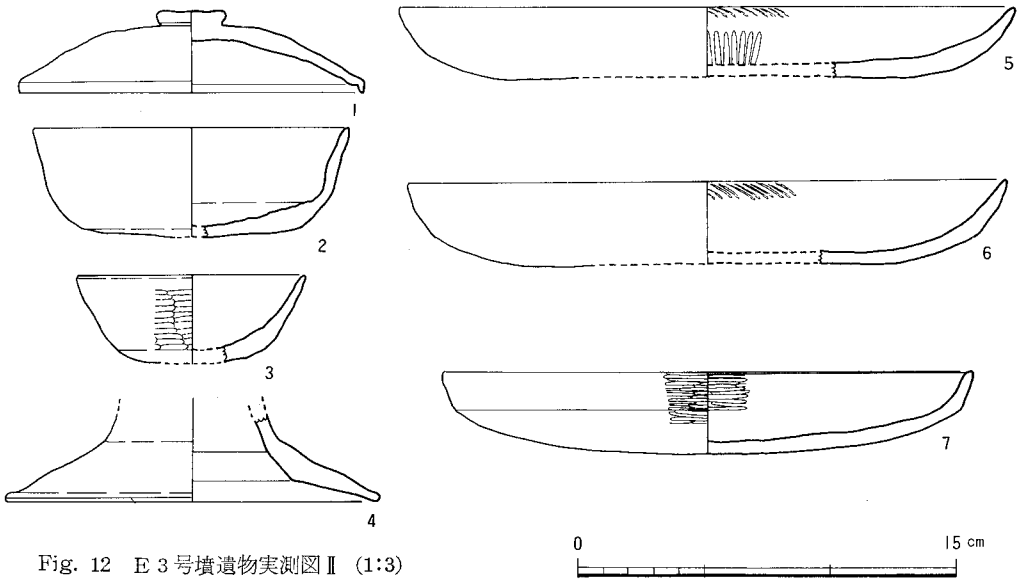


Fig. 12　E 3 号墳遺物実測図Ⅱ (1:3)

める。体外面は横位のヘラ削り、底面及び内面はナデ調整を行う。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は良質である。

高杯（４）　脚裾部のみである。脚端部はやや外反気味に丸くおさめる。脚筒部外面から裾部内面にかけて横ナデ仕上げ、脚部内面は横位のヘラ削りを加える。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土も良質である。

盤（５～７）　３個体出土。いずれも 1/2 前後を欠失する。５、６はほぼ同形同大であり、復元口径23.6㎝と24.1㎝、器高2.8㎝、3.3㎝を測る。５の高が６より口径が大きく器高が低く扁平である。いずれも底部から口縁部にかけてゆるやかなカーブを持って立ち上がり、端部をやや鋭くおさめる。５は体内外面ともヘラ研磨を加える。口縁部内面には櫛目が入り、横ナデ仕上げである。６は体外面は横ナデ、内面は縦位のヘラ研磨を加える。内面は縦位のヘラ研磨を施す。５、６とも表面はやや磨滅する。７は復元口径 20.8㎝、器高 3.3㎝を測る。５、６に比べ、体部は稜をつけて底部から立ち上がり、口端部は平坦を呈す。体内外面及び底部全体にわたって丹が塗られる。体部内外面は横位のヘラ研磨、底部内外面とも不整方向のヘラ研磨を行う。色調は５、６が明黄褐色、７は赤褐色を呈す。焼成は良好。胎土は良質である。

鉄滓（Fig.42　１・２）

Ⅳ区墳丘裾部から1個体出土した。石室内からは、玄室で６個体床面撹乱土中より出土した。

3　吉武E４号墳

1）位置と現状（Fig.5）

本墳は、標高93～97ｍの間に位置し、１号墳よりやや下方にある。急斜面に位置するため、墳丘はわずかな高まりを見せる程度であった。しかし、石室主体部が陥没していた事から、古墳である事が確認された。調査の結果石室の遺存状況は不良であった。

2）墳　丘（Fig. ③、10、11）

地山整形　本墳は等高線に直交するように石室を構築している。石室を構築するために、

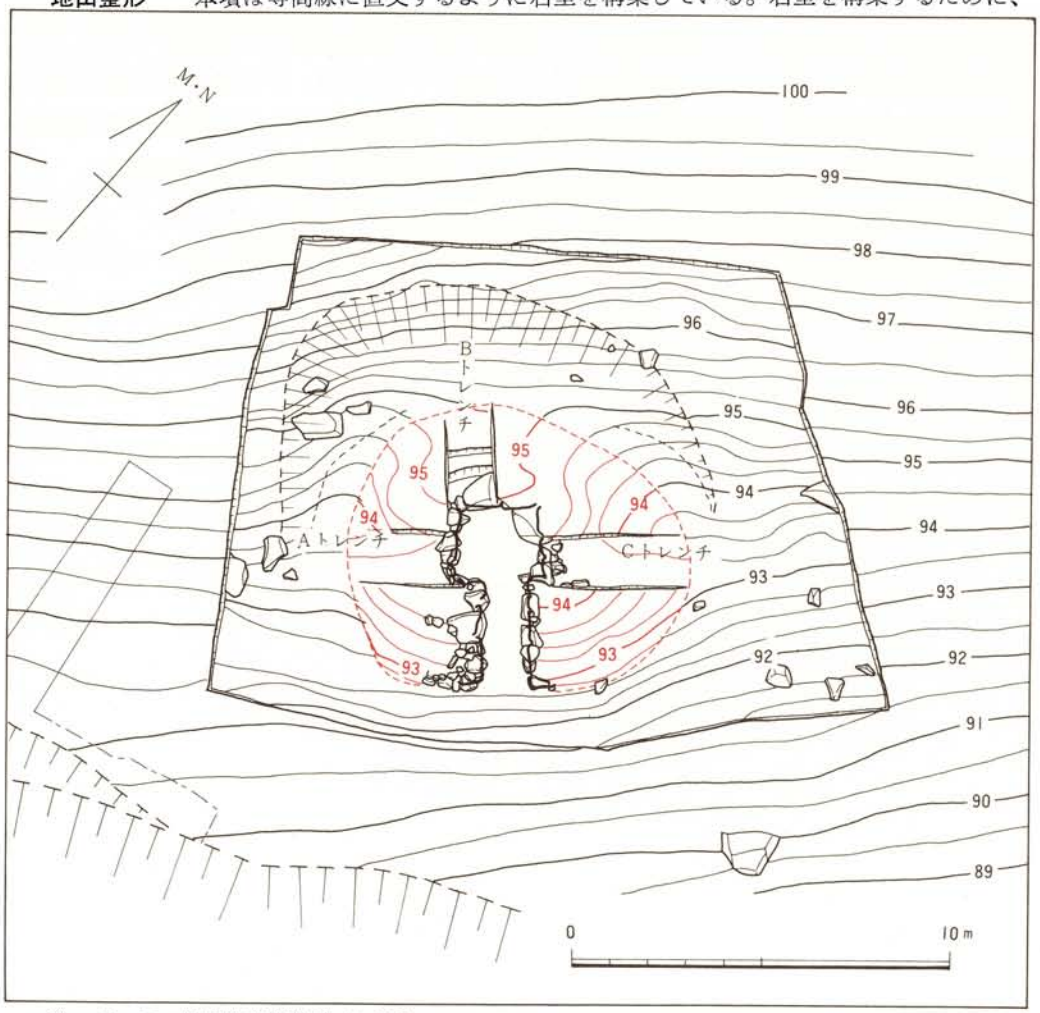


Fig. 13　E４号墳墳丘遺存図（1:200）

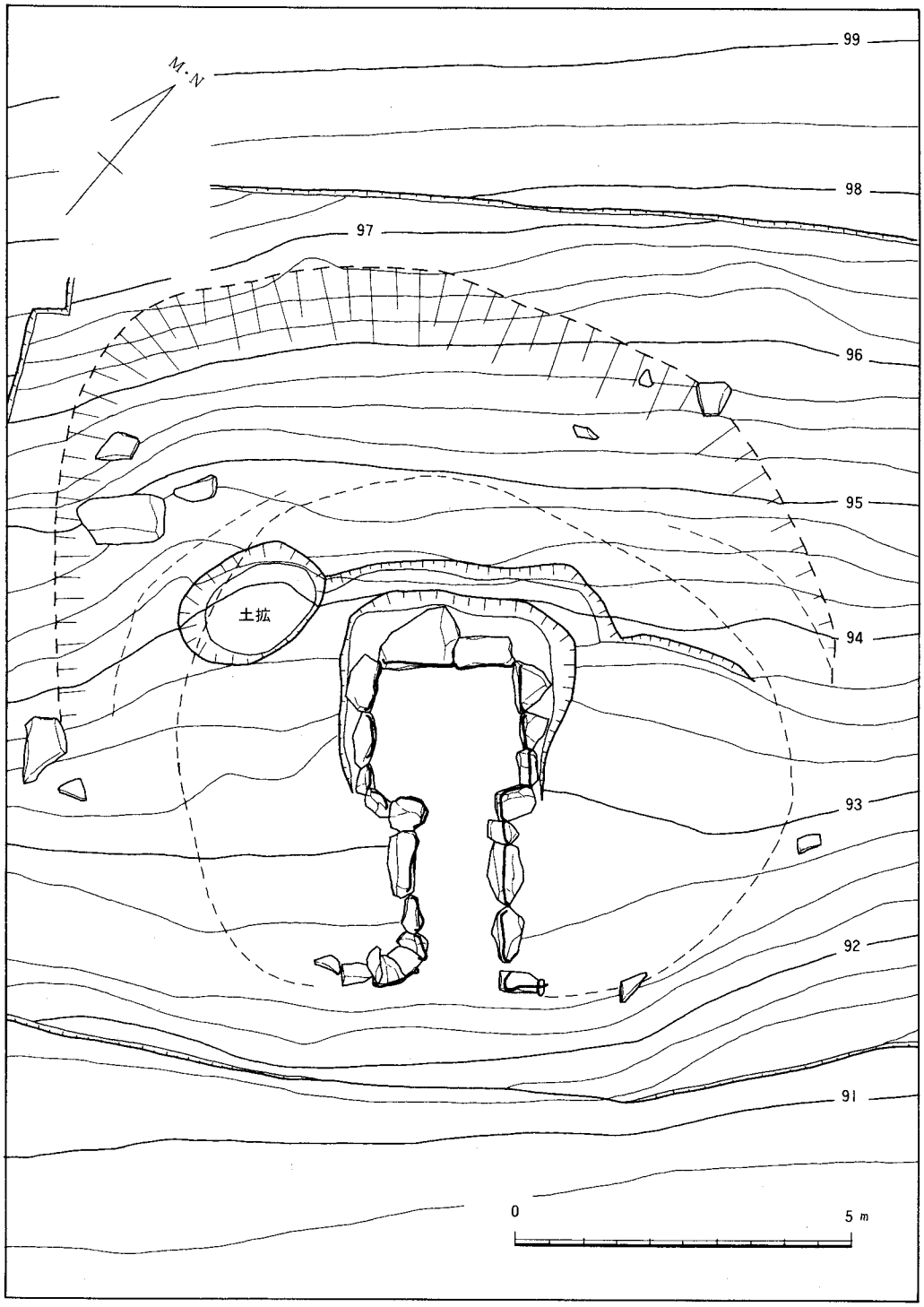


Fig. 14　Ｅ４号墳地山整形図（1:100）

1.2m程度の深さで地山を掘り込む。

石室掘方の上部方向Ⅱ区からⅢ区にかけて、地山整形による馬蹄形溝が見られる。馬蹄形溝は標高97mほどを上端として、傾斜面にそって削り出す。最大幅3.5mを測り、深さは非常に浅く、やや窪む程度である。馬蹄形溝の内側は、墳丘基底面としてテラス状に削り出すように整地される。

墳丘　急斜面に位置している事から本来それ程盛土は高くなかったようである。墳丘の直径は東西8.8m、南北8.5mを測り、やや不整の円形を呈する。墳丘現存高は、石室奥壁基底面から1.5mを測る。

墳丘の形成過程は大きく2段階に分ける事が出来る。第1段階は、腰石の配置後、壁石の積み上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら積み上げる。しかし叩きしめは弱い。第2段階は天井部及び墳丘を整えるために雑に盛り上げる。一気に盛り上げられたためか、土層の区別は明確でなかった。

3）横穴式石室（Fig. ④、14、15）

本墳の埋葬施設は開口主軸方向をS—40°—Eに取り、略南東の方向に開口する、単室両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井石、及び壁体の上半部を失っている。石室内は側壁の崩落や流土によって深く埋没していた。玄室内はすでに盗掘を受け床面は撹乱を受けていた。

石室の平面形は、やや横長の玄室に、石室中軸よりやや右側によって羨道が連接する。石室左壁全長4.6m、右壁全長4.7mでほぼ両側とも同じ長さである。墳丘裾部には、羨道左壁先端から連接する列石がめぐる。石室を構成する石材はすべて花崗岩である。

玄室　奥壁幅1.95m、前幅2.24m、左壁長1.88m、右壁長1.74mを測り、やや台形に近い平面形を呈す。左壁、奥壁は腰石のみ残る。

各壁体の構成は、左壁は腰石3石、その内奥壁に近い2石は、比較的大ぶりの石材を横位置に立てる。2段目以上は小ぶりの石材が部分的に残るのみである。右壁は腰石3石。石材は、奥壁に近い程大きく、縦位置に立てる。2段目以上は、平均長さ0.5～0.6mの石材を用いる。奥壁は腰石2石のみ。左は横位置、右は縦位置に立てる。

壁体の構築法は、右壁しか判明しない。右壁は、ほぼ上下、左右に目地が通っており、重箱積み的である。壁体は2段目からやや内傾し、持ち送りする。奥壁に近い所は、4段目迄残っているほか、特に4段目が内面にせり出す。せり出し具合から、そこが側壁最上部であると考えられる。尚、各壁石間には、各段の上端を調整するように小ぶりの石材を補充している。

玄門部は、単純な両袖が付く。袖幅は左袖0.7m、右袖0.42mを測る。袖石は未加工の転石を用い、羨道側に内傾するように縦位に立てる。

玄室床面は、盗掘を受けているためか、荒れている。敷石は梱石近くで一部残存した。

羨道　左壁長2.75m、右壁長2.85mを測り、やや右壁が長い。羨道奥幅1.05m、開口部で1.40mを測り、やや口が開く。左右両壁とも壁体の残りは、２段程度である。

左壁の腰石は、玄室に比べほぼ同大かやや小さく、横位に立てる。左壁は、玄室とほぼ同大の石材を用い、縦位と横位の立て方がある。石積み技法は明確でない。使用石材は不整の転石を用いる。

梱石は、玄門間に見られ、0.3～0.4m位の扁平な転石を一列に並べている。

墓道　格別に認められず、明確な墓道はなかった。

閉塞施設　梱石上から長さ1.4m、高さ0.3mを測り、上半部はすでに欠失する。開口部から見た場合、石積みは大きさの不ぞろいな転石を雑然と積み上げる。しかし内面は比較的面の整った扁平な転石を、面をそろえるように積み上げる。

石室掘方　斜面に直交するように掘り込まれ、長さ 3.1m、最大幅 3.4m、深さ1.2mを測

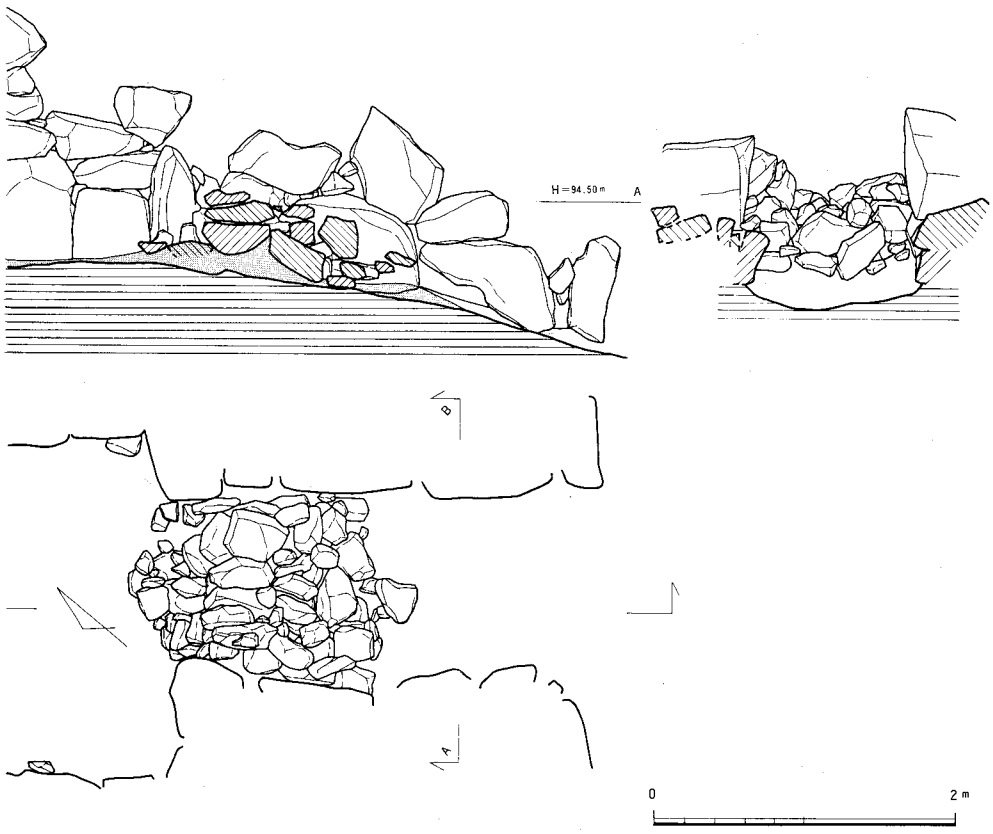


Fig. 15　Ｅ４号墳閉塞部実測図（1:50）

る。形状は隅丸方形を呈する。一部二段の掘り方を示す。各腰石には、安定をはかるため、わずかであるが腰石掘方が見られ、根締め石も一部見られる。

又、墳丘を除去した際、墳丘下に2.0×1.5m、最深部で0.5mの楕円形の土坑が検出された。出土遺物はなく、古墳築造時か、それ以前の土坑と考えられる。

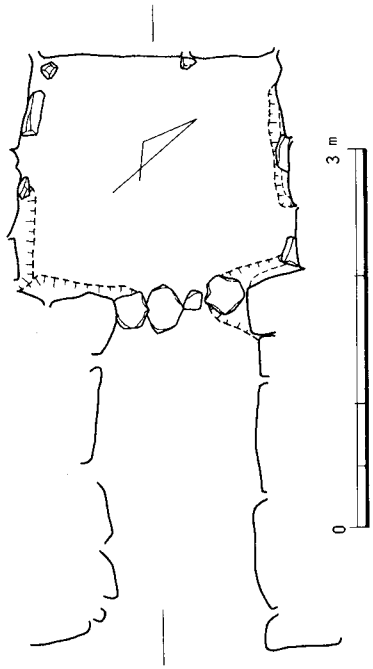


Fig. 16　E4号墳石室基底面実測図 (1:60)

4）出土遺物（Fig. 17、18）

石室内はすでに盗掘を受けている。遺物は羨道閉塞施設内及び、墳丘上より出土した。玄室内からの出土遺物は認められなかった。総じて出土遺物は少なく、閉塞施設前面より須恵器（椀、杯蓋、杯身）鉄滓等が出土した。特に鉄滓が多量に出土した。

本墳から出土した遺物は次の通りである。

容　　器

須恵器　　5個体出土

そ　の　他

鉄滓・小鉄塊　　24個体出土

出土遺物の内、実測できたものについて述べる。

須恵器（Fig. 18—1～3）

杯蓋（1）　1/2を欠失する。羨道閉塞部前面より出土。天井部に扁平なつまみを有する。つまみは、中心がごくわずかに尖り、宝珠形のつまみの面影をわずかに残す。天井部は中窪になり、口縁端部は短く屈曲する。天井部2/3の範囲に回転ヘラ削りを施し、天井内部は不整方向のナデを加える。色調は灰褐色を呈し、焼成は不良でややもろい。胎土は砂粒を少し含む。口径13.0cm、器高1.8cmを測る。

杯身（2）　1/2を欠失する。羨道閉塞部前面より出土。底部と体部の境が丸みを持ち、体部はやや外傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。高台はあまり高くなく、外方にふんばる。高台部付近は、横ナデで丁寧に仕上げる。底部は、回転ヘラ削りのちナデで仕上げる。底部内面は不定方向のナデを加える。色調は、灰褐色を呈し、焼成は不良でややあまい。胎土は良質である。口径13.2cm、器台径9.3cm、高台高0.7cm。1と2は、時期的に同一である。

椀（3）　完形である。底部、体部の境はゆるいカーブを持ち、体部は外傾して立ち上がる。口縁端部はやや外反するように丸くおさまる。底部は回転ヘラ削りで丁寧に平坦に仕上げ

る。底部内面は、不整方向のナデを加える。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好堅緻。胎土も良質である。ロクロ回転は時計回りである。口径18.4cm、器高6.3cmを測る。

鉄滓・小鉄塊　羨道内において24個出土した。出土は、閉塞施設前面に集中した。出土状況から見て、椀や杯身、杯蓋などと同時期に供献されたものであろう。内訳けは、鉄滓15、小鉄塊９である。

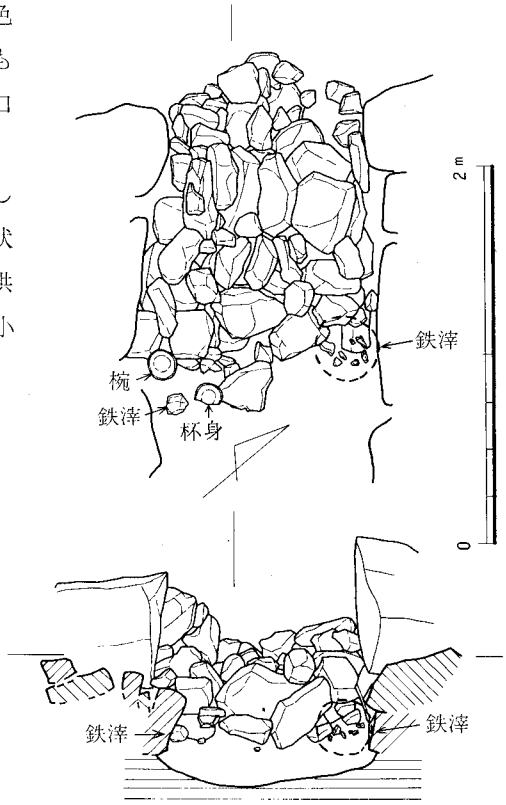


Fig. 17　Ｅ４号墳遺物出土状況図（1:40）

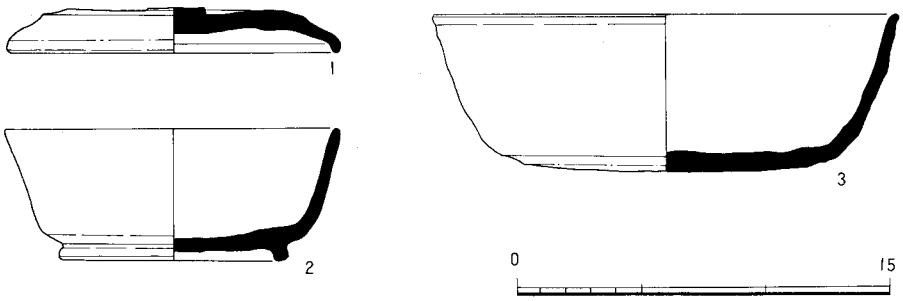


Fig. 18　Ｅ４号墳遺物実測図（1:3）

4　吉武E５号墳

1）位置と現状（Fig. 5）

本墳は、３基の古墳中一番下位標高91～94mに位置する。調査前には、まったく存在が確認されておらず、地形測量の下草伐採中に偶然発見された。調査前の状況は、崖面に石室半分が削られた形であった。調査の結果、石室の半分だけが遺存するのみで、残りは不良であった。

2）墳　丘（Fig. 19、20）

地山整形　調査中に発見された事情及び調査期間の制約から、十分な調査は出来なかった。しかし、土層の観察から、古墳の斜面上方には、地山をカットした馬蹄形溝が幅 3.3m にわたって認められた。石室掘り方は、地山面から、最も深くて 0.8m 程度で、やや勾配をもって一部二段掘りで形成される。その平面形は部分的にトレンチを拡張した結果、隅丸方形を呈すと思われる。

墳丘　墳丘の遺存状況は、あまり良好でない。すでに以前の道路工事で墳丘の半分が破壊

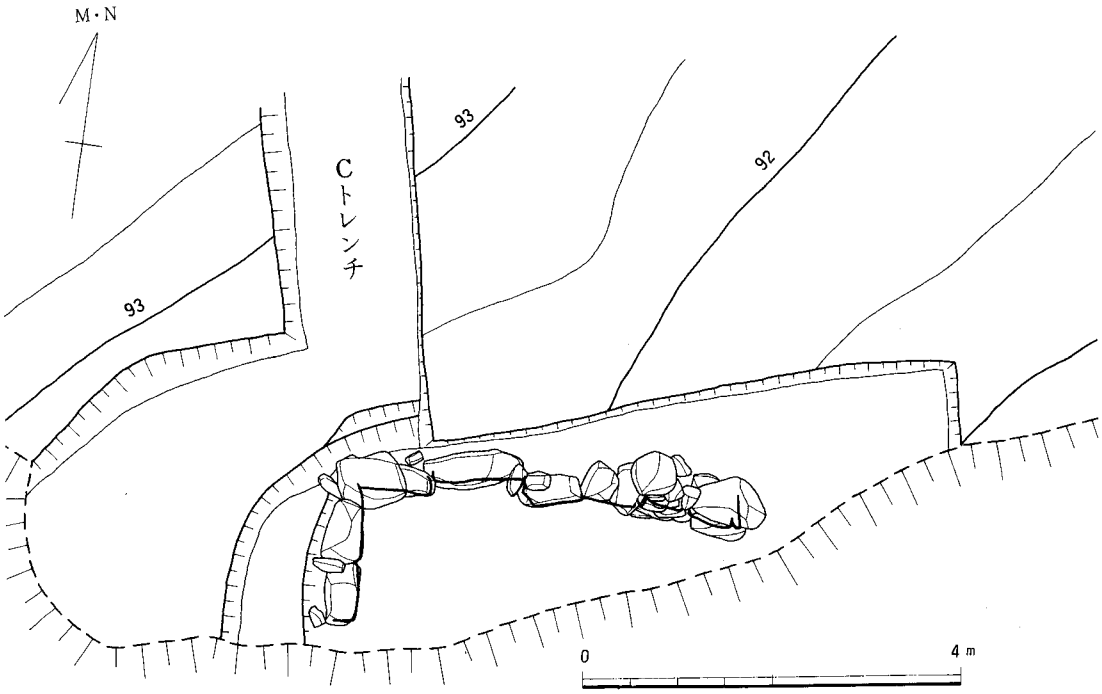


Fig. 19　E５号墳掘方測量図（1:80）

吉武Ｅ５号墳

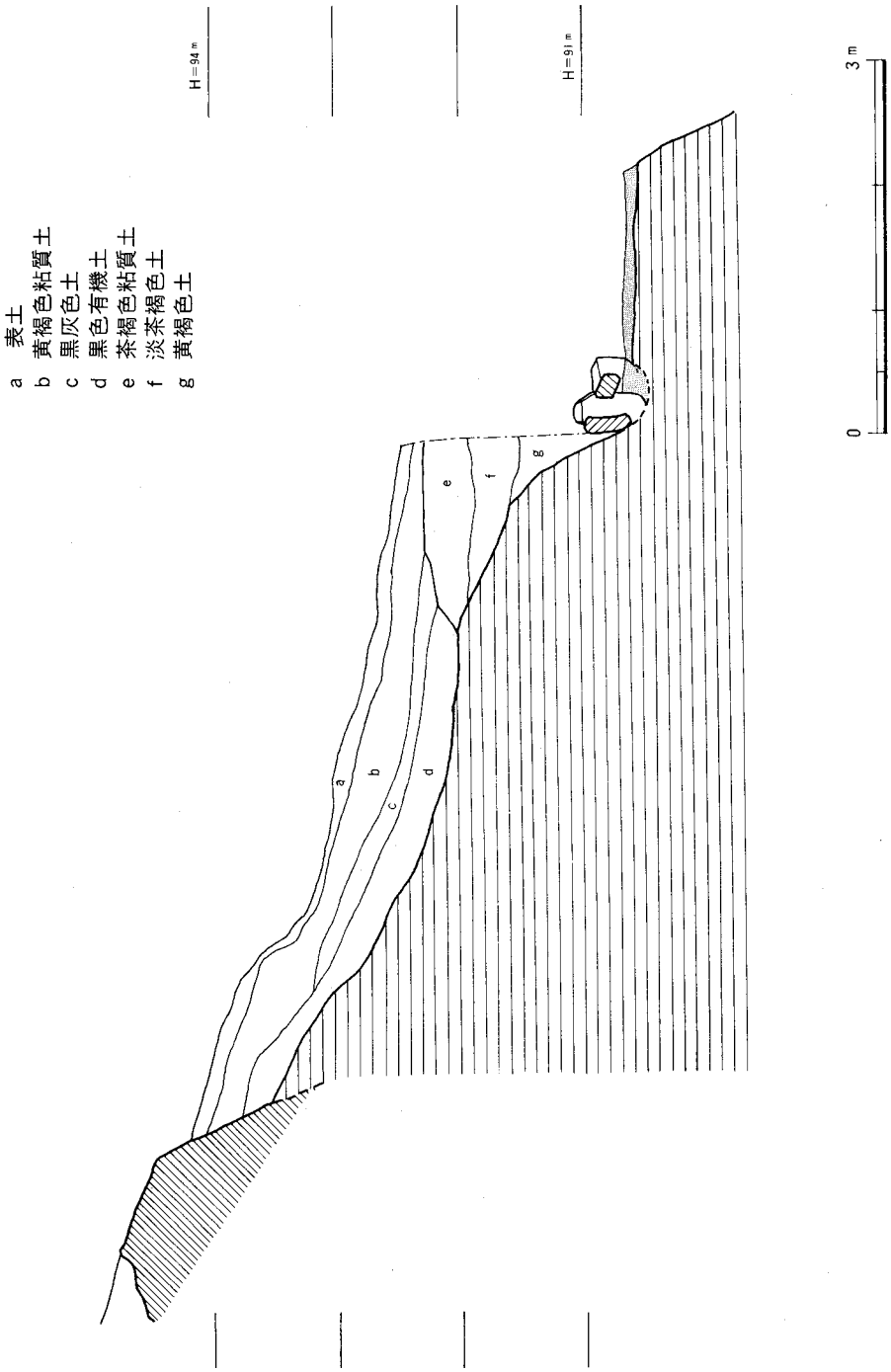


Fig. 20　Ｅ５号墳墳丘断面図（1:60）

されていたため、墳丘の正確な規模は不明である。墳丘盛土は、前述の両墳と同じように比較的短期間に盛り上げられており、土層の差は明瞭でない。ただしまり具合等の微妙な差異で判断出来るのみである。

3）横穴式石室（Fig. ⑤、21）

本墳の埋葬施設は、開口部主軸をN－82°－Eに取り、斜面に斜交するように、ほぼ東北東の方向に開口する。他の2墳とは開口方向が異なる。石室は右半分が残存するのみであり、遺存状況は良くない。残存部分から推定して、単室で袖石を有した横穴式石室である。

玄室　現存するのは、奥壁及び右壁のみである。現存長は奥幅1.42m、右壁1.70mでやや側壁が長いが、ほぼ方形をなすプランである。右壁は腰石2石で、長さ1m前後の細長い転石を横位に立てる。2段目以上は遺存しない。奥壁は腰石2石残り、大きさの異なる形の不ぞろいな転石を縦位に立てる。

玄門部は、右袖石のみ残り、比較的方形の小さな転石を横位に置く。床面は、かなり攪乱を受けているが奥壁右隅には敷石が残存する。大きくても20cm程度の小さな転石を用いている。

羨道　右壁が残存するのみ、右壁全長2.3mを測る。腰石は地山面に直接置く。石材の大きさは、玄室内の腰石に比べ1/2程度で小さい。2段目以上は、大きさの不ぞろいな転石を粗雑

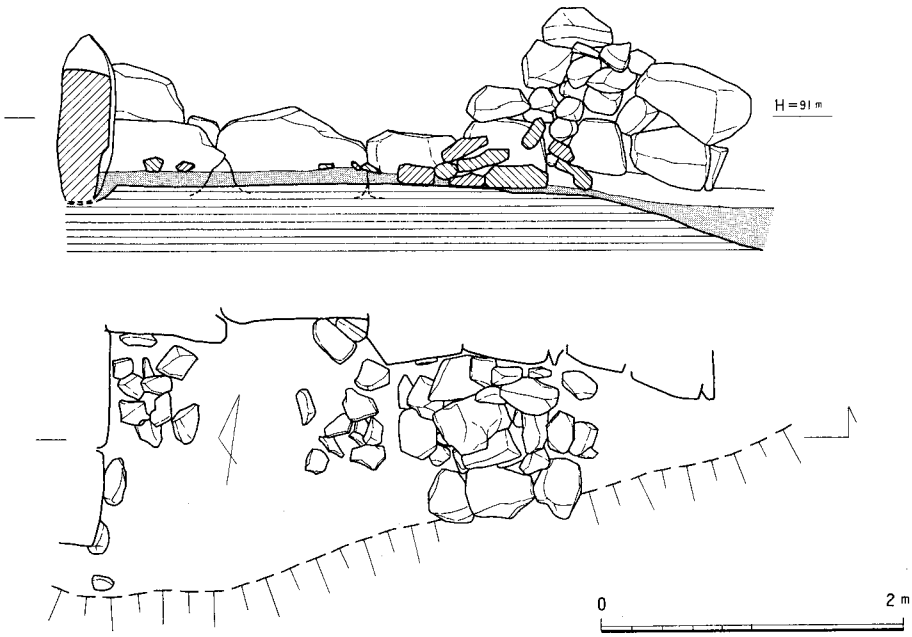


Fig. 21　E5号墳閉塞部実測図（1:50）

に積み上げている。乱積みに近い状態である。

梱石は、玄門よりやや羨道に入った所に認められ、扁平な転石が２石残る。床面には敷石が見られ、かなり大きな扁平の石材を雑に並べる。使用石材は玄室のものに比べると大きい。石質はいずれも花崗岩転石である。

墓道　崖面によってカットされ不明。とりたてて墓道はなかったと思われる。

閉塞施設　羨道内に幅0.75m、長さ1.0mの範囲に存在し、上半部を欠失する。小ぶりの花崗岩転石を雑に積み上げる。

４）出土遺物（Fig. 22）

玄室内のみ出土。攪乱を受け原位置を保つものは一つもなかった。出土遺物は、他の２基に比べやや多く、耳環、土師器、鉄滓等が出土した。出土遺物は以下のとおりである。

装　身　具
　耳　環　　１個体
容　　器
　須恵器　　12個体
　土師器　　２個体
そ　の　他
　鉄　滓・小鉄塊　　11個体

装　身　具

耳環（Fig. 22―９）　玄室床攪乱土より出土。中実の銅胎に金箔を置いたものである。金箔の残りは良好である。長径2.1cm、短径2.0cmを測る。

須　恵　器

杯蓋（Fig. 22―１～４）　４個体、形態によって３類に分類する。

Ⅰ類（１）　玄室内埋土より出土。天井部は扁平をなし、ヘラ切り離し痕を残す。内面のかえりは、口縁部よりやや内側に引込み、嘴状を呈す。天井の平坦部分は、回転ヘラ削りを施し、天井部内面は不定方向のナデを加える。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質。口径12.1cm、かえり径10.1cm、器高2.3cmを測る。

Ⅱ類（２）　大半を欠失する。全体に扁平を呈し、天井部と体部の境はない。口縁端部は、外方にひき出し気味に丸くおさめる。かえりは下方にのびる。天井部につまみを有する。天井部1/2に回転ヘラ削りを行ない、天井部内面は不定方向のナデを加える。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は砂粒をやや含む。口径15.6cmを測る。

Ⅲ類（３、４）　２個体、３は1/2を欠失し、焼きひずみがひどい。全体に扁平な器形を示す。口縁端部は短く屈曲し、丸くおさめる。天井部外面1/2は回転ヘラ削り。復元口径は16.9

cm、器高2.3cmを測る。4は2/3を欠失し、復元口径は13.5cm、器高1.0cmを測る。

杯身（Fig. 22—5～8）　4個体出土。形態により3類に分類する。

Ⅰ類（5）　2/3を欠失する。底部と体部の境は、回転ヘラ削りによって区別される。口縁部は、やや外に開き気味に立ち、端部を丸くおさめる。内底面は不定方向のナデを加える。色調は青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質である。内面に自然釉がかかる。ロクロ回転は時計回りである。復元口径12.5cm、器高3.9cmを測る。

Ⅱ類（8）　大半を欠失する。底部と体部の境は、ゆるやかな曲線をなす。高台は細長く、やや外側へふんばる。口縁部は、やや外へ開き気味に立ち上がり、端部はやや外反気味に丸くおさめる。高台部は横ナデ調整。復元口径15.4cm、高台径12.4cm、器高5.7cmを測る。

Ⅲ類（6、7）　6は3/4を欠失する。底部と体部の境に稜を有する。体部はやや外傾して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ削りを加える。色調は青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質である。復元口径13.4cmを測る。7は、大きさ、成形も6とほぼ同様。ロクロ回転は不明。他に土師皿、盤等が出土したが、小破片のため、図示していない。

鉄滓・小鉄塊　玄室埋土より11個体出土した。内訳けは鉄滓9、鉄片2、小鉄塊1である。

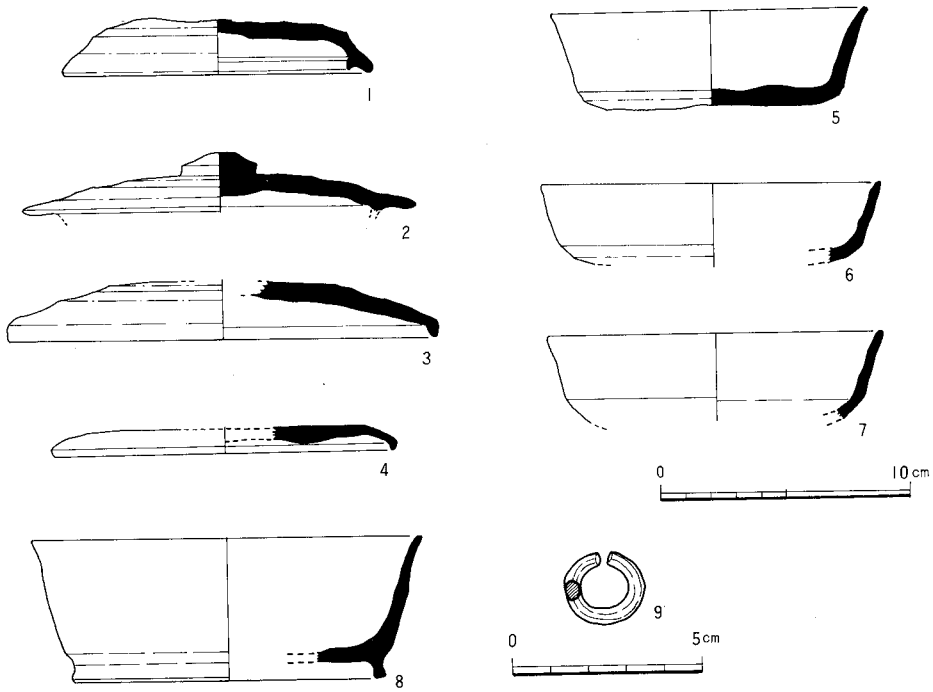


Fig. 22　E5号墳遺物実測図（1:3、耳環のみ1:2）

Ⅳ　乙石C群の調査

1　乙石C群調査概要

本群は、福岡市西区金武字乙石にある。王丸山（453m）山塊の北東にのびる尾根筋の丘陵北西斜面に立地する。周辺の尾根筋には同様の群集墳が多数存在し、金武古墳群という、大規模な古墳群をなす。吉武E群とは、日向川を挾んで対峙する丘陵面に位置する。周辺の谷あいには地形を利用したため池が見られる。本群は、福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）に従って、乙石C１号墳、C２号墳、C３号墳と呼ぶ。３基の古墳で一支群を構成する。

１・２号墳は、墳丘一部が道路予定地にかかるだけだったので、主体部のみの調査を行なった。しかし１号墳は、すでに道路工事によって玄室を失っていた。３号墳は、石室主体部が、予定地内のため、道路幅一杯全面発掘を行なった。

調査の結果、３古墳とも斜面に直交するように、それぞれ南東、東、東、の方向に開口する。３号墳は小型の石室を持つ墳径６～７mの小円墳であり、南側斜面に馬蹄形溝が見られた。１～２号墳は、斜面と墳丘を画する凹地が上方斜面にめぐっているのが認められた。１、２号墳とも石室規模は、３号墳に比べはるかに大きく、墳丘の規模も10m前後とやや大きい。

各古墳ともすでに盗掘を受けていたが、比較的出土物は多い。同一古墳で時期差のある遺物が出土している事から何世代かに渡って追葬された可能性がある。３号墳は消滅したが、１・２号墳は道路脇に現存している。

Fig. 23　乙石C群発掘作業風景

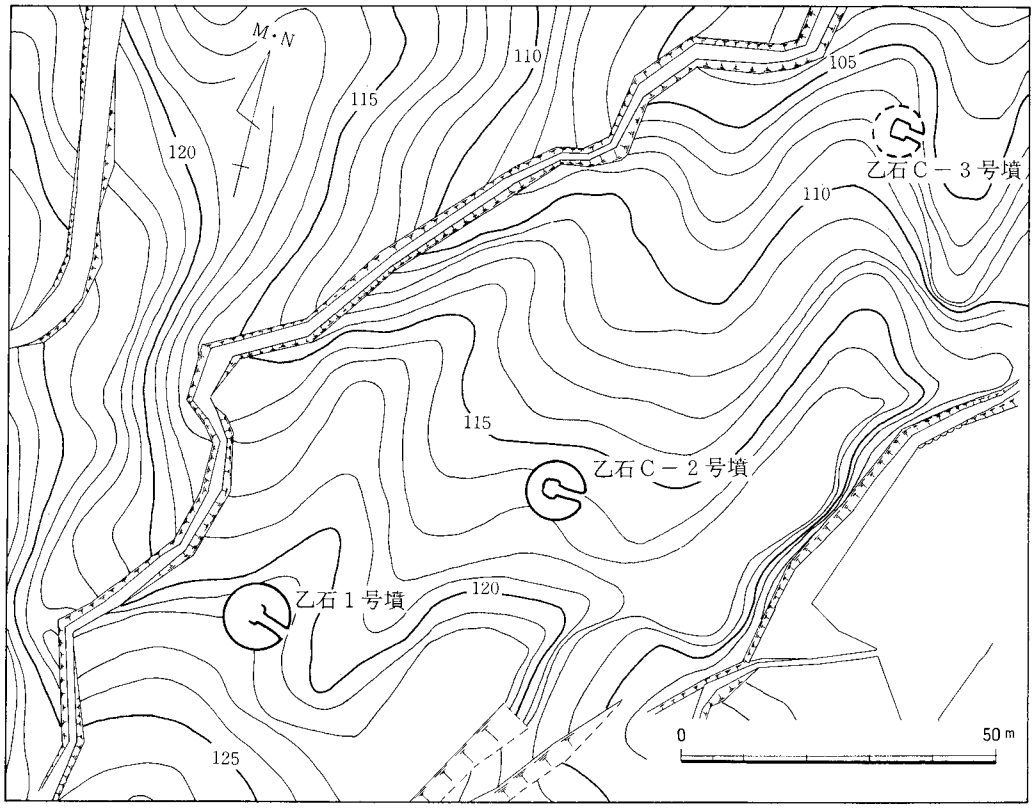


Fig. 24　乙石C群周辺地形図（1:1200）

2　乙石C1号墳

1）位置と現状（Fig. 24、25）

本墳は丘陵の緩斜面上標高120mから123mの間に位置する。調査前、すでに道路工事によって主体部は玄室を中心として、ほとんど破壊され、羨道部しか残っていない。現状で、周囲に周溝がめぐっている。羨道部に天井石が残っている事から、本来はかなり残りのよい古墳であったと思われる。墳丘の正確な規模については、石室内調査にとどめたので、地形測量による推定しかない。

2）横穴式石室（Fig. ⑥、26）

本墳の埋葬施設は開口主軸をS—67°—Eに取り、東南東方向に開口する、単室両袖型横穴式石室である。石室平面形は、玄室がほとんど破壊されており、羨道部は長さ3.8m、幅0.9m

乙石石Ｃ１号墳

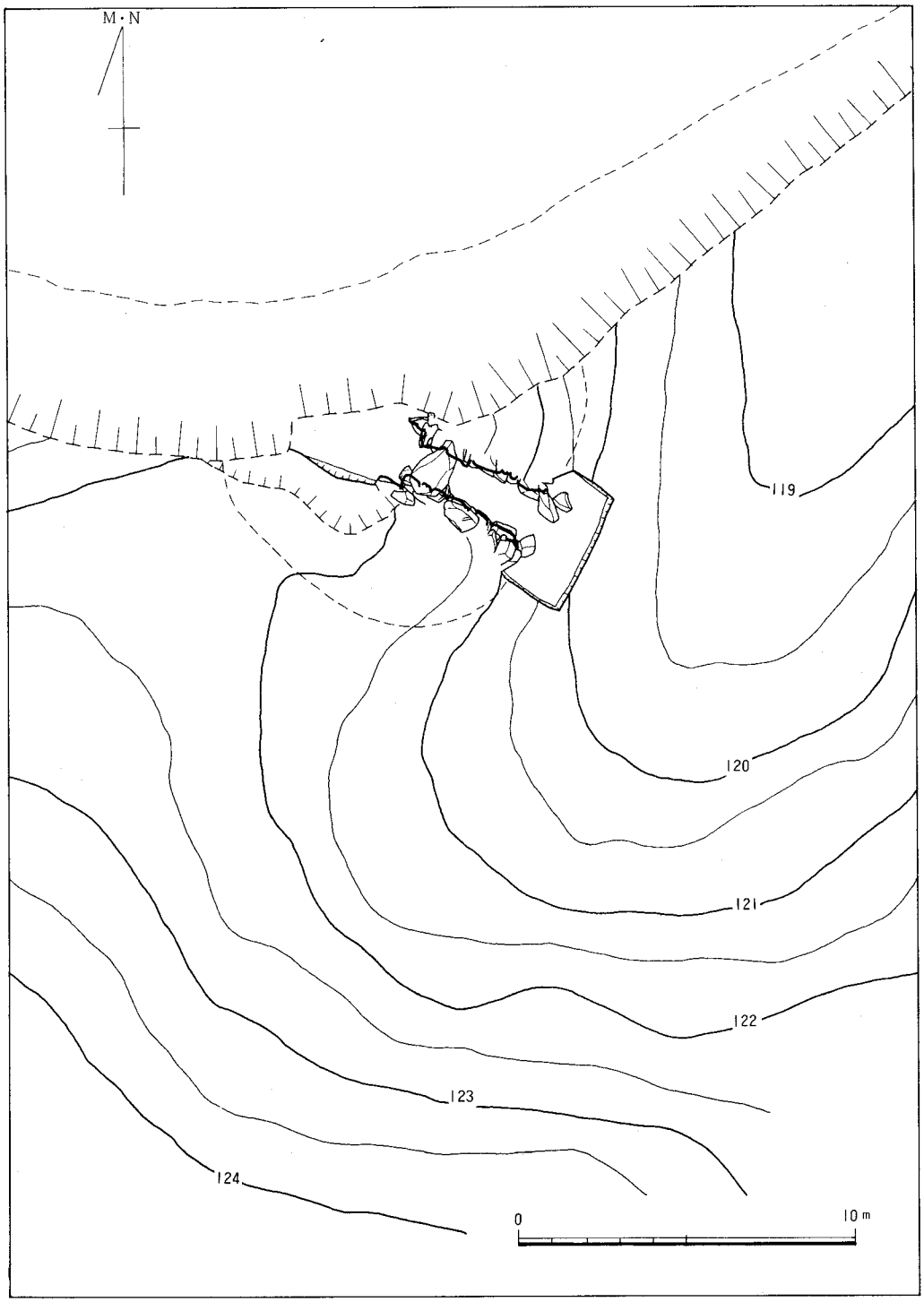


Fig. 25　Ｃ１号地形測量図（1:200）

と細長く、やや開き気味になる。石室現存長は、4.45mとかなり長く、羨道部で一部天井石が遺存している事から、本来残りはよかったと考えられる。調査対象区域が予定ルート外であるため、石室内調査にとどめ、外部施設については、調査しなかった。

玄　室　大部分破壊され、詳細は不明、左右一石ずつ腰石が存在し、いずれも細長の転石を縦位に立てる。床面には、敷石があり人頭大からこぶし大の礫を用いる。残存左壁長0.64m、右壁長0.58m、前幅1.77mを測る。玄門部に関しては、左袖石は0.6×0.8mの縦長のやや方形の石材を縦位に立て、右袖石も0.5×0.7mの縦長の方形の石材を縦位に立てる。

羨　道　左壁長3.72m、右壁長3.83mで、やや右壁が長く、玄門部幅0.87m、開口部幅1.52mでやや右方向に斜めに開口する。羨道部の残りは一部天井石が残っている事から比較的良好であり、ほぼ最上部壁石迄残る。腰石は、左壁で5石、玄室に近い2石は他の3石に比べ、やや大きい花崗岩の転石を用い、縦位置に置き、残り3石は奥2石に比べ半分程の大きさで、地山に直接置いている。各石材間には小石を補充している。右壁は腰石5石、奥の3石は、左壁に比べかなり大きく、すべて縦位に立てる。残りの2石は奥の一石が縦位置、開口部の一石は横位に立てる。天井石は、長さ1.8m、幅0.8m、高さ0.6mの非常に大きな石材で羨道の2

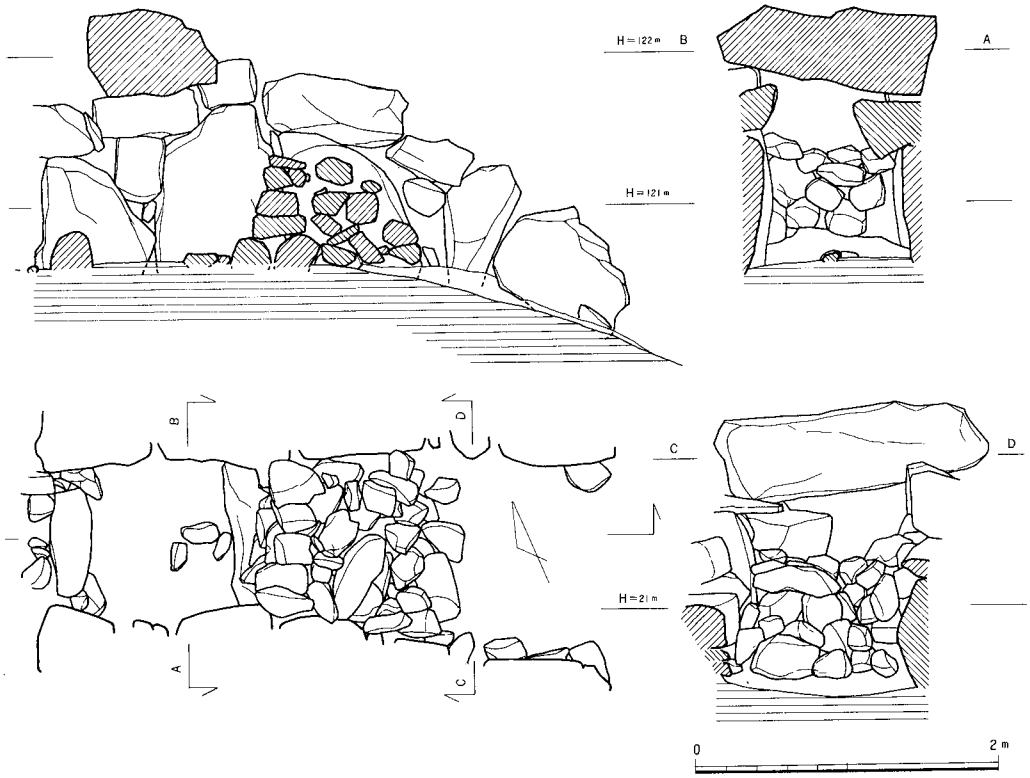


Fig. 26　C 1号閉塞部実測図（1:50）

段目上に載る。壁石最上部の状態から少くとも羨道部にはあと一石天井石が存在したと考えられる。

梱石については、二重の梱石が見られる。第二梱石は玄門間に長さ0.72m、幅0.3m程度の細長い石材を一石使用し、右側面に研磨を与える。第一梱石は、袖石より1.2m前後、開口部方向にあり、長さ0.96m、幅0.35m程度の一個の細長い転石を用い、右側は、腰石の突出部とかみ合うように出っぱりをなす。一部根締めの石が見られる。

閉塞施設　第一梱石上から開口部方向へ長さ1.0m、高は0.5m、羨道一杯の幅で存在する。閉塞内面は、比較的丁寧に積み上げ、面をそろえるが、前面ほど雑になる。石の規模も大小様々で、花崗岩転石を用いる。

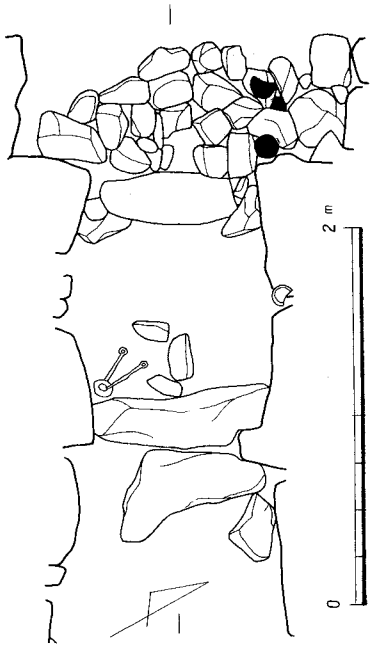


Fig. 27　C１号墳遺物出土状況図（1:40）

３）出土遺物（Fig. 27・28・29）

本墳は、道路工事によって玄室部を破壊されている事、及び盗掘を受けている事から、遺物の出土は、主に羨道部分に集中した。玄室部の出土は、右袖隅角の部分に見られた。羨道部からの出土は、閉塞施設内面に見られ、須恵器及び馬具、刀子等が出土した。出土遺物として特に小型の杯蓋、杯身が比較的多く出土した。尚、後世の流入として、中世の土師皿が羨道前半部より出土した。

出土遺物は以下のとおりである。

農　工　具
　　刀　子　　３個体
馬　　具
　　轡　　１個体
装　身　具
　　耳　環　　１個体
容　　器
　　須恵器　　19個体
　　土師器　　２個体
そ　の　他

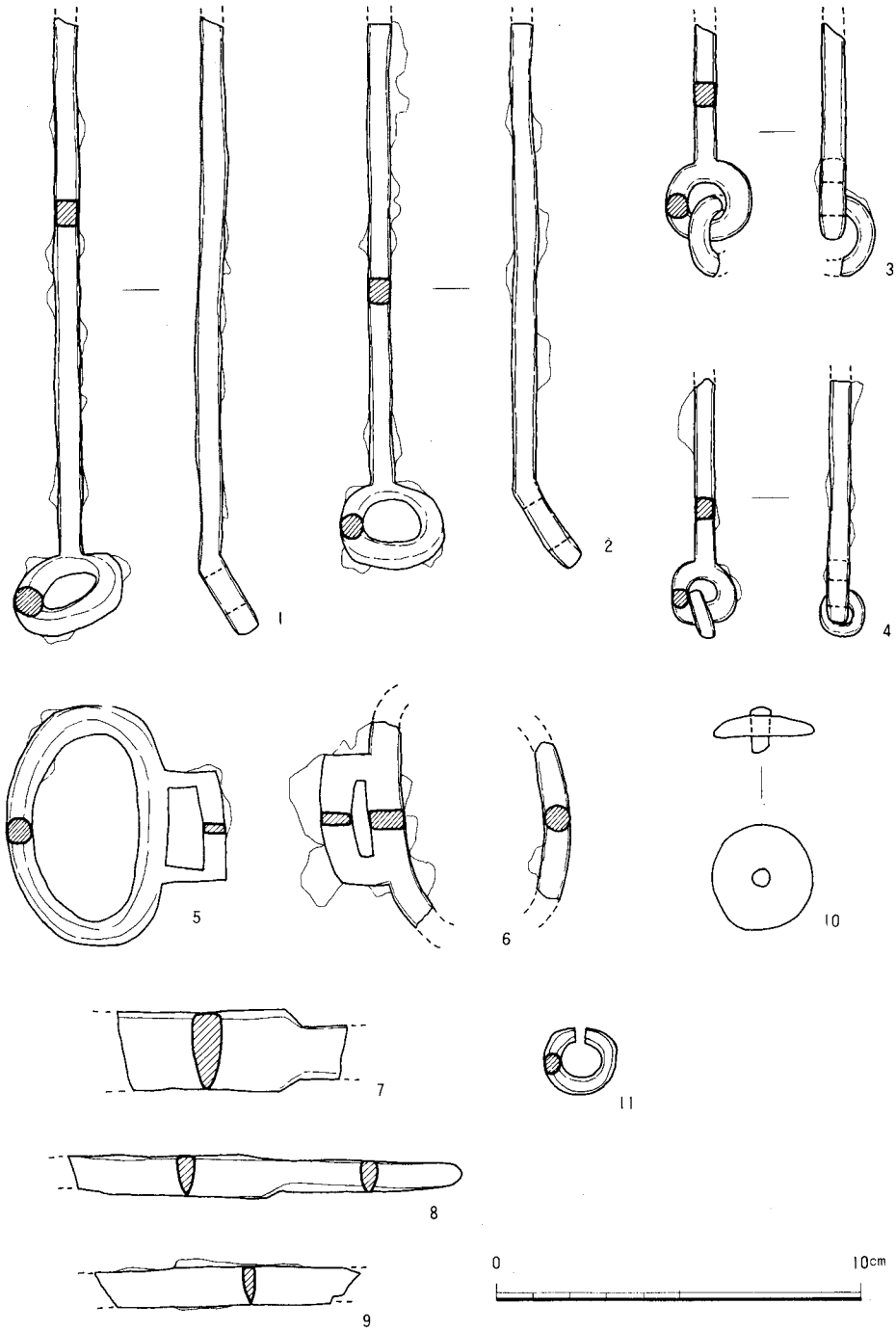


Fig. 28　C 1 号墳遺物実測図 I　(1:2)

不明鉄製品　　１　個体

中世土師皿　　１　個体

馬具

轡（Fig. 27—１～６）　１・２は羨道後半部より出土。轡の引手金具である。１は現存長16.9cm、２は現存長14.9cmを測る。端部に手綱を結びつけるために長径3.1cm、短径2.5cm、孔穴1.5cmの楕円の環がある。３・４は銜の合せ部片で、二連式であることを窺わせる。５・６は鏡板である。５は長径6.7cm、短径4.4cmの扁円形を呈し、断面は円形をなし、その側面に幅3.0cmの立耳がつく。出土時は、１.２と末広がりに連接していた。６は鏡板の一部である。幅3.5cmの立聞が付き、断面は長方形を呈す。

農工具

刀子（Fig. 27—７～９）　いずれも破片である。７の様に大ぶりのものと８・９の様に小ぶりのものがある。刀身断面はいずれも二等辺三角形を呈する。茎部は、７がやや細長い楕用形をなすが、８は二等辺三角形を呈す。

装身具

耳環（Fig. 28—11）　中実の銅胎に金箔を置いたものである。長径 2.0cm、短径 1.9cm を測り、断面は楕円形をなす。錆がひどい。

不明鉄製品（Fig. 28—10）　羨道後半部床面より出土。直径2.8cmの円形を呈す。中央に突起物を有し、鋲か釘が残存する。座金と思われる。

須恵器

杯蓋（Fig. 29—１～６）　形態から大きく４類に分類する。

Ⅰ類（１）　天井部から体部にかけて丸味を持ち、口縁端部はやや外反して丸くおさめる。天井部はやや平坦をなし、扁平な中窪状のつまみがつく。天井部は回転ヘラ削りを行い、天井部内面は不定方向のナデを加える。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質。ロクロ回転は時計回り、口径12.8cm、器高4.2cmを測る。有蓋高杯の蓋の可能性がある。

Ⅱ類（２・３）　天井部は平坦な面を有し、口縁端部は体部からやや外方へ引き出し気味に丸くおさめる。かえりは口端部より内側にのび、天井部に扁平のつまみを有す。天井部から体部 1/3 は回転ヘラ削り、天井内面は不定方向のナデを加える。色調は灰色味をおびた赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土も良質。口径14.1cm、かえり径 11.9cm、器高 3.0cm。３はつまみを欠失し、かえりは２よりやや下方にのびる。色調は赤褐色を呈し、焼成は不良、胎土は良質である。ロクロ回転は時計回り、口径13.8cm、かえり径11.0cm。

Ⅲ類（４・５）　小型の宝珠形のつまみを有す。４は天井部と体部に境はなく、口縁端部はやや外反して丸くおさまる。かえりは爪状に短く付く。天井部は回転ヘラ削り、天井内面は不定方向のナデを加える。５は体部と天井部に境を有し、口縁は体部からそのままのびる。かえ

りは内面に痕跡を残す。天井部は回転ヘラ削りを行う。ロクロ回転は4が時計回り、色調は青灰色と灰褐色、焼成は両方とも良好である。胎土は両方とも砂粒を少量含む。口径は10.6cm、8.7cm、器高は3.7cm、2.9cm。

Ⅳ類（6）　天井部は平担をなし、口縁端部はやや外反気味に丸くおさめる。かえりは基部が厚く、下方にのびる。天井部は回転ヘラ削り、他は横ナデを加える。ロクロ回転は時計回り、口径10.3cm、器高は2.5cm。

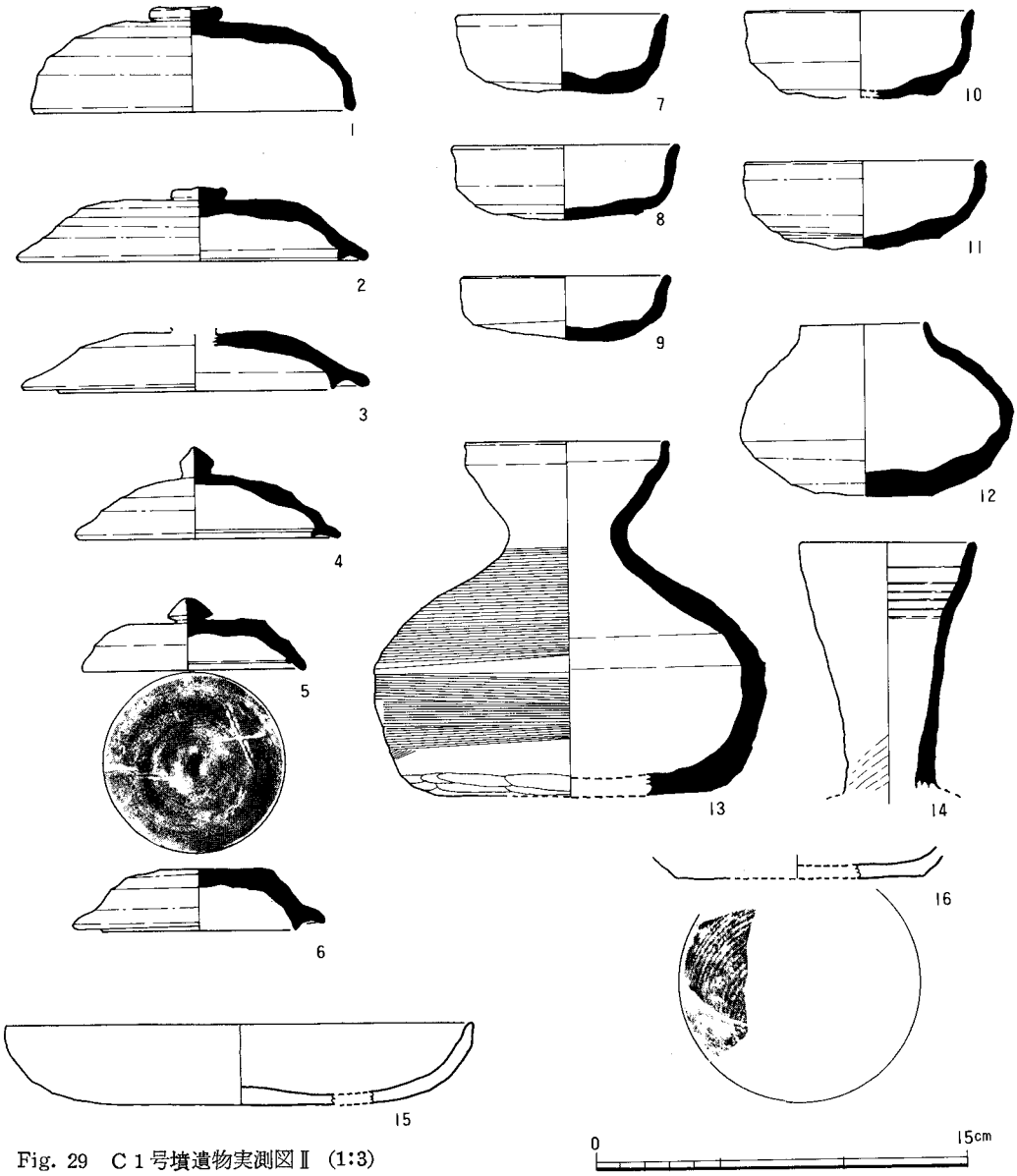


Fig. 29　C1号墳遺物実測図Ⅱ（1:3）

乙石C１号墳

杯身（Fig. 29－７～11）　５個体出土。形態は11の口縁が他と異なる他はほぼ類似する。７～10迄底部は平坦をなし、口縁端部は外反気味に丸くおさめる。７は底部に回転ヘラ削りを加える。色調は青灰色を呈し、焼成は良好胎土は砂粒を少量混入する。口径8.3cm、器高3.2cm。８、底部はヘラ削りを行い、内底面は不定方向のナデを加える。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は少量砂粒混入する。口径8.9cm、器高3.0cmを測る。９は底部に回転ヘラ削りを加える。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を少量含む。口径８.3cm、器高２.6cmを測る。10は底部に回転ヘラ削りを加え、内底面に不定方向のナデを施す。色調は暗灰色、焼成は良好堅緻、胎土は良質。復元口径9.0cm、器高3.5cmを測る。11底部は丸味を持ち口縁端部は直立して丸くおさまる。底部は回転ヘラ削り、体部外面に部分的に浅い沈線が入る。内底面は不定方向のナデを加える。ロクロ回転はすべて時計回り。

坩（Fig. 29—12）　体部はソロバン玉型を呈し、最大胴径が下半部にある。口縁は短く内傾して立ち上がる。底部はやや平坦面を持つ。体部下半部は回転ヘラ削りを行い、体内外面から口縁内面までは横ナデ、内面の仕上げは完形のため確認出来ない。色調は黒味を持った灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は砂粒をやや含む。ロクロ回転は時計回り、口径は５.0cm、最大胴径10.9cm、器高７cmを測る。

直口壺（Fig. 29—13）　下半部の安定した体部に漏斗状の口頸部を有する。口縁部は短く直に立ち上がり端部を丸くおさめる。体部にはカキ目が施され、底部は静止ヘラ削り、口縁外面から内面にかけてはナデを加える。

口頸内面には、指調整の痕跡が残る。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質である。ロクロ回転は時計回り、復元口径8.0cm、最大胴径15.8cm、器高8.0cmを測る。

長頸壺（Fig. 29—14）　口頸部のみ残存。口頸部は細く外反して立ち上がる。口頸基部にはしぼり痕が認められる。内面には沈線が入る。外面は横ナデを施す。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質である。

甕　羨道内より出土。内外面は、同心円状の叩き目をそれぞれ加える。器厚は１cmを越えかなり厚い。

土師器

盤（Fig. 29—15）　羨道前半部より出土。底部からゆるやかなカーブをもって立ち上がり端部をやや尖り気味におさめるが、ヘラ研磨を行っているようである。色調は淡橙色を呈し、焼成はややあまい。胎土は良質。復元口径18.9cm、器高3.3cmを測る。

土師皿（Fig. 29—16）　後世の流れ込みである。底部は糸切り離し痕を有す。底径10cmを測る。

他にも須恵器、土師器等出土したが小片につき図示し得なかった。

3　乙石Ｃ２号墳

１）位置と現状（Fig. 24、31）

丘陵緩斜面標高115～117 m の間、調査した３基の古墳の中央に位置する。道路予定地内に墳丘西側一部がかかっただけで、主体部は調査対象からはずれたので、石室内の調査のみ実施した。調査前すでに石室の天井石が欠失し、玄室内部が露出していた。すでに内部は、盗掘などによってかなり荒されていた。墳丘の大きさは、現状で東西８ m 南北８ m のやや不整の円形をなす。

２）横穴式石室（Fig. ⑦、31）

本墳の埋葬施設は、開口主軸方向をＳ－85°－Ｅに取り、等高線に平行するように略東方向に開口する単室両袖型横穴式石室である。石室の遺存状況は、あまり良好でなく、石室内には

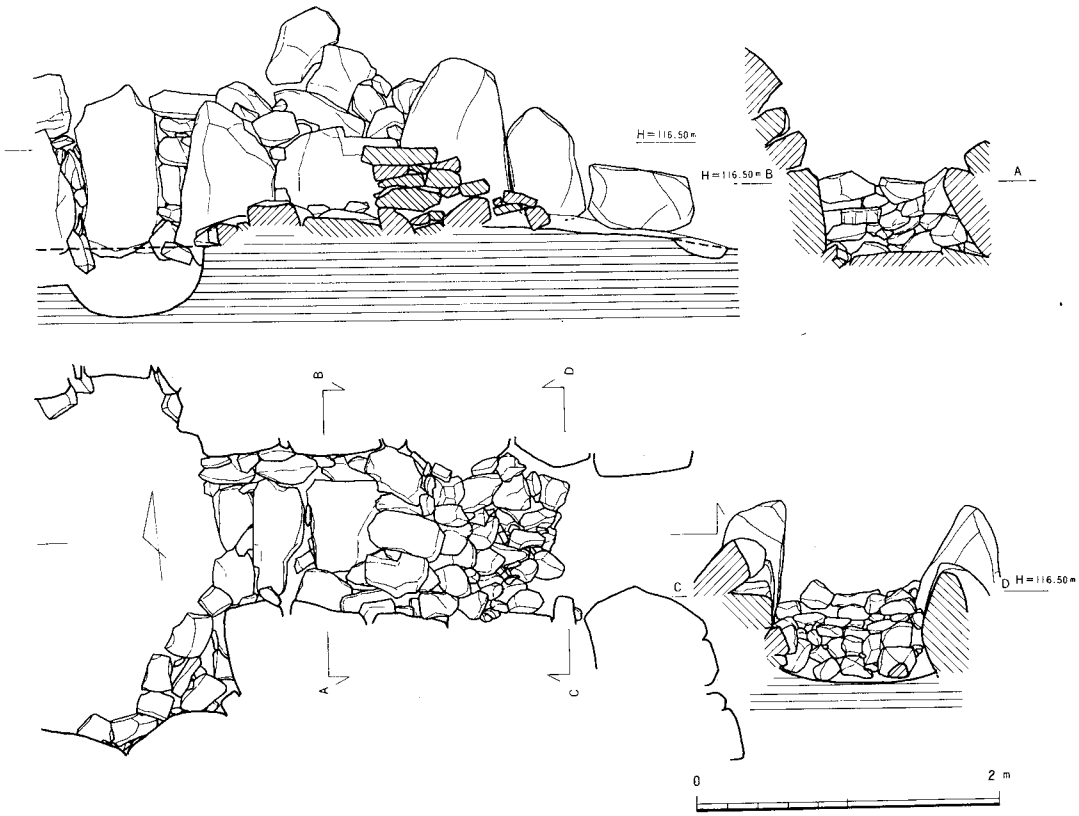


Fig. 30　Ｃ２号墳閉塞部実測図（1:50）

乙石C２号墳

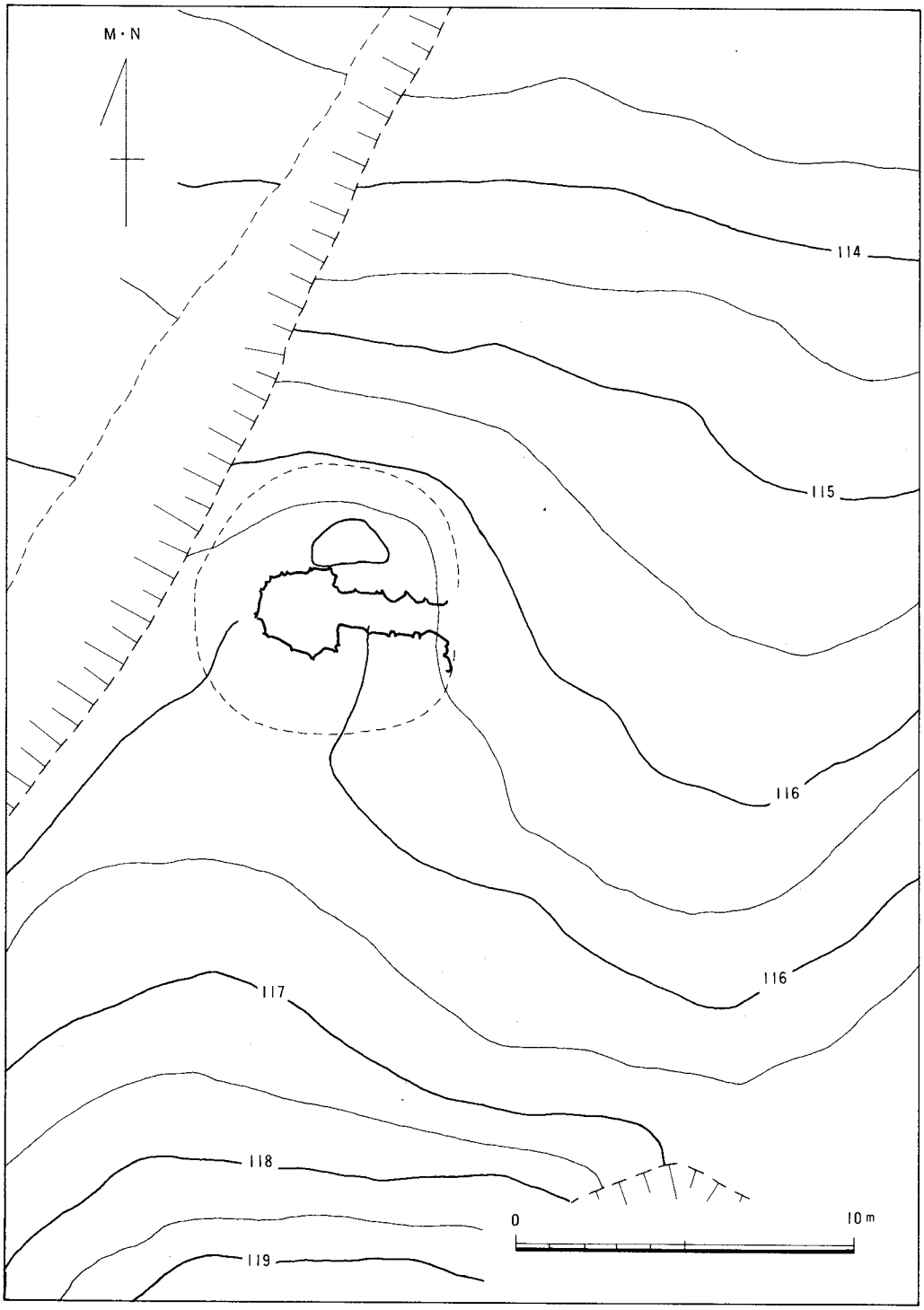


Fig. 31　C２号墳地形測量図（1:200）

壁体を構成する石材や流土が多く流入していた。又すでに盗掘を受けて、地山面に達する撹乱を受けていた。右室の平面形は、やや胴張りを呈する玄室に、細長く長い羨道が連接する。石室左壁全長5.36m、右壁全長5.37mでほぼ両側壁とも同じ長さである。使用石材の石質は、すべて未加工転石で大部分が花崗岩であるが、一部水成岩系の石材が使用される。

玄　室　奥壁幅1.48m、前幅2.13m、左壁長2.02m、右壁長1.87mを測り、奥壁が狭く、前幅が広く、やや張りの台形に近い平面形を呈す。

各壁体の構成については、左壁は腰石3石、平均0.7×0.9m程度の石材を用い、一石は横位、あとの2石は縦位に置く。二段目以上は、積み方としてやや内傾し、同時に斜めに目路が通るように横積みする。左壁と左袖隅角部分は、二段目以上に力石を用い固定する。右壁も腰石3石、左壁と同規模の石材を用いる。2段目以上は、残存が不良で積み方は不明である。腰石は全て縦位に立てる。奥壁は腰石3石で、左側の一石は、0.7×1.3mと大きく、他の2石は平均0.5×0、8m程度と1/2近くに小さくなり、縦位に立てる。両側の腰石は、両側面と斜に接する事により力学的安定を計る。各壁石間には、小石が間隙を埋めるように補完される。

玄門部は、立派な両袖を有する。左袖幅0.7m、右袖幅は0.65mを測る。左袖石は高さ1.2mを測る長方形の大きな転石を、やや右傾するように縦位に立てる。右袖石は、左に比べやや小さい長方形に近い石材を縦位に立てる。

床面は攪乱がひどく、敷石は、かろうじて左袖隅角部分が残っている程度である。20〜30cmの扁平な転石を使用している。

羨　道　左壁全長3.17m、右壁全長3.21mでほぼ左右両壁とも同じ長さ。羨道幅は奥で1.05m、前で1.08mで、ほぼ変わらない。羨道の長さに比し、その幅は1/3と狭い。壁体の残りは、あまり良好でなく1〜2段程度しか残存していない。左壁腰石は、一部を除けば、玄室内より小さく縦位に立てる。2段目以上は、残りが悪く、不揃いな転石を、壁石間を埋めるように雑に積み上げる。右壁の腰石は、左壁に比べてやや大きく、袖石から3番目は、左壁と対応するように特に大きい。袖石から2番目、5番目は横位に立てる。他は縦位に立てる。腰石間には小ぶりの転石を充塡しており、2段目以上は、左壁と同様不揃いな転石を雑に積み上げている。

梱石は、二重の梱石が見られ、第二梱石は左袖から0.2m、右袖から0.33m羨道に入った所に存在し、0.35×0.80mで断面長方形の細長い転石を用いる。第1梱石は第2梱石より0.9m程度の間隔を持って存在し、比較的大きな長方形の扁平な石材を2石並べる。

床面には、敷石が見られ、かなり大きな扁平な転石を用い、間隙には更に小ぶりの石を補塡する。

閉塞施設　袖石から1.2m入った所より始まり、長さ1.5m・高さ0.4m、羨道幅一杯に閉塞する。丁度羨道の中間あたりに位置する。上半部がすでに欠失する。石室開口部から見た場

合、前面は雑に積み上げる。内面は上部程せり出すが、平坦な面を持つ転石を用いて、内面を揃える。石材は、内面程大きなものを用い、開口部に近い程小ぶりの石材になる。使用石材は全て花崗岩転石である。

３）出土遺物（Fig. 32、33）

玄室内及び羨道部、羨道閉塞部より遺物が出土した。玄室内は、攪乱がひどく、比較的攪乱を受けていない、左右袖石両隅角部分より遺物が出土した。

出土遺物は次の通りである。

装　身　具

　　耳　環　　１個体

容　　器

　　須恵器　　９個体

　　土師器　　１個体

出土遺物中、実測したものについて述べる。

装身具

耳環（Fig. 31）　古墳の近くで表採された。長径 2.7㎝短径 2.5㎝、断面は径 0.6～0.7㎝の円形を呈す。中実の銅胎に金箔を置いたものである。表面は、腐食が著しい。

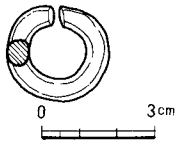


Fig. 32　C２号墳遺物実測図Ⅰ（1:2）

須恵器

杯蓋（Fig. 32・１～４）　大きく形態的に２分類する。

Ⅰ類（１・２）　２個体出土。１体部と天井部の境に鈍い凹線がめぐり、口縁内面に段を有す。口縁部は直立し、端部はやや外反気味に丸くおさまる。天井部 1/2 に回転ヘラ削り、天井内面 1/2 は、不定方向のナデを行う。天井部にヘラ記号を有す。ロクロ回転は時計回り、色調は暗褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質だが砂粒をやや含む。口径 12.0㎝、器高3.9㎝を測る。２口縁1/3を欠失し、１と形態的に類似するが、体部と天井部の境が明瞭でなく、口縁内部に段を有しない。口縁部は直立し、端部はやや外へ開き気味である。天井部 1/2 に回転を行い、天井内面 2/3 は不整方向のナデ仕上を行う。ロクロ回転は時計回り、天井部にヘラ記号を有す。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土はかなり大粒の砂粒を含む。口径11.7㎝、器高3.9㎝を測る。

Ⅱ類（３・４）　２個体出土。３天井部と体部の境が不明瞭で、口縁部は短く直に屈折し、端部は嘴状を呈す。天井部中央に中窪みの断面台形の扁平なつまみを有する。天井部 1/2 に回転ヘラ削りを施し、天井内面1/2に不定方向のナデを行う。天井部にヘラ記号を有し、ロクロ回転は時計回り。色調は赤褐色、焼成は良好堅緻、胎土は良質で砂粒を少量含む。口径12.0㎝、

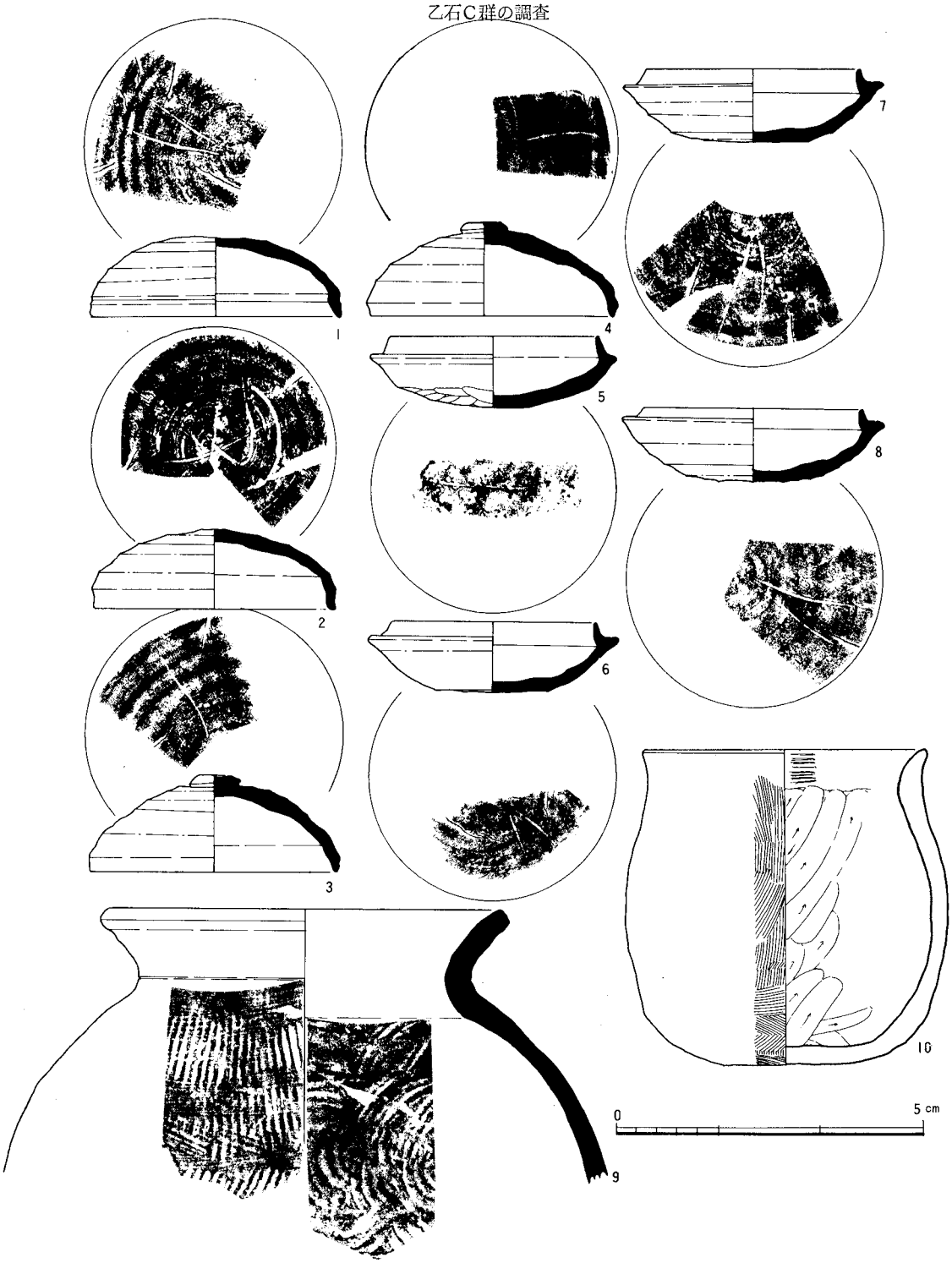


Fig. 33　C 2 号墳遺物実測図Ⅱ (1:3)

器高 4.8cm を測る。4・3とほとんど同じ形態であるが、口縁部がやや内傾する。天井部のつまみは扁平で、中窪み状を呈す。天井部に1と同種のヘラ記号を有す。ほぼ全面に自然袖がかかる。ロクロ回転は時計回りで、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好堅緻で、胎土は良好、砂粒を少量含む。口径は11.8cm、器高は4.6cmを測る。

杯身（Fig. 32—5～8）　形態により2類に分類する。

Ⅰ類（5）　2/3を欠失する。底部はやや丸みをおび、受部は短く水平にのび、端部を丸くおさめる。立ち上がりは、受部との境をつけないまま、やや内傾気味に、0.9cm の高さで立ち上がる。大部分を欠失するので、底部の仕上げは静止ヘラ削りを行った後、ナデ調整を加え、底部内面は不定方向のナデ調整である。色調は青灰色を呈し焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を多く含む。口径10.1cm、受部径11.9cm、器高3.5cmを測る。

Ⅱ類（6、7、8）　3個体出土。7は完形である。底部は狭い平坦面を持ち、受部は水平に引き出され、端部を丸くおさめる。立ち上がりは比較的短く内傾し、口縁内部と体部の境に段を有す。底部1/2に回転ヘラ削り、底部内面に不定方向のナデを加える。天井部にヘラ記号を有す。ロクロ回転は時計回り。色調は灰褐色、焼成は良好堅緻。胎土はやや砂粒を含む。口径9.9cm、受部径 12.3cm、器高 3.4cmを測る。6は1/2を欠失し、受部と立ち上がりの境に沈線が入る。底部にヘラ記号を有す。ロクロ回転は時計回り。色調は暗灰褐色で、外面に自然釉がかかる。焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を少量含む。口径10.4cm受部径12.7cm、器高3.6cmを測る。8は完形で、底部にヘラ記号を有す。ロクロ回転は時計回り。色調は青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を少量混入する。口径10.6cm、受部径12.8cm、器高3.6cmを測る。

甕（Fig. 32—9）　羨道部より出土、口頸部は体部からラッパ状に大きく外反し、口頸部と体部の境に浅い凹線がめぐる。口頸部内外面は、横ナデを加える。体部外面は、平行線の叩き、内面は同心円状の叩きを加えるが、いずれもナデで消す。色調は青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質。推定口径19.0cmを測る。

土師器

甕（Fig. 32—10）羨道内より出土。1/2を欠失する。底部はやや平坦を呈し、体部は底部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外傾気味に短く立ち上がる。口縁部と体部の境は明瞭でなく、肥厚し、端部に行くにつれて薄くなり丸くおさまる。体部上半部は、刷毛を上下方向に加え、下半部は不整方向に加える。内面は口縁部に横方向の荒いハケ目を加え、体部内面及び底部内面はヘラ削りを加える。色調は明褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土はやや砂粒を含む。口径13.6cm、最大胴径14.9cm、器高15.4cmを測る。

4　乙石C３号墳

１）位置と現状（Fig. 24・34）

本墳は、舌状にのびる丘陵斜面標高107～109mの間に位置する。調査した３基の内、もっとも下方にある。調査前には、墳丘はわずかな高まりを見る程度で、しかも道路工事によって墳丘西側半分は削られていた。天井石を失ない、石室の一部が露呈していた事から、古墳である事が確認された。古墳の東側は、小さな谷の流路になり、開口部は、流路に臨む。

２）墳丘（Fig. ⑧、35・37）

地山整形　本墳は舌状にのびる尾根筋に位置し、比較的緩斜面に構築される。地山には花崗岩脈が露頭している。地形は南が高くゆるやかに北へ傾斜して行く。地山整形による馬蹄形溝は高所である南側、Ⅰ区・Ⅱ区に認められる。幅２m、深さ0.1mを測り、やや窪む程度である。馬蹄形溝は、標高 108m 付近から始まり、そして溝内側を墳丘基底面をなすように平坦に整地する。

墳丘　西半分は道路工事によって削平され、東側に墳丘がわずかに残存するのみである。墳丘径は南北6.7m、東西6.0mを測り、やや楕円気味の不整円形を呈す。墳丘高は石室奥壁基底面から 0.9m を測る。石室の掘方が比較的浅いことから、相対的に本来の墳丘は、もっと高かったものと考えられる。墳丘盛土の形成は一気に行われたらしく、全体的にそれほど叩きしまっていない。

３）横穴式石室（Fig. ⑨、36）

本墳の埋葬施設は、開口主軸方向 S－87°－E に取り、等高線にほぼ直交するように略東の方向に開口する単室両袖型横穴式石室である。石室の遺存状況はすでに天井石を失い、奥壁を除けば、左右両壁はほぼ腰石を残す程度であった。

石室平面形は、方形の玄室に、玄室と同じ長さのやや幅広の羨道が連接する。石室全長は、左壁、3.30m、右壁3.41mを測り、やや右壁が長い。墳丘南裾には、羨道左壁先端から続く列石がめぐる。石室を構成する石材は、すべて未加工転石で、花崗岩が大部分を占めるが、一部水成岩系統の石材が認められた。

玄室　奥壁幅1.84m、前幅1.84m、左壁長1.50m、右壁長1.64mを測り、やや横長の方形の平面形を呈す。各壁体の構成は、左壁は腰石２石、 0.9×0.75m、0.85×0.75m の同程度の比較的方形に近い石材を横位に据える。腰石間には、上端の高さを整えるように小ぶりの石材を

乙石C３号墳

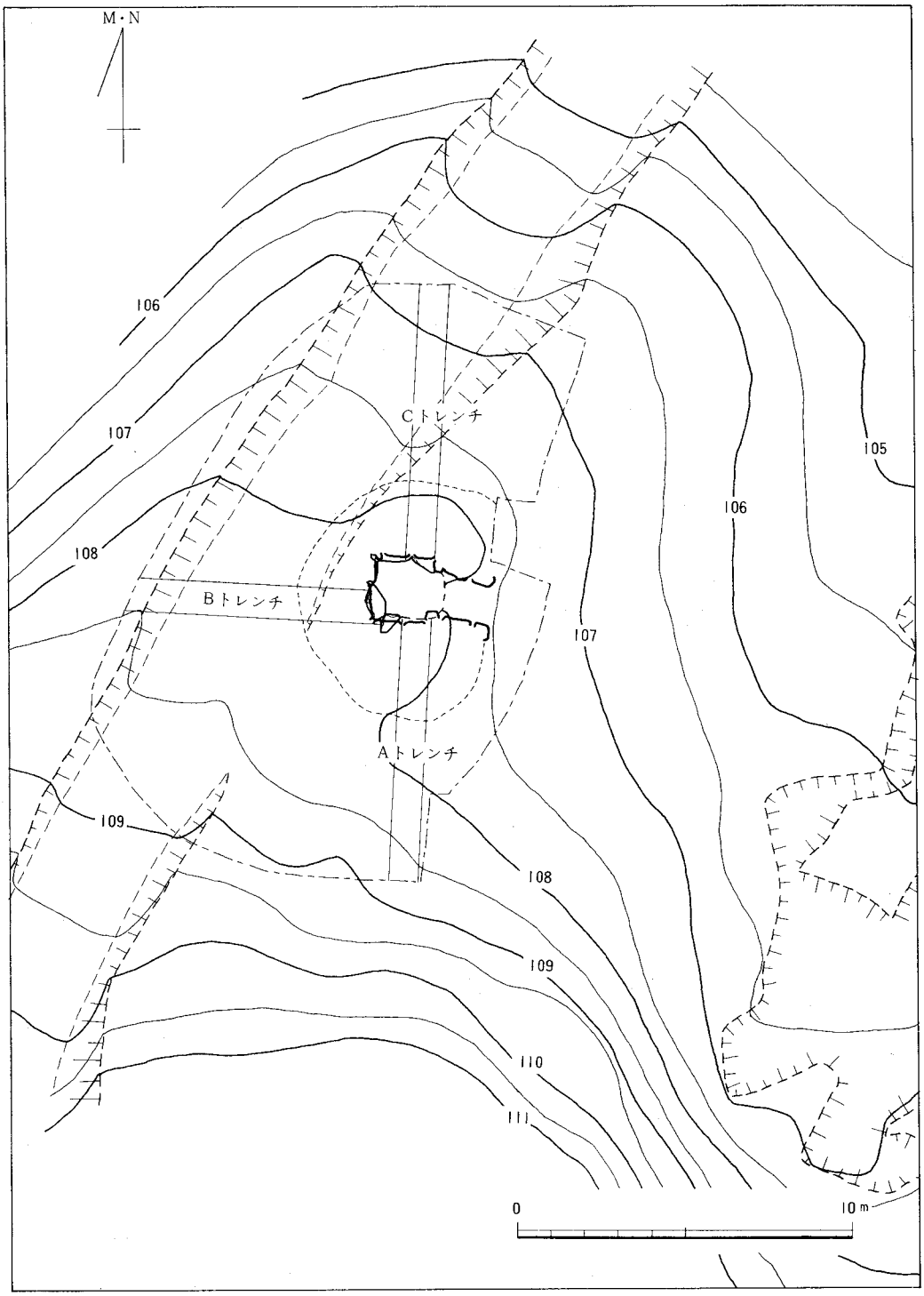


Fig. 34　C３号墳地形測量図（1:200）

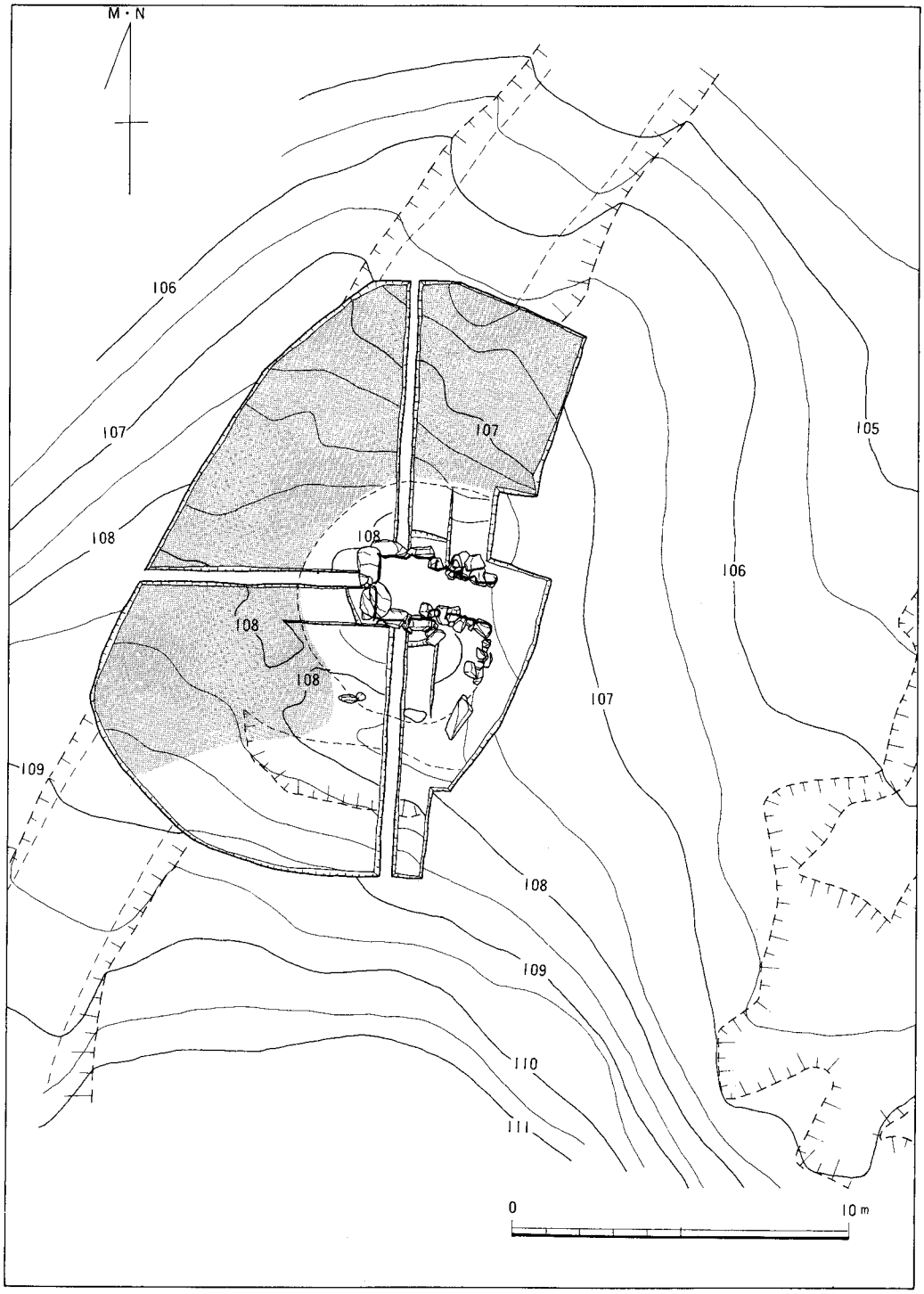


Fig. 35　C 3 号墳墳丘遺存図（1:200）　アミは花崗岩露頭部

補充する。壁体はやや内傾する様に据える。右壁も腰石２石で、左壁よりやや小さい石材を横位に置く。奥壁は腰石２石。幅１ｍ前後の比較的大きな石材を横位に置き、２段目以上も長さ１ｍ前後の石材を横位に積む。壁体はかなり内傾し持ち送り傾向が強く、各構成材間には、小石が充塡されている。石材は、ほぼ上下水平に目路が通るように積まれており、重箱積み技法に類似する。

玄門部は、左右に簡単な袖石を持つ。左右袖幅は、各 0.3ｍ を測る。左右両袖石とも比較的小さな先端が尖がった石材を用い雑に縦位に置く。やや内傾気味なのは、安定を欠いているためで、本来は直立していた。左右両壁の袖石に隣接する腰石と、両袖石が硬砂岩系統の水成岩転石である。

床面は本来敷石が存在していたのであろうが、地山面まで達する攪乱により、存在しない。

羨道部　左壁全長1.85ｍ、右壁全長1.81ｍを測り、ほぼ同じ長さである。奥幅1.10ｍ、前幅1.13ｍを測りほぼ一定の幅であるが羨道はやや左側に斜めに曲る。壁体の構成は、左右両壁とも、腰石とその上に１～２石を有するのみである。左壁腰石は、一部横位に立て、外は縦位

Fig. 36　C３号墳閉塞部実測図（1:50）　アミは花崗岩露頭部

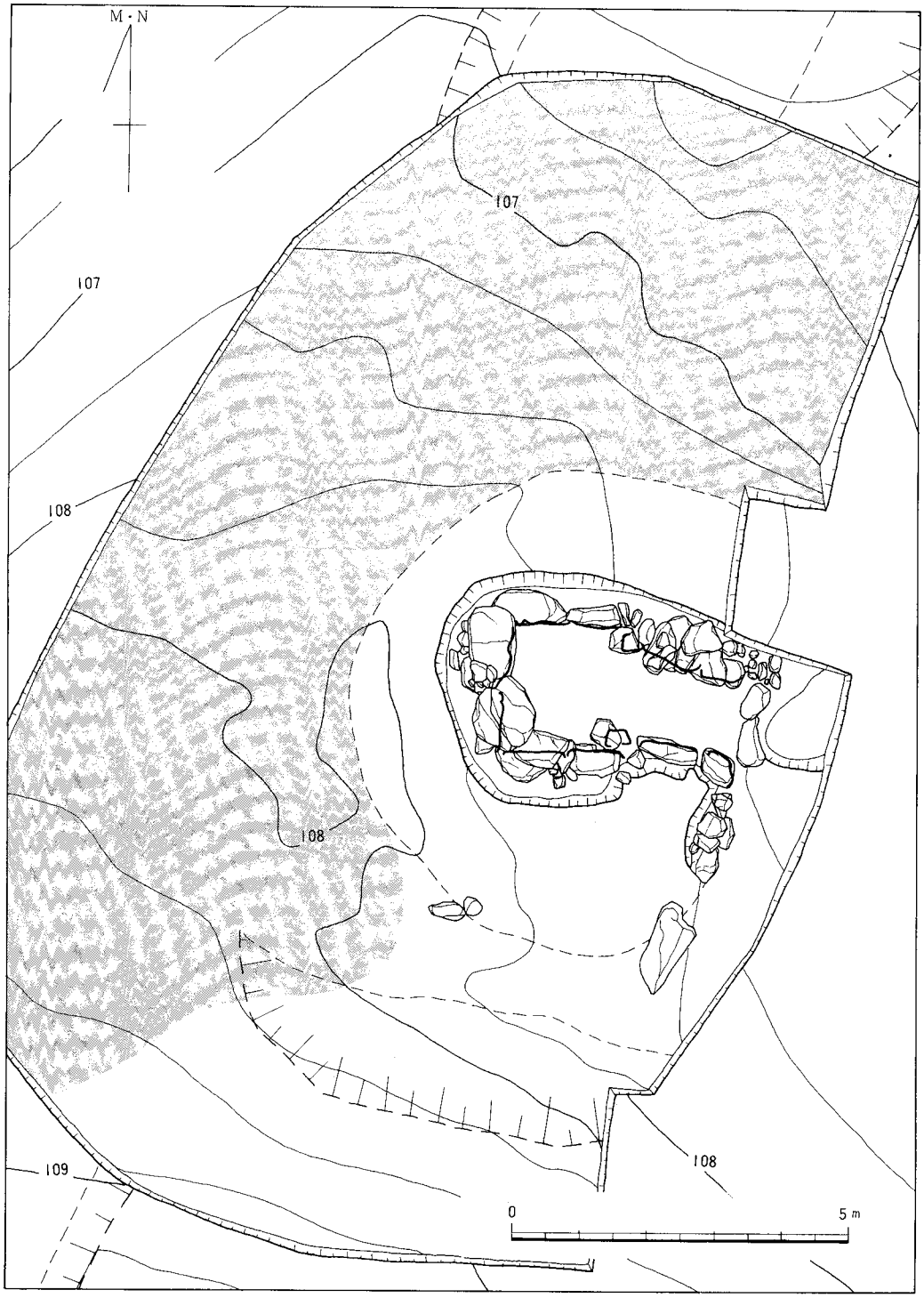


Fig. 37　C 3 号墳地山整形図（1:100）

に立てる。２段目以上は、腰石に比べ小さな転石を雑に横積みする。右壁腰石も同じく横位に立て、２段目以上も左壁と同様である。

梱石は玄門から0.1m羨道側に寄った位置にある。梱石は 0.5×0.2m の断面長方形の細長い石材を用いる。西側半分が欠如している事から本来、同程度の石材２石で梱石を構成していたと思われる。

墓道　墓道の存在は、調査区の関係から確認出来なかった。

閉塞施設　玄門部から1.1m羨道内に入った所から、長さ0.75m、高さ0.4m羨道幅一杯に存在した。上半部を欠失する。石材は大小大きさの不ぞろいな転石で雑然と積み上げている。石材はすべて花崗岩である。

石室掘方　斜面に直交するように形成される。長さ4.5m、最大幅3.5mのやや胴張り気味の隅丸方形を呈し、深さは最大で 0.4m を測る。腰石掘方は玄室部では地山面に達する撹乱で荒され確認出来ないが、羨道では浅い掘方を作っている。掘方内のレベルは、羨道内ではほぼ水平。開口部から東に向けてゆるやかに下方に傾斜して行く。

４）出土遺物（Fig. 38、39、40、41）

玄室、羨道、墳丘及び周溝より遺物が出土した。玄室内は攪乱を受けているが須恵器、土師器等が出土した。右袖隅角部分出土の遺物は比較的原位置を保ち、時期差を持つ杯身３個体、杯蓋２個体、計５個体（Fig. 39―７・２・９・13・12）が積み重ねた形で出土した。羨道部の床面に密着する形で杯身と杯蓋が出た。周溝内よりは、須恵器の大甕の破片が出土したが、細片で復元不可能であった。墳丘土からも若干須恵器の破片が出土した。出土遺物は次の通りである。

農　工　具
　　鉄　斧　　１個体
容　　器
　　須恵器　　19個体以上
　　土師器　　２個体
そ　の　他
　　鉄　滓　　１個体

農工具

鉄斧（Fig.38）　玄室内床面埋土中より出土。完形品であるが、全面にかなり錆が付着している。全長7.5cm、刃部幅4.3cm、袋部幅3.5cmを測る。袋部は長さ4.9cm 断面は楕円形、厚さ0.4cmを測る。刃部は両刃である。鍛造である。

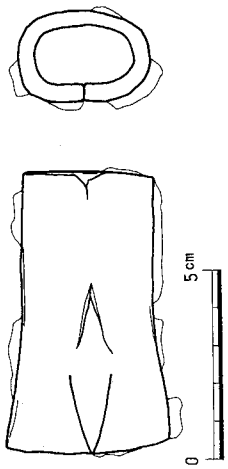


Fig. 38　C３号墳遺物
実測図Ⅰ（1:2）

須恵器　実測出来たものについて記す。

杯蓋（Fig. 40—1～8）　形態により5類に分類する。

Ⅰ類（1）　Ⅱ区墳丘上より出土。天井部が平坦を呈し体部との境が明瞭である。口縁はやや直立気味で、体部との境に浅い凹線がめぐる。内面は口縁と体部の境に段を有し、端部を丸くおさめる。天井部から体部1/2は回転ヘラ削り、底面は不定方向のナデを施す。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質であるがやや砂粒を含む。口径11.8cm、器高3.7cmを測る。

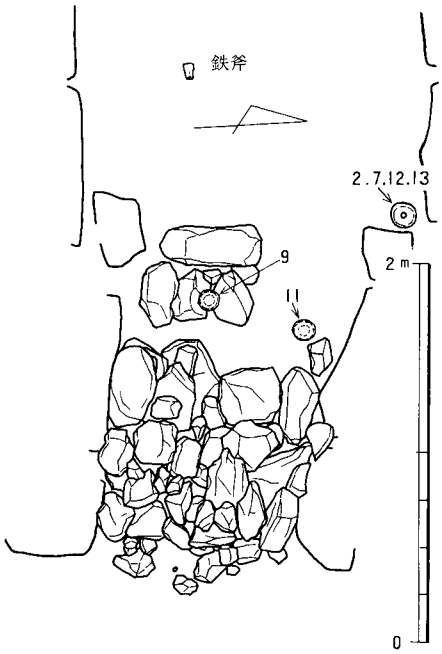


Fig. 39　C3号墳遺物出土状況図（1:40）

Ⅱ類（Fig. 40—2・3）　2は玄室右袖右隅角より出土。完形で天井部が平坦化し、天井部から口縁部にかけて緩くカーブし、口縁端部はやや厚手で、外反気味に丸くおさめる。器形は全体的に台形状を呈す。天井部には、ヘラ切り離し痕が残り、ナデの雑な仕上げを行う。天井内面は不定方向のナデ仕上げを行う。天井部にはヘラ記号を付す。色調は灰褐色で、やや焼成はあまい。胎土は砂を少量混入する。口径11.4cm、器高4.2cm。3は2/3を欠失し、2より口径が大きく、器高が低い。口縁端部は短く立ち、口縁部はやや厚みをまし口縁端部はやや鋭角におさめる。口縁内外には体部との境をなす稜線が入る。天井部はヘラ切り離し痕が残り、ナデの雑な仕上げを行う。色調は灰褐色、焼成はやや悪くもろい。胎土は良質。口径11.8cm、器高3.5cmを測る。

Ⅲ類（Fig. 40—4～6）　4は玄室内より出土。1/2を欠失する。天井部に宝珠形のつまみを有す。天井部から体部の境は、やや緩やかなカーブを持ち口縁部へと続き、口縁端部は丸くおさめる。かえりは低く内傾し、口端部よりやや上方に位置し、体部との境に稜線を有す。天井部は回転ヘラ削り、天井内面は不定方向のナデ仕上げを加える。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好堅緻である。ロクロ回転は時計回りである。口径13.4cm、かえり径10.6cm、器高3.9cmを測る。5は玄室より出土。口縁1/3を欠失する。形態は4とほぼ変わらない。口縁内のかえりは低く内傾し、口縁部と同じ高さにある。かえりと体部との境に稜を持たず、内面上に一条の沈線が廻る。天井部は回転ヘラを施す。天井部内面は不定方向のナデを行う。ロクロ回転は時計回り、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土は良質である。口径13.9cm、かえり径12.0cm、器高3.9cmを測る。6は玄室内より出土。口縁部の一部を欠失する。全体に焼きひず

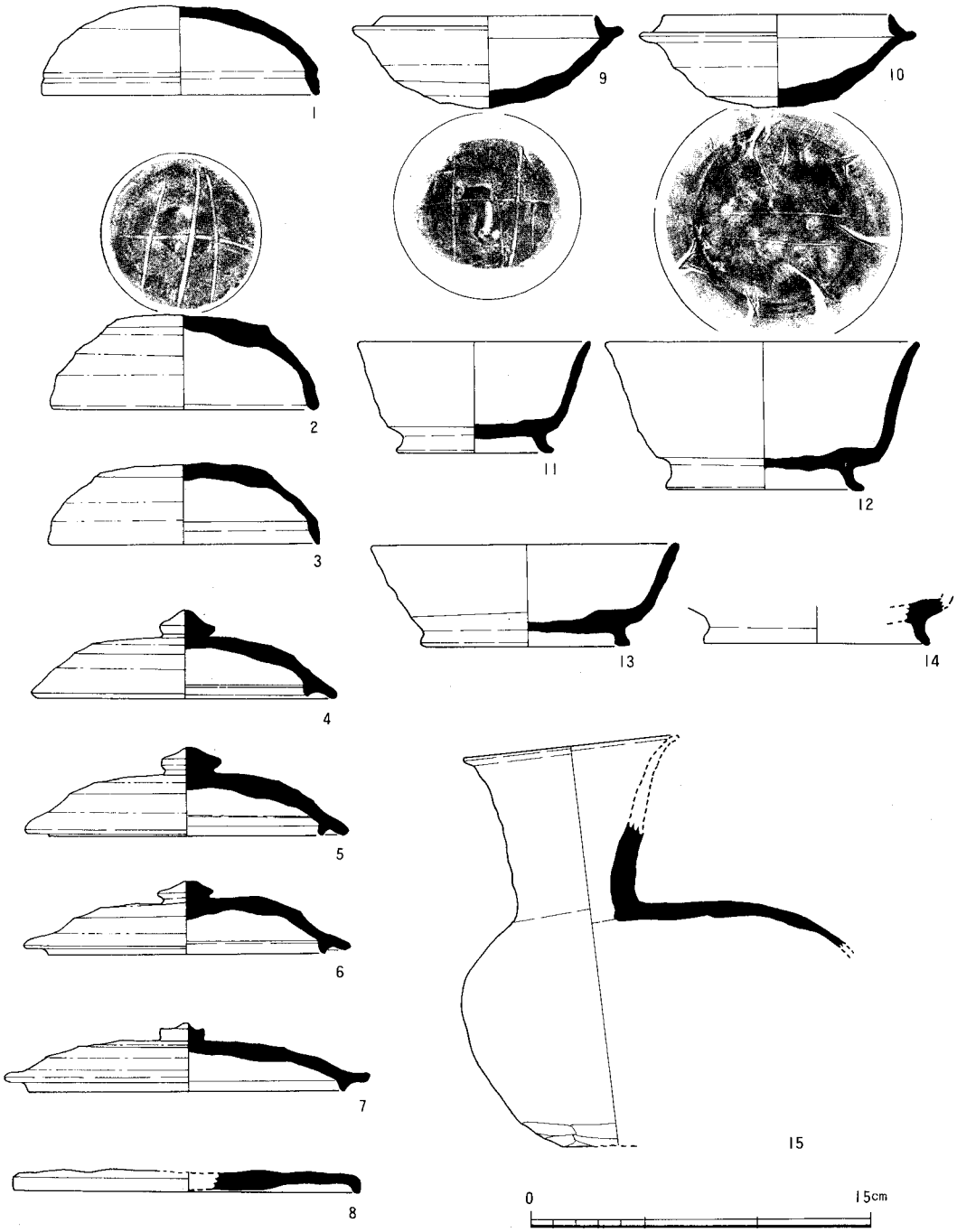


Fig. 40　C３号墳遺物実測図Ⅱ (1:3)

む。かえりは短く内傾し、口縁端部より下方に位置し、やや幅広く、体部との境に稜線を有す。ロクロ回転は時計回し。一部自然袖がかかる。口径14.3cm、器高3.2cmを測る。

Ⅳ類（Fig. 40—7） 玄室内より出土。ほぼ完形。全体に扁平で、天井部と体部の境は不明瞭。口縁端部は外反するように水平に引き出され、丸くおさめる。かえりは短く直に下方に延びる。天井部中央には宝珠形つまみの面影を残した扁平の釦状のつまみを有する。天井部外面は回転ヘラ削り、天井内面は不定方向のナデを施す。ロクロ回転は時計回り。色調は青灰色、焼成は良好。胎土は砂粒を含む。口径13.4cm、受部径16.1cm、器高3.0cmを測る。

Ⅴ類（Fig. 40—8） 全体に扁平な形状を呈し、口端部は短く屈曲し丸くおさまる。天井部1/2に回転ヘラ削りを施し、内面中心1/2は不定方向ナデを行う。外面全体に自然袖が見られる。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土も良好、口径15.0cm、器高0.9cmを測る。

杯身（Fig.40、9～14） 形態の差から大きく2類に分類する。

Ⅰ類（10） 9は玄室内より出土。ほぼ完形。立ち上がりは、受部より短く内傾し端部尖はり気味におさめる。受部はわずか上方に引き出し、体部との境を不明瞭にしたまま底部へ続く。底部はゆるやかな丸味を持ち、安定感はない。底部の調整は雑であり、ヘラ切り離し痕を残す。底部内面は不定方向のナデを加える。色調は灰褐色、焼成はやや不良でもろい。胎土は良質。口径9.4cm、受部径11.9cm、器高4.1cmを測る。10もほぼ9と同様であるが、底部が9より平坦化する。色調は灰褐色、焼成はやや不良。胎土は良質。口径9.9cm、受部径12.2cm、器高4.1cmを測る。2個体とも底部にヘラ記号を有す。杯蓋Ⅱ類とセット関係をなす。

Ⅱ類（11～14） Ⅱa、Ⅱbの両類に、底部体部の境の明瞭さ、及び高台の形状で細分する。

Ⅱa類（11・12） 11は完形。底部と体部の境は稜を付けて明瞭に立ち上がり、口縁端部はやや外反気味に丸くおさめる。高台部は細長く外側に開き、端部を外側につまみ出すように丸くおさめる。底部は回転ヘラ削り、後ナデ仕上げ、底部内面は不定方向のナデを加える。ロクロ回転は時計回り、色調は暗青灰色、焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を少量含む。口径10.2cm、高台底径6.7cm、器高4.9cmを測る。12は全体的に大きく、完形で全体的に薄手でシャープに作られる。調整は11とほぼ同じであるが、底部にヘラ切り離しの痕跡を残す。ロクロ回転は時計回り。色調は黒灰色、焼成は良好堅緻、胎土は良質。口径13.8cm、高台径は8.5cm、器高6.6cmを測る。

Ⅱb類（13） Ⅱa類に比べ、口径の割に器高が低い。底部と体部の境は、ヘラ削りによって区別する。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。高台は、太く短くハの字状に外側へふんばる。高台内面は稜をつけて端正に仕上げる。底部内面は不定方向のナデ、高台部は横ナデ、底部は回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転は時計回り、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好堅緻、胎土はやや砂粒を含む。口径13.3cm、高台径8.9cm、器高4.5cmを測る。

14は、底部のみであるが形状からⅡａ類に近い。

平瓶（Fig. 39—15）　玄室内より出土。体部下半部と底部 1/2 を欠失する。口頸部は外反して、体部上面の中心から外れて接合される。口縁端部を薄く水平に引き出す。体部上面はやや丸みを持ち、底部は平坦をなす。口頸部及び体部の内外面は横ナデ、体部の最下部は静止ヘラ削り、口頸基部内面はヘラ削りを行う。ロクロ回転は時計回り、色調は青灰色、全体に自然釉が付着する。焼成は良好堅緻、胎土は砂粒を少量含む。復元口径 9.7cm、現存器高は18.2cmを測る。

長頸壺（Fig. 40—16）　Ⅳ区墳丘土と羨道内より出土。口頸部と体部上半部の一部分のみ。口頸部は、ゆるく外反して開く。口縁端部は外方に水平に引き出され、端部を丸くおさめる。体部は上半で鋭く屈折し、稜が出来る。全体に横ナデ仕上げである。色調は青灰色、焼成は良好堅緻、胎土は良好であるが、砂粒を少量含む。復元口径13.0cm、最大胴径18.8cmを測る。

直口壺（Fig. 40—17）　体部と肩の一部を欠失する。肩がはる扁平な体部に、短い口頸部がつく。口頸部は、体部からやや内傾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口頸基部及び肩部分には、２～３条の沈線が入る。底部と体部の境は指調整により凹凸に窪む。体部内外面及び口頸外面は横ナデ、底部は不定方向のナデを行い、ヘラ記号を付す。ロクロ回転は時計

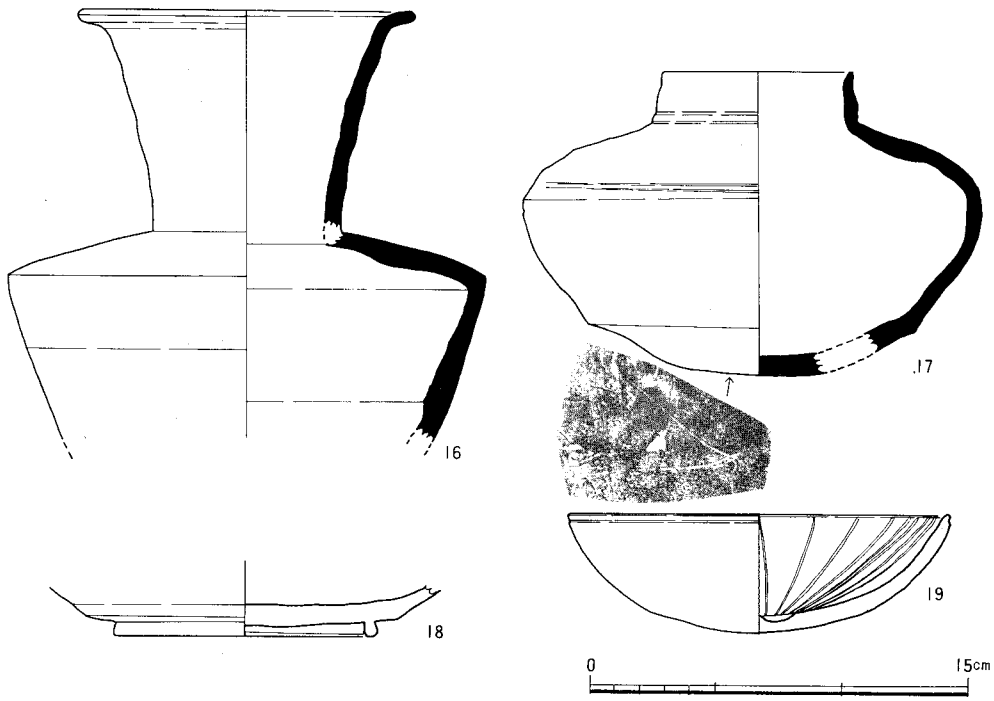


Fig. 41　C３号墳遺物実測図Ⅲ（1:3）

回り。色調は暗青灰色、自然釉の付着部分は黒化する。焼成は良好堅緻、胎土は砂粒少量混。口径7.2cm、最大胴径17.7cm、器高12.1cmを測る。

土師器

杯（Fig. 40—18） 玄室より出土。底部のみ残存。底部と体部の境は稜を持つ。高台はほぼ垂直に付く。高台端部及び内面、底部はヘラ削りを施す。体部内外面はヘラ研磨を加える。色調は明褐色を呈し、焼成良好、胎土も良質。高台径10.5cm。

椀（Fig. 40—19） 底部から口縁部にかけて緩やかなカーブを持って立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部に一条の凹線がめぐる。外面はヘラ研磨で、全体に丹が塗られる。内面に下から上へのヘラによる暗文が入る。口径15.0cm、器高4.7cmを測る。

その他

鉄滓 羨道入口部前面より1個出土している。

Tab. 2　吉武Ｅ３号墳出土遺物計測表　(単位：cm)

	類	No.	口径	器高	つまみ高		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
土師杯蓋		1	13.4	3.3	0.7		良質	良好	明赤褐色			玄室埋土
土師杯身		2	12.3	4.3			砂粒混	〃	赤褐色	時計		〃
		3	(8.9)				〃	〃	黄褐色			〃
土師盤		4	(24.2)	2.8			良質	〃	明赤褐色			Ⅰ区墳丘
		5	(23.6)	3.3			〃	〃	赤褐色			玄室埋土
		6	(20.8)	3.3			〃	〃	〃			不明
土師高杯	類	No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		7			(14.5)		良質	良好	明赤褐色			玄室埋土

Tab. 3　吉武Ｅ４号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	つまみ高		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋		イ	13.0	1.8	0.2		砂粒混	不良	黄灰褐色	時計		閉塞前面
杯身	類	No.	口径	器高	高台径	高台高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		2	13.2	5.3	9.3	0.7	砂粒混	不良	黄灰褐色	?		閉塞前面
椀		3	11.6	6.3			良質	良好	暗青灰色	時計		〃

Tab. 4　吉武Ｅ５号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	かえり径高	つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰ	1	(2.1)	2.3	10.1		良質	良好	灰褐色	時計		玄室内埋土
	Ⅱ	2	(15.6)	1.1		0.9	砂粒多	〃	赤褐色	〃		〃
	Ⅲ	3	16.9	2.3			砂粒混	〃	暗青灰色	〃		〃
		4	13.5	(1.0)			砂粒多	〃	暗赤褐色	〃		〃
	類	No.	口径	器高	高台高	高台径	胎土	焼成	色調	ロクロ回転	ヘラ記号	出土地点
杯身	Ⅰ	5	15.4	5.7			良質	良好	黒灰色	?		玄室内埋土
	Ⅱ	6	12.5	3.9			〃	〃	青灰色	時計		〃
		7	13.4	(3.2)			〃	〃	〃	?		〃
		8	15.4	5.7	12.6	0.7	〃	〃	黒灰色	?		〃

( ) 内は推定

Tab. 5　乙石C 1号墳出土土器計測表　　(単位：cm)

	類	No.	口径	器高	かりえ径	つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰ	1	12.8	4.2		0.6	良質	良好	青黒灰色	時計		羨道前半部
	Ⅱ	2	14.1	2.3		0.5	〃	〃	灰褐色	〃		玄室
		3	(13.8)		(10.9)		〃	不良	赤褐色	〃		羨道前半部
	Ⅲ	4	10.6	3.7	8.2	1.2	砂粒混	良好	青灰色	〃		羨道後半部
		5	8.7	2.9	7.5	1.0	〃	〃	灰褐色	?	有	〃
	Ⅳ	6	10.7	2.5	7.7		砂粒多	〃	青灰色	時計		玄室右袖隅角
杯身	類	No.	口径	器高			胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
	Ⅰ	7	8.3	3.2			砂粒混	良好	青灰色	時計		羨道前半部
		8	8.9	3.0			〃	〃	暗青灰色	〃		〃
		9	8.3	2.6			〃	〃	〃	〃		玄室右袖隅角
		10	9.0	3.5			良質	〃	暗灰色	?		羨道前半部
		11	9.4	3.5			砂粒混	〃	〃	時計		〃
坩		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		12	5.0	7.0	10.9		砂粒混	良好	暗灰褐色			玄室右袖隅角
短頸壺		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		13	(8.0)	14.3	(15.8)		良質	良好	灰褐色	?		羨道前半部
細頸壺		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		14	7.0	—	—		砂粒混	良好	青灰褐色	時計		羨道前半部
土師盤		15	(18.9)	3.5			良質	不良	明橙色			〃

Tab. 6　乙石C 2号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高		つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰ	1	12.0	3.9			砂粒混	良好	黒灰褐色	時計	有	玄室
		2	11.7	3.9			〃	〃	黒灰色	〃	〃	〃
	Ⅱ	3	12.0	4.8		0.6	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃
		4	11.8	4.6		0.4	〃	〃	暗赤褐色	〃	〃	〃
杯身	類	No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
	Ⅰ	5	10.1	3.5	11.9	0.9	砂粒多	良好	青灰色	?	有	玄室埋土
	Ⅱ	6	10.4	3.6	12.7	0.7	砂粒混	〃	灰褐色	時計	〃	玄室
		7	9.9	3.4	12.3	6.7	〃	〃	〃	〃	〃	羨道閉塞部前面
		8	10.3	6.6	11.9	0.5	〃	〃	青灰色	〃	〃	玄室

(　)内は推定

	類	No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
甕		9	(18.9)				良質	良好	青灰色			羨道前半部
土師器甕		10	13.6	15.9	20.5		砂粒混	〃	明赤褐色			羨道左壁

Tab. 7　乙石C 3号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰ	1	11.8	3.7			砂粒混	良好	黒灰色	?		Ⅱ区墳丘
	Ⅱ	2	11.4	4.2			〃	〃	白灰褐色	時計	有	玄室右袖隅角
		3	11.8	3.5			良質	〃	〃	〃		羨道
	Ⅲ	4	13.4	3.9	10.6	0.8	〃	〃	赤褐色	〃		玄室埋土
		5	13.9	3.9	12.0	1.2	砂粒混	〃	〃	〃		〃
		6	14.3	3.2	12.2	0.9	〃	〃	暗青灰色	〃		〃
	Ⅳ	7	16.1	3.0	13.9	0.5	〃	〃	〃	〃		〃
	Ⅴ	8	15.1	0.9			良質	〃	暗灰色	?		Ⅰ区周溝
杯身	類	No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
	Ⅰ	9	9.4	4.1		0.6	良質	良好	灰褐色	時計	有	羨道
		10	9.9	4.1	12.2	0.8	〃	〃	黄灰色	〃	〃	玄室右袖隅角
	Ⅱa	No.	口径	器高	高台径	高台高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		11	10.2	4.9	6.7	0.8	砂粒混	良好	暗青灰色	時計		羨道
		12	13.8	6.6	8.8	1.0	〃	〃	暗灰色	〃		玄室右袖隅角
	Ⅱb	13	13.3	4.5	8.9	0.8	〃	〃	〃	〃		玄室右袖隅角
平瓶	類	No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		15	(9.7)	(18.1)			砂粒混	良好	暗青色	?		玄室埋土
細頸壺	類	No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		16	7.5	12.1	18.9		良質	良好	暗灰褐色	時計		玄室Ⅱ区墳丘上
直口壺	類	No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		17	7.2	12.1	17.7		良質	良好	暗青灰褐色	時計	有	玄室埋土
土師杯身	類	No.	口径	器高	高台径	高台高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		18			10.4	0.5	砂粒混	良好	赤褐色			玄室埋土
土師椀	類	No.	口径	器高			胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		19	15.0	4.7			良質	良好	明赤褐色			玄室埋土

（　）内は推定

V　金武古墳群乙石C群3号墳及び吉武E群3・4・5号墳出土鉄滓の調査

大　澤　正　己

1

県道大野・二丈線改良工事に伴う事前調査によって、金武古墳群内の2支群6基が調査されうち4基から供献鉄滓が出土した。市教育委員会の依頼により、これら鉄滓の調査を行った。

乙石C群では、ほぼ全面が調査された3号墳から出土したのみで、他の2基からは検出されていない。吉武E群は5基で構成され、調査された3基から検出されている。乙石C3墳は7世紀初頭に造営され、7世紀末頃までの遺物を含む。吉武E3・4・5号墳は7世紀の中葉以降の造営とみられ、7世紀末から8世紀の初め頃までの遺物を含む。

供献鉄滓の年代を決定するのは困難である。玄室内から出土したばあい、初葬もしくはある特定の追葬に伴うと判断しえないかぎり、鉄滓の年代は、造営時から最終追葬までの幅のなかで考えなければならない。吉武E3・5号墳がこの例にあたる。吉武E4号墳では、閉塞石前面の羨道基底面に7世紀末～8世紀の須恵器とともに24個の鉄滓・鉄塊・鉄片が検出されており、供献年代の推定できる資料である。

これらの鉄滓・鉱滓の出土状態を Tab. 8 に示す。吉武E群の3基の古墳には、多数の鉱滓が出土しているので、それらについて簡単な説明を加えておく。

3号墳：　奥壁附近、玄室流入土内、墳丘面などから鉄滓が7個採り上げられたが、選別すると4個が鉱滓で3個は小鉄塊とみるのが妥当であろう。そして鉱滓は炉内残留滓が3個で流出滓が1個と分類できた。

炉内残留滓とは、炉操業停止時に炉内に残留した鉄滓で、原鉱（砂鉄）が木炭より還元され、さらに釜土と反応して流出滓に変化して行く過程の鉄滓であるから、炉内の残留個所によって異なり、非常に多様なものを含むと云われている。また、流出滓は、炉の操業中、排滓口から炉外に流出された鉱滓で低融点を特質とする①。

4号墳：　羨道閉塞石前面の石室基底面上から24個が採げられているが、鉱滓は15個で、このうち炉内残留滓10点、ガラス質滓4点、流出滓1点であった。残り9個は鉄片や小鉄塊酸化物と考えられる。

5号墳；　鉄滓は玄室内流入土中より出土したもので12点ある。このうち実質鉱滓は10点であり、炉内残留滓8点、ガラス質滓2点、その他は鉄片2点、小鉄塊酸化物1点であった。

各古墳ともに以上のような鉄滓・鉱滓の出土があったが、古墳1基につき代表的なものを1

点ずつ肉眼観察と顕微鏡組織を調査している。なお化学組成は、現在分析中なので、後日おって報告する予定にしている。

2

1）　金武古墳群乙石C３号墳出土鉄滓（２Ｉ－９）

肉眼観察；　表裏ともに粗鬆で赤褐色を呈し、裏面側には数個所に木炭痕を有する。破面はコークス状の気孔と黒褐色を有する。65×45×30㎜で70ｇの大きさである。

顕微鏡組織；　鉄滓組成は、かなり大きく成長した白色粒状の多量のヴスタイト（Wüstite：FeO）② と灰色の木ずり状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）③ それに他のわずかなスラグより構成されている。

粗鬆な外観とヴスタイトの成長具合からみて鍛錬鍛冶滓④と判定される。

Tab. 8　鉄滓・鉱滓の出土状態

古墳名	出土状態				推定年代	調査鉄滓内容			
	出土位置	発掘月日	個数	鉄滓内容		符号	鉄滓タイプ	サイズ(㎜)	重量(ｇ)
乙石C群３号墳	羨道閉塞石前面黒色土	78.10.21	1個	鍛錬鍛冶滓	７C初頭～７C末	２Ｉ-９	鍛錬鍛冶滓	65×45×30	70
吉武E群３号墳	奥壁附近床覆土	78.10.02	2個	炉内残留滓 小鉄塊　40×25×20㎜	７C後半～８C初頭	２Ｊ-91	炉内残留滓	40×50×25	110
	玄室流入土内	78.10.02	4個	炉内残留滓　2個 流出滓　1個 小鉄塊　1個		—	—	—	—
	Ⅳ区墳丘面	78.10.12	1個	小鉄塊(45×35×35㎜) 赤褐色粘土付着		—	—	—	—
吉武E群４号墳	羨道部 No.4	78.10.11	7個	残留滓３個　流出滓１個 ガラス質滓2個　小鉄塊1個	７C末～８C初頭	２Ｊ-92	流出滓	50×40×30	115
	羨道部 No.3	—	3個	炉内残留滓２個 ガラス質滓１個		—	—	—	—
	羨道部 No.2	—	2個	小鉄片(磁気有) (30×20×20㎜)		—	—	—	—
	羨道閉塞及び玄室攪乱土	78.10.13	2個	炉内残留滓 〃　(磁気有)		—	—	—	—
	羨道閉塞及び前面床面覆土	78.10.10	10個	残留滓３個、ガラス質滓１個、小鉄塊６個		—	—	—	—
吉武E群５号墳	玄室内流土中	78.10.03	12個	炉内残留滓７個 ガラス質滓２個 鉄片　2個 小鉄塊　1個	７C中葉～７C末	２Ｊ-93	炉内残留滓	40×35×25	68
						—	—	—	—

2）　金武古墳群吉武E３号墳出土鉱滓（２Ｊ—91）

肉眼観察；　表裏ともに赤褐色を呈し、肌は比較的なめらかで凹凸が少ない。破面は局部的に気孔があるが全体的に緻密で黒褐色を示し、比重も大きい。破片であるが40×50×25㎜の110ｇの塊である。炉内残留滓。

顕微鏡組織；　白色粒状でやや樹枝状気味に晶出したヴスタイト（Wüstite：FeO）とやや成長した灰色短柱状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）それに暗灰色の地のスラグから構成されている。

先に述べた乙石Ｃ３号墳出土鉄滓（２Ｉ—９）とはヴスタイトの晶出に差異がみられる。２Ｊ—91は低チタン砂鉄を装入した製錬滓⑥と判定される。

３）　金武古墳群吉武E４号墳出土鉱滓（２Ｊ—92）

肉眼観察；　黒色飴状を呈する流出滓である。表皮の表面には小さい気孔が有り、やや粘稠性を示す。裏面は赤土がしみ込んで赤褐色を有するが、本来は黒褐色であろう。部分的には大きな気孔が点在し、青灰色化した付着粘土が認められる。破面は黒色で非常に緻密である。

顕微鏡組織；　鉱物組成は白色粒の樹枝状で晶出したヴスタイト（Wüstite：FeO）と白色多角形のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）⑥との共晶で観察され、これに灰色長柱状に大きく成長したファイヤライト（Fayalite；$2FeO \cdot SiO_2$）と地の暗灰色のスラグから構成されている。ファイヤライトの成長具合からみて、流出滓であるが徐冷滓であろう。この鉱滓も低チタン砂鉄を装入した製錬滓と判定される（マグネタイトはチタン含有砂鉄粒子である）。

４）　金武古墳群吉武E５号墳出土鉱滓（２Ｊ—93）。

肉眼観察；　表皮は淡赤褐色を呈し、肌はやや凹凸を有する。裏面も表面と同色で部分的に大きな気孔（径３㎜前後）が点在するが、全体的には緻密で黒色を示している。炉内残留滓の破片である。

顕微鏡組織；　白色粒状のやや成長したヴスタイト（Wüstite：FeO）と淡灰白色多角形状のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が共晶で現われており、これに大きく広がって成長した灰色のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）とわずかの地のスラグから構成されている。

炉内残留滓であるため、徐冷されておりファイヤライトは十分に発達した結晶になっている。これも低チタン砂鉄装入の製錬滓である。

3

まとめ

〔１〕　金武古墳群乙石Ｃ３号墳は７世紀初頭以降に比定される古墳であるが、これより供献鉄滓が１点検出されている。これは粗鬆な外観と破面がコークス状を呈し、顕微鏡組織に大きく成長したヴスタイト（Wüstite：FeO）が存在することから鍛冶滓と判定された。

古墳供献の鍛冶滓は６世紀中頃以前には羽口共伴で出土するが、６世紀後半以降になると

鍛冶滓単独が多い。6世紀後半以降は、砂鉄製錬の盛行期で鍛冶滓の供献割合は減少する傾向にある[7]。

〔2〕　金武古墳群吉武E3・4・5号墳出土鉱滓は製錬滓で、いずれも低チタン含有砂鉄を原料として鉄生産を行なっている。

3号墳；　7世紀後半～8世紀初頭。炉内残留滓を中心にしてガラス質鉱滓、流出滓、小鉄塊をとり混ぜて供献している。調査鉱滓は炉内残留滓であるが、ヴスタイト（Wüstite：FeO）が樹枝状に晶出していて製錬温度はあまり高くない（1200～1300°C）。低チタン砂鉄の製錬滓である。

4号墳；　7世紀末～8世紀初頭。1号墳と同じように炉内残留滓、ガラス質鉱滓、流出滓が15個羨道部に供献されていた。また、鉄片や小鉄塊酸化物が8個も混在していた。

この古墳出土鉱滓では流出滓の顕微鏡組織の調査を行なったが、樹枝状白色粒のヴスタイト（Wiistite：FeO）と脱チタン半還元砂鉄粒子、マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の共晶がみられ、ここでも低チタン含有砂鉄の製錬滓でのファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の成長具合から徐冷を受けていることが明らかとなった。

5号墳；　7世紀中葉～7世紀末。この古墳の供献鉱滓は、流出滓はなく炉内残留滓とガラス質鉱滓が10個と小鉄塊・鉄片が3点である。いずれも玄室内流入土から検出されている

炉内残留滓の検鏡結果では、多目のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）とヴスタイト（Wüstite：FeO）の共晶、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の成長から、やはり低チタン砂鉄の製錬滓であることが判った。

〔3〕　金武古墳群の周辺には、製錬炉でもって鉄生産を行なった集団が存在し、これらの工人に関与した被葬者に供献した鉱滓からの7世紀初頭～8世紀初頭の時点で、砂鉄製錬が、まだ畏敬と神秘性のまなざしで操業されていたことがうかがわれる。

註

① 丸山益輝「鉄滓による〝たたら〟炉内反応の解析」『たたら研究』第22号。たたら研究会。1978

② ヴスタイト（Wüstite：FeO）。Fe—O_2 系2元状態図における Fe と O_2 との固溶体のこと。FeO（O_2, 22%）は αFe とヴスタイトとの混合物であることが知られる。またヴスタイトを冷却してゆくと、570℃で分解し、この温度で Fe_3O_4 と α 鉄に分かれる共析反応（eutectoidreaction）をおこす。

すなわち

$$\text{Wüstite} \overset{570°C}{\rightleftarrows} Fe_3O_4 + \alpha\text{鉄となる。}$$

鉱物特性

光学的性質；　マグネタイトと同様に等軸晶系に属し、反射偏光を示さない。屈折率もマグネタイトよりわずかに低く、色調もマグネタイトより灰色を帯びているが、その差はあまり大きくない。形状は一般に球状、樹枝状およびマグネタイトとの共晶の形で観察されるが、光学的性質だけではマグネタイトと識

別しがたい。透過光ではマグネタイトと同様、不透明である。

腐蝕性； ヴスタイトの明確な識別は、エッチ・テストによるのがよく、 $SnCl_2$ 飽和溶液により1～2 min で完全か、それに近い程度まで腐蝕されるのでマグネタイトと識別される。

微小硬度； 焼結鉱中のヴスタイトは一般にマグネタイトと共晶をなしており、微小硬度は450～500Hv程度で、マグネタイトよりいくぶん低い値を示す。

③ ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）斜方晶系に結晶する鉄ケイ化物のこと。溶融点990℃、比重4～4.2。$2FeO+SiO_2 \rightarrow 2FeO \cdot SiO_2$ の反応による生成物。

鉱物特性

光学的性質； ファイヤライトは斜方晶系に属し、反射偏光を示す。屈折率（Ng＝1.886）は酸化鉄鉱物に比べれば低く、マトリックスのけい酸塩の中では比較的高い。ファイヤライトは焼結鉱中に現われる場合スラグ中に、よく木ずり状となって晶出するため、この場合その特徴ある組織から他鉱物との識別は容易である。透過光では、開ニコルで無色であり、交差ニコルで淡黄色、黄緑色、黄橙色などを呈する。

微小硬度； 微小硬度は600～700Hv 程度である。

④ 鍛錬鍛冶滓。まず鍛冶滓とは金属の純度を改善するために溶湯や還元鉄から酸化物、ガス、その他不純物を除去する操作を精錬といい、この時出来た滓を古代製鉄では大鍛冶滓（精錬鍛冶滓）といい、製品加工時の鍛打加熱時に生成した滓を鍛錬鍛冶滓と呼ぶ。

もう少し詳しく鍛錬鍛冶滓について述べれば、精錬鍛冶で出来た錬鉄（庖丁鉄）を加熱して鍛錬を繰返し行ない、工具、農具、各種の日常鉄器に加工成品化する工程を鍛錬鍛冶という。この加熱排出生成物の滓を鍛錬鍛冶滓という。

⑤ 製錬滓。鉱石や砂鉄その他の原料から含有金属を抽出し精製する冶金学的反応操作で排出された滓をさす。

⑥ マグネタイト（Magnetite；Fe_3O_4）。$FeO \cdot Fe_2O_3$でも表わされ、FeO の2価の Fe は、Mg または Ni で置換され、また別に TiO_2 を含むこともある。立方晶で普通正八面体。

鉱物特性

光学的性質； マグネタイトは等軸晶系に属し、屈折率はN＝2.42で、わずかに黄色を含む灰白色を呈し、反射光度は弱い。反射偏光を示さず、このことは屈折率の低いこととともにヘマタイトと明瞭に識別できる。マグネタイトは不規則塊状の大きい結晶を生成し、また往々にして樹枝状、四面体、八面体などで観察される晶癖の面からヘマタイトとは異なる。透過光では不透明である。

腐蝕性； マグネタイトは王水により黄変するが、ヘマタイトは変化せず、ヘマタイトと識別される。また $SnCl_2$ 飽和溶液※によって浸されず、ヴスタイトは1～2 min で暗灰色を呈するので、ヴスタイトと識別される。

微小硬度；500～600Hv でヘマタイトとは相当の差異を有する。

※腐蝕液の $SnCl_2$ 飽和アルコール溶液の代用として$SnCl_2$ 1％HCl 飽和溶液を代用してもよい。

⑦ 大澤正己「岡山県の古代製鉄研究―稼山古墳群出土鉱滓と中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査に関連出土した鉱滓・鍛冶滓の分析調査と考察―」『稼山遺跡群Ⅱ』（久米開発事業に伴う文化財調査委員会）1980

Ⅵ まとめ

1 古墳の立地と墳丘の構造

今回の調査は道路改良工事に伴い実施されたもので、いわば線の調査であった。したがって支群全体が明らかになったのは乙石C群であり、吉武E群では5基のうち一つのグループをなす3基の内容が知られたにすぎない。以下、節をおって調査内容を整理、検討していきたい。

1） 古墳の立地

吉武E、乙石C群は、金武古墳群のなかでも中央部よりやや南に下り、日向川に沿って分布する一群である。

吉武E群は、扇状地に面する山塊先端部の南側斜面に位置する。基盤が花崗岩風化土のマサであるため若干の流出があるとはいえ、直線に登ることが難しいほどの急斜面に築造されている。本支群は、1・2号墳と3・4・5号墳の二つのグループに分かれる。前者の石室は、斜面に平行して構築され西に開口する。後者のうち3・4号墳は斜面に直交して構築され南東に開口する。5号墳は斜面に斜交して構築され東に開口する。

乙石C群は、日向川をさらに遡ったところで、南東に延びるゆるい稜線上に位置する。1～3号墳は稜線上に間隔を置いて並んでおり、石室は稜線傾斜に直交するように構築され南～南東に開口している。

とくに吉武E群のように、急斜面に古墳を造営する例は、同じ山塊の南斜面に4支群ほどみ

Tab. 9 吉武E群・乙石C群各古墳規模一覧

		吉武E3号墳	吉武E4号墳	吉武E5号墳	乙石C1号墳	乙石C2号墳	乙石C3号墳
立地		丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵緩斜面	丘陵緩斜面	丘陵緩斜面
墳形		不整円形	不整円形	—	不整円形？	不整円形？	不整円形
墳丘規模	長径	8.0m	8.80m	—	(10)m	(9.0)m	6.7m
	短形	6.5m	8.50m	—	(10)m	(9.0)m	6.0m
石室掘方(上端)	方向	斜面直交	斜面直交	斜面斜交	斜面直交	斜面直交	斜面直交
	長	4.5m	3.1m	—	—	—	4.5m
	最大巾	4.9m	3.4m	—	—	—	3.5m
	最深長	1.26m	1.2m	1.05m	—	—	0.4m
石室	方位	S—36°—E	S—40°—E	N—82°—E	S—67°—E	S—85°—E	S—87°—E
	玄室面積	3.34m^2	3.81m^2	？	？	4.13m^2	3.05m^2
	床面高	100.85m	93.1m	90.65m	120.55m	？	？

（ ）内は推定

とめられ、その大半が小形石室墳で構成されている。

2）　墳丘の構造

墳丘　いずれも小形で残りもよくない。墳形は不整な円墳というべき形状である。墳丘外表の露出作業を行った4基は小形では、径6～7 m前後にすぎない。墳丘未調査の乙石C 1号墳は約10m前後と推定され、通有な規模といえよう。

地山整形　墳丘盛土、石室掘方掘削前に行なわれる地業である。傾斜のきつい吉武E群では斜面の高い側を半円形に削り取り、墳丘基底面を整えている。それでも平坦面の面積は少なくゆるく傾斜している。石室構築に併行して盛土を行い、最後に外表を整えるが、地山整形と墳丘の境が溝状になって高い側を半周する。その形態から馬蹄形溝と呼んでいる。

石室掘方　テラス状に整形された墳丘基底面の中央部に掘削される。形状は隅丸の長方形をなし、前端部は斜面に消える。その規模は、ほぼ石室が収まる程度である。壁面に掘削工具痕はみとめられなかった。

外護列石　吉武E 3・4号墳、乙石C 3号墳で墳丘の前面のみに外護列石がみとめられた。いずれも急斜面の下側にあたり、1～2段が残存する。それが墳丘盛土の流出を防止するために設けられたとするならば、残存状況からみてその効果は大であったといえる。

2　横穴式石室の平面図形について

1

調査した6基の古墳は、すべて単室の横穴式石室を埋葬施設としている。後期群集墳の横穴式石室としては通有な形態であるが、終末期段階の石室を含み貴重な資料である。

まず、6基の横穴式石室は大別して二つの形態に区別される。一つは乙石C 1・2号墳の2基、他の一つは乙石C 3号墳、吉武E 3・4・5号墳の4基の石室である。仮りに前者をⅠ類型、後者をⅡ類型と仮称しておく。

Ⅰ類型石室は、玄室の大半を失っているものの、乙石1号墳が一般的な形態である。玄室は方形もしくは矩形の平面形をなし、玄室長の略2倍ほどの狭長な羨道部を連接する。羨道床面には、二ケ所に梱石を配置し、前面（第1）梱石上に内面を整えて閉塞石を積み上げる。羨道部天井の先端は、ほぼ第1梱石にそろえている。乙石2号墳のばあい、玄室平面形は奥壁隅角を面取りしたような略円形の胴張りをなす。金武古墳群中でも他に例をみない異例といえる。

Ⅱ類型石室は、方形もしくは横に長い矩形の平面形玄室である。羨道の長さはⅠ類型に比較して短かく、玄室の長さに等しいかやや長い程度である。羨道部床面の梱石は、左右袖石のあいだに一列配されるのみである。閉塞石は、Ⅰ類型同様に梱石上に内面をそろえ積み上げている。調査した4基は、すべて天井部が欠失し、羨道部に天井石が架構されたか否か明らかでな

Tab. 10 各古墳石室計測表 (単位：m)

		E－3号墳	E－4号墳	E－5号墳	C－1号墳	C－2号墳	C－3号墳
石室長	右	4.45	4.70	4.01	(4.44)	5.37	3.30
	左	3.70	4.60	?	(4.45)	5,36	3.41
玄室長	右	2.00	1.74	1.70	(0.67)	1.87	1.64
	左	1.75	1.88	?	(0.67)	2.02	1.50
羨道長	右	2.40	2.85	2.30	3.83	3.21	1.81
	左	2.30	2.75	?	3.72	3.17	1.85
玄室幅	奥	1.93	1.95	?	?	1.48	1.84
	中央	1.91	2.15	?	?	2.22	1.87
	前	1.70	2.24	?	1.77	2.13	1.84
羨道幅	奥	0.70	1.05	?	0.87	1.05	1.18
	前	1.25	1.40	?	1.52	1.08	1.13
袖幅	右	0.55	0.42	0.3	0.61	0.55	0.40
	左	0.45	0.07	—	0.62	0.7	0.30
奥壁～第1梱石		—	—	—	?	4.00	—
奥壁～第2梱石		2.33	2.22	2.23	?	2.57	2.05

( ) 内は推定

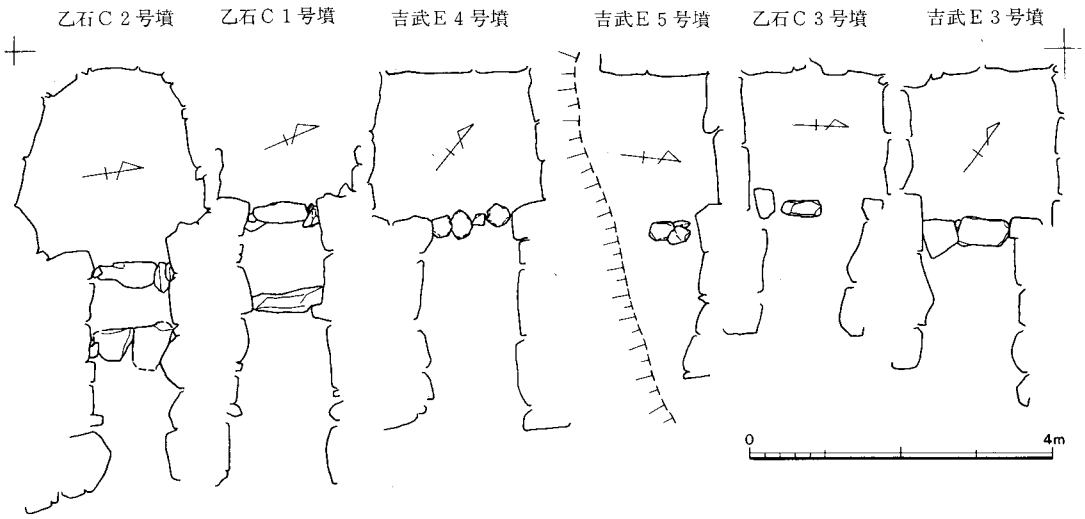


Fig. 42各古墳石室平面図 (1:100)

い。他の事例でみる限り、この形態の石室では、玄室天井部と袖石上には天井石を横架するが、羨道部には行なわないようである。Ⅰ類型と同様に、閉塞石の位置と天井部先端の位置は適合関係にあると思われる。

以上のように、Ⅰ・Ⅱ類型の石室は、平面図形の構成とりわけ羨道部での変化が著しい。次節の壁体構成法とも重複することだが、Ⅱ類型における羨道部壁石の粗雑化は、天井石構架を省略したことと無関係ではない。その点でⅠ、Ⅱ類型のあいだには、形式的に連続しえないヒアタスがみとめられる。いわばⅡ類石室は、新たな形式の平面図形として採用されたと考えるが、その出自・年代については今後の課題である。

2

ではつぎに、Ⅰ・Ⅱ類型石室の平面図形がどのような構成法によって企画されたかを検討してゆきたい。その方法は、まず石室各部の計測値から、大概の石室企画尺度を推定する。そしてその推定された尺度実長で石室実測図と同一縮尺の方眼と組み、トレースした実測図を重ね合わせて石室各部と方眼目との適合関係を照合する。その際企画線の設定、歪みの検討等を行い、平面構成の原企画を復原[①]し、再度復原された平面構成から企画にあたっての使用尺度＝基準尺を検討することになる。

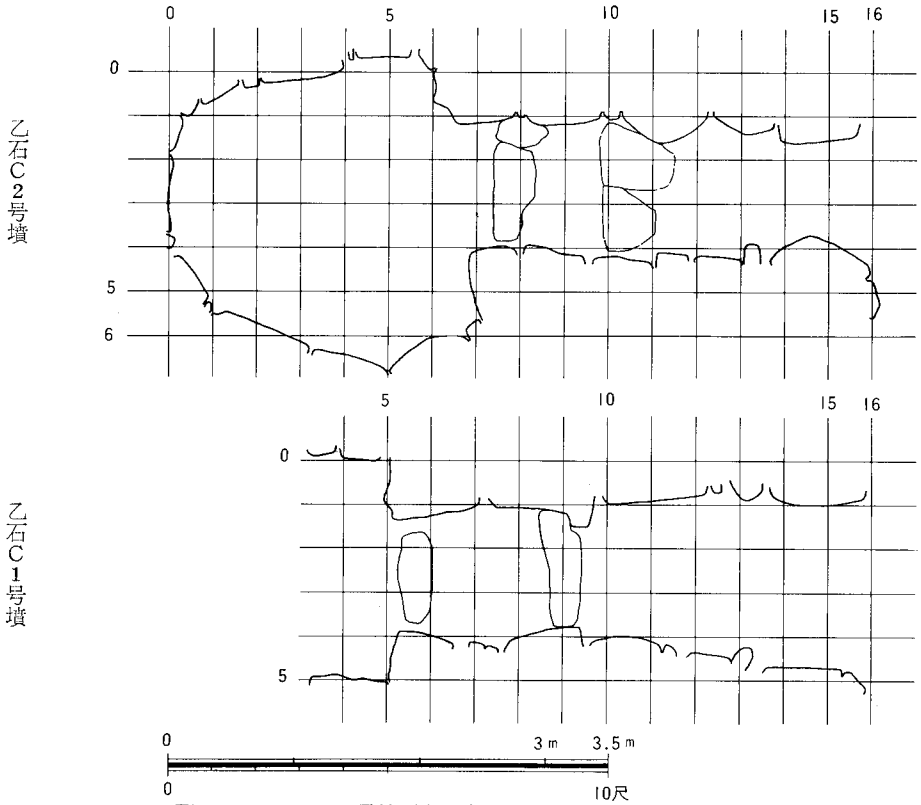


Fig. 43　C1、2号墳石室の方眼による操作結果（1:60）

まずⅠ類型石室からみておこう。検討結果を述べる。

a　**乙石C２号墳**（Fig.43）

石室企画の基準尺は、一尺約35cmの高麗尺である。奥壁中央部の凹部に縦線０を合わせると玄室前壁の左右隅角は縦線６および７に、横線の０と６に略一致する。玄室奥半部の円形部はどのように設定したか不明だが、玄室平面形は、基本的には長・幅とも６尺の方形であろう。羨道は、左壁線が横線４に概ね一致するが、右壁線は凹凸があって横線１からやや内側へ突出する。奥幅は３尺、入口幅も３尺としてよいであろう。羨道入口部先端は縦線16に略合致し、石室全長16尺が推測される。羨道部には２ケ所に梱石があり、第２梱石は中央が縦線８にあたり、石室全長を２分する位置にあり、第１梱石の内側は縦線10に略一致する。羨道右壁線の凹凸が構築時の誤差と考えれば本石室の原企画は次のように復原される。

石室全長	16尺	玄室幅		６尺
玄室長	６尺	羨道幅	（奥）	３尺
羨道長	10尺		（入口）	３尺

b　**乙石C１号墳**（Fig.43）

石室企画の基準尺は、一尺約35cmの高麗尺である。本石室は、玄室の大半が破壊され、玄室の長さは不明である。しかし残っていた石室掘方の調査から、さほど長く延びないと予想された。Fig.43では、仮りに正方形の玄室を想定し、玄室幅が５尺であることから、想定玄室奥壁線を０とし、前壁隅角を縦線の５に合わせた。もし、この想定に誤まりなければ羨道入口部端が縦線16に一致することから、石室全長16尺となり、Ｃ２号墳と同一の長さを採用したといえる。羨道後半部は、袖石と第１梱石に接する部分が若干内側に突出して、前室的な小空間を形づくっている。とくに第１梱石に接する左右側壁は、その前方に延びる壁線よりも明らかに内方に突きでており、複室構造にみる構成法と類似している。方眼との適合関係では、その屈曲する部位が概ね縦線の10にあたり、想定玄室長を２倍する位置に相当する。羨道幅は、後半部の中央で３尺、後半・前半部の境が３尺、入口部で４尺をとる。玄室左右袖石は、先述した事情で横線２・４よりやや内側に入っている。羨道床面の梱石は、後半部を複室構造に近づけたためか方眼との適合関係は説明されない。以上を整理して、本石室の原企画を復原するとつぎのとおりである。

石室全長	16尺	玄室幅	（前）	５尺
玄室長	（５）尺	羨道幅	（奥）	３尺
羨道長	後半５尺		（入口）	４尺
	前半６尺			

つぎに、Ⅱ類型石室の検討結果を述べる。Ⅱ類型の石室は構成が類似するので、原企画復原値は後に一括する。

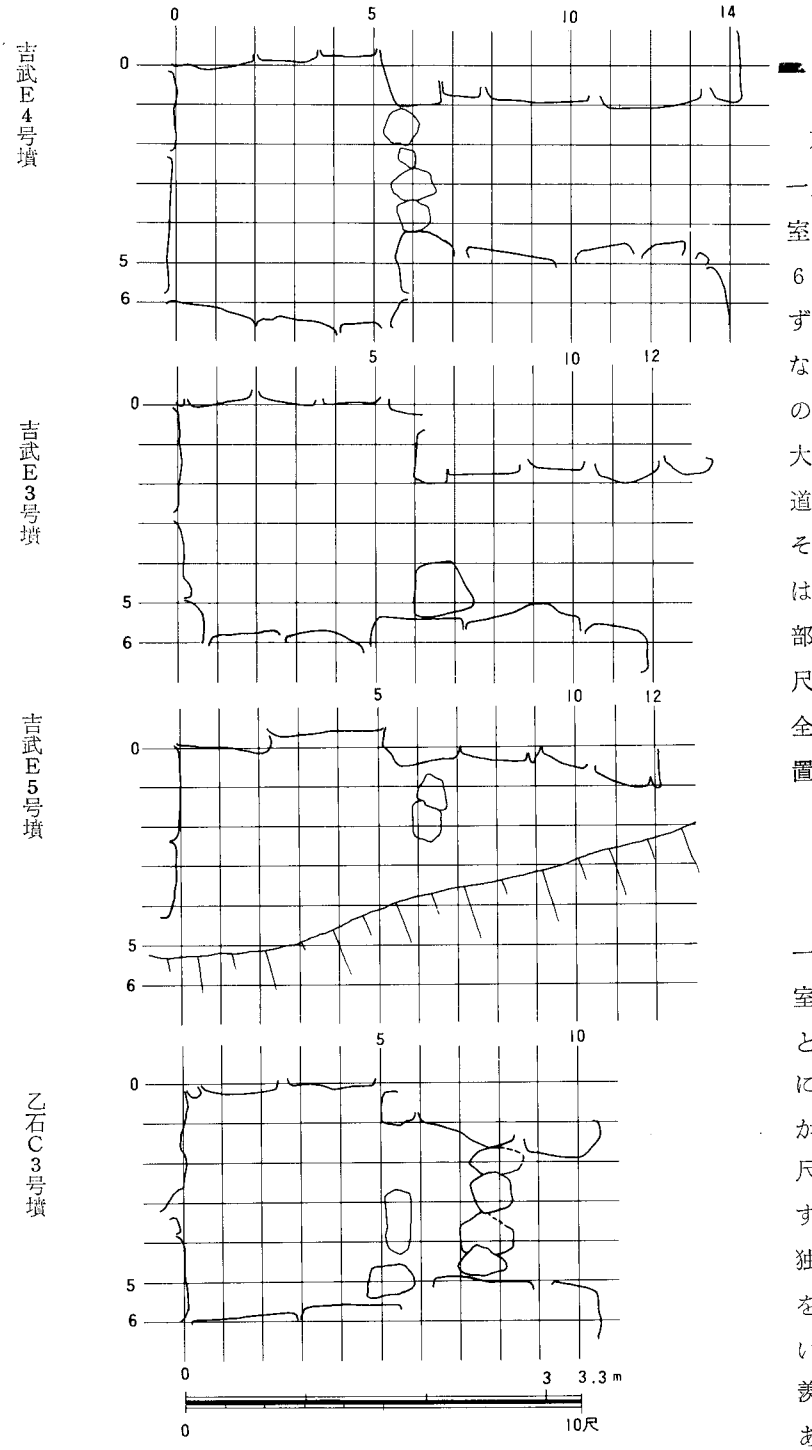


Fig. 44　C3、E3、4、5号墳石室の方眼による操作結果（1:60）

c　**吉武E4号墳**

(Fig. 44)

石室企画基準尺は、一尺約33cmである。玄室は、長さ5尺、奥幅6尺、前幅は左右にわずかづつ拡がり7尺となるが、設計によるものか施工時の任意の拡大か明らかでない。羨道は右壁線が横線1にそろっているが、左壁は乱れており、幅は奥部で3尺、入口部で4尺といえようか。石室全長は14尺、梱石の配置は雑になっている。

d　**吉武E3号墳**

(Fig. 44)

石室企画基準尺は、一尺約33cmである。玄室・羨道壁線をみると、右壁はよく方眼線に一致し、左壁に乱れがある。玄室は長さ6尺、幅6尺の方形をなす。左袖石は壁体から独立しており本来片袖を企画したかもしれない。袖石間の幅2尺、羨道幅は3尺～4尺であろう。羨道入口部先端は右壁が前面に突出

するが、これは外護列石に接続し、本来は縦線12すなわち12尺が企画段階の石室と考えられる。石室長は、玄室長のちょうど2倍の長さである。

e　**吉武E5号墳**（Fig. 44）

石室企画基準尺は、約33cmを一尺とする。石室左側壁は失なわれており石室幅は不明だが、玄室奥壁の腰石が三石と予想され、玄室幅は6尺の可能性が強い。玄室長は5尺、石室長は12尺である。梱石の内面は縦線6に一致し、石室長を2分する位置にあたる。

f　**乙石C3号墳**（Fig. 44）

石室企画基準尺は、約33cmを一尺とする。玄室はやや歪みがあるが、長さ5尺、幅6尺であろう。羨道部は、奥幅4尺、入口幅は1尺減じて3尺となる。羨道入口部端は縦線10より前方に若干突出するが、外護列石を接続するために生じた誤差であろうか。石室長は玄室長の倍の10尺が企画されたと思われる。第2梱石は、内面を玄室前壁線に合わせ、第1梱石の内面は縦線7に一致し、玄室長の$\sqrt{2}$倍の位置に設定されている。

以上、述べきたったII類型石室について、原企画を復原するとつぎのようになる。

	石室全長	玄室長	羨道長	玄室幅	羨道幅 (奥)	羨道幅 (入口)
吉武E4号墳	14尺	5尺	9尺	6尺	3尺	4尺
〃　E3号墳	12尺	6尺	6尺	6尺	2尺	4尺
〃　E5号墳	12尺	5尺	7尺	(6)尺	?	?
乙石C3号墳	10尺	5尺	5尺	6尺	4尺	3尺

以上のように、I・II類型石室の原企画が復原された。I類型石室の2基は、高麗尺を使用した構成であり、石室長は同数値を採用している。II類型石室では共通性が多々みとめられる。玄室のばあい、長さは吉武E3号墳を除いて5尺に、幅はすべて6尺に統一されている。石室長は吉武E3・5号墳が12尺で一致し、その増減は2尺を単位としている。他例でも、石室長は15・25尺を除いては基本的に偶数値に限られている。また構成法では、石室全長を2分して、玄室・羨道に折半する方法も行なわれている。

最後に、II類型石室の原企画復原によって検出された基準尺に触れておく必要がある。一尺を33cmとしたばあい、唐（大）尺か高麗尺いずれかの偽長数値とみなければならない。唐尺の使用始期の問題にも関わってくるが、乙石C3号墳が7世紀第1四半期を下らないことを考えると唐尺使用の可能性は少なく、数値的に近い高麗尺の偽長とみることが妥当であろう。[2] 今回は他例を検討する余裕がなかったため明確にしえないが、他古墳群の例でも、II類型に類する石室形態のなかには高麗尺偽長の使用例もいくつかみとめられる。この点については後考に俟ちたい。

3　石室石積み技法について (Fig. 45)

横穴式石室の周壁石積み技法と構成法は、平面図形の構成と密接に結びついており、年代の推移にしたがって徐々に変化している。今回の調査石室例は完存するものがなく充分とはいえないが、技法・構成法について観察しておきたい。Ⅰ・Ⅱ類形石室の順に述べる。

乙石C 2 号墳　玄室は上半部を欠き、羨道部では上部一段ほどの欠であろう。使用石材の割石の占める割合いはきわめて少ない。玄室の腰石は石材を縦位に裾える。羨道部では袖石より前面二石は大形石材を腰石に配置するが、その前方では小形の石材を粗雑に並べる。こうした差異は、羨道部における天井石構架の有無から生じた簡略化の現象である。

乙石C 1 号墳　玄室の大半を失う。羨道部は上部一段を欠くのみで他は完存に近い。玄室の残存部分をみると、腰石は縦位に配置する。羨道部は第1梱石を境にして前半部基底面が下降し、側壁もその傾斜に沿って配置される。羨道部の腰石はC 2 号墳と等しく、袖石側二石までに大形石材を配置し、その前面はやや小形となって構成も雑である。

吉武E 4 号墳　玄室では右壁がよく残るが他は上半を欠き、羨道部は大半が遺存していると思われる。玄室腰は奥壁二石、左右側壁は各三石を配し、石側壁の上部積石には重箱積み技法が顕著にみとめられる。羨道部基底面は梱石を境にしてゆるく下降し、壁石も傾斜に沿っている。側壁は袖石よりに大形石材を使用するが、入口部は粗雑な構成である。

吉武E 3 号墳　天井石を欠くものの、玄室～羨道部の遺存は比較的よい。玄室周壁は石材を立てて腰石とし、その上部壁石は小形の石材を使用する。奥壁の上部はきわめて粗雑で乱積みとでもいうべき構成である。右側壁には典型的な重箱積みがみとめられる。羨道部の側壁は、大きめの石材を用いているが構成は粗雑である。

吉武E 5 号墳　左側壁を欠く。右側壁も羨道部を除いて遺存はよくない。玄室奥壁の腰石は縦位に、右壁は横位に配置する。羨道部基底面は中央付近から前方に下降するが壁石の基底は水平である。壁石は大小の転石を用いているが一定性がなく粗雑である。

乙石C 3 号墳　玄室周壁の上半を欠く。腰石は各面二石づつ横位に裾え、上部壁石は重箱積み技法による。羨道部腰石は左右とも二石で構成されるが、接合しない部分もあり簡略化されている。

以上の観察では、Ⅰ・Ⅱ類型石室間の類似は指摘しえても、基本的な相異点は羨道部にみとめられる程度である。玄室周壁での腰石の配置法は縦位を主体とすること、各面2～3石で構成する点、腰石上は小形の石材を重箱積みと乱積みで構成する手法はほとんど変化していない。Ⅱ類型石室における羨道部壁石構成の粗雑化は、前節で述べたように天井石を構架しない新たな石室形式の出現に起因していると解されるのである。

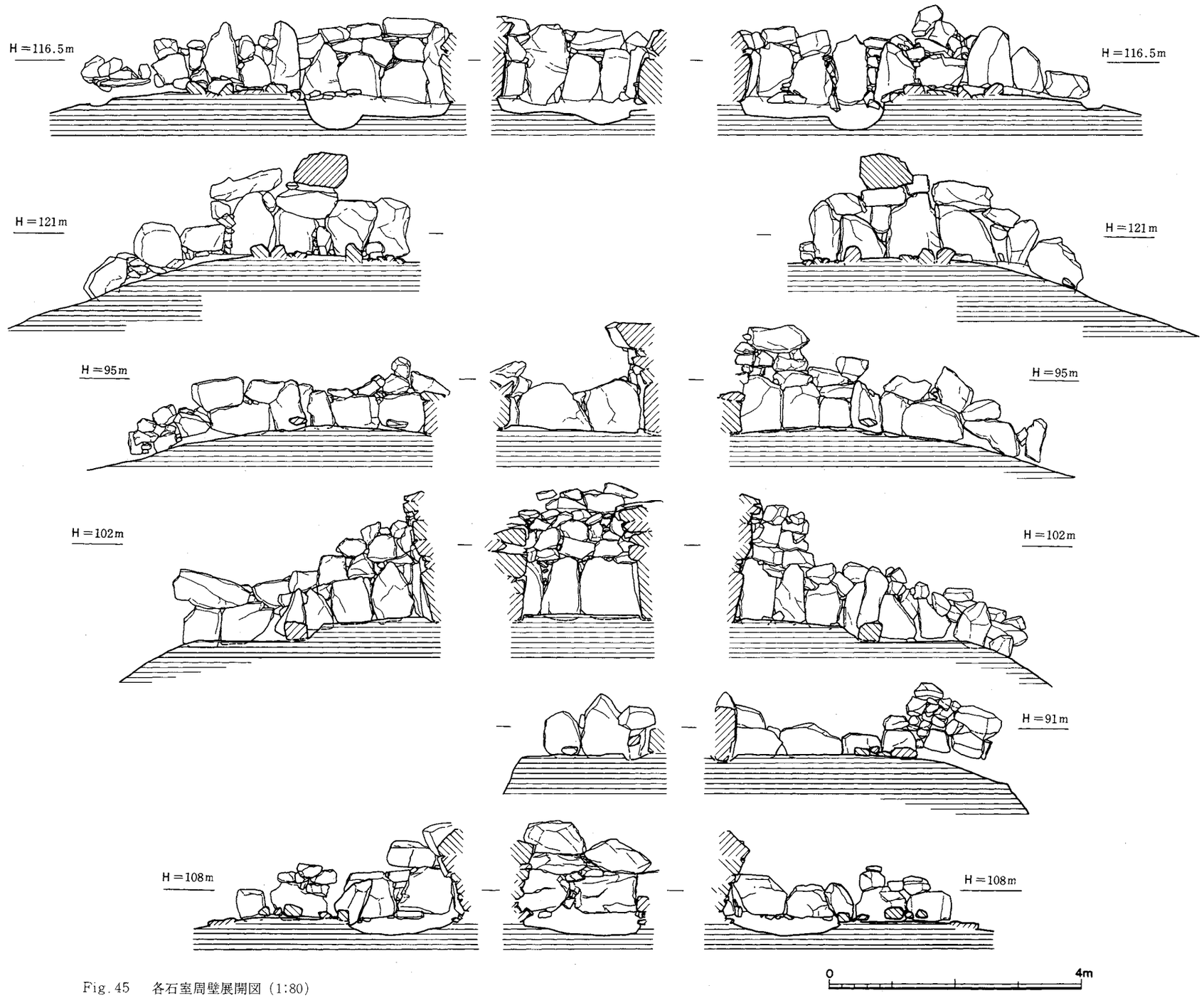


Fig. 45　各石室周壁展開図（1:80）

Tab. 11 吉武E群・乙石C群出土遺物一覧

		吉武 E3号墳	吉武 E4号墳	吉武 E5号墳	乙石 C1号墳	乙石 C2号墳	乙石 C3号墳
農工具	刀子				3		
	鋤先	1					
	鉄斧						1
馬具	轡				1		
装身具	耳環			1	1	1	
須恵器	杯蓋		1	6	8	4	8+α
	杯身		3	6	6	4	6+α
	椀		1				
	壺				2		2
	平瓶				1		2
	甕						1+α
	坩				1		
土師器	杯蓋	2			1		
	杯身	1					1
	椀						1
	高杯	1					
	甕					1	
	盤	3		1	1		
	皿			1	1		
その他	鉄滓	7	24	12	1		
	不明鉄製品				1+α		

4　出土遺物について

1）出土状況

調査した6基の古墳は、すべて石室上半部を欠き、玄室内は著しく荒れていた。玄室床面の敷石残存状況もよくなく、原位置をとどめていたとしても小面積に限られた。したがって、葬法・追葬状況・副葬文物の配置などを知ることはできなかった。

わずかに副葬文物の一部が原位置をとどめていた例としては、吉武Ｅ４号墳の羨道部、乙石Ｃ１号墳の玄室前壁右隅角、同Ｃ２号墳玄室前壁左隅角、同３号墳の羨道後半部の一部と玄室前壁右隅角であり、須恵器・土師器・鉄滓などが出土している。なかでも、乙石Ｃ３号墳における土器の出土状況は、年代的に異なる須恵器の蓋杯を５個重ね合わせており、最終追葬時でのとりまとめとして注意される。総じて出土遺物は少なく、とくに装身具関係の遺物は３基の古墳から出土した耳環があるにすぎない。なお出土遺物の総量・内訳は Tab. 11 にしめすとおりである。

2）供献鉄滓

今回調査した６基のうち、４基の古墳から鉄滓が出土している。顕微鏡観察による所見は、前章に述べられているように、乙石Ｃ１号墳出土鉄滓が鍛冶滓のほか、他の３基から出土したものはすべて製錬滓である。

鉄滓を出土した後期古墳例に関して、かつて筆者は環博多湾古代製鉄遺跡群を検討するなかで集成を行い、それが偶然の混入ではなく、古墳への供献としてその意味を述べたことがある。その段階では、13の古墳群で32基の例が知られたが以後の調査によって、５古墳群16基の古墳で供献鉄滓とみられる事例が明らかとなったので、『広石古墳群』に収めた地名表に追加する[9]（Tab. 12）。

調査進行状況の地域的な跛行性はあるかもしれないが、鉄滓供献例は早良平野が群を抜いている。追加分を含めて48基のうち32基の例が早良平野に集中している。なかでも、金武古墳群のばあい、調査された３支群16基のうち14基から出土している。そのなかには６世紀前代半まで遡る例もみとめられており、注目すべき古墳群と考えられる。

3）　出土須恵器の分類と古墳の造営年代

６基の古墳から出土した須恵器は、観察・実測可能な62点のうち、52点を蓋杯が占める。したがって、最も多く出土し、かつ年代推移によって形態変化の大きい蓋杯をとりあげ古墳の造営年代と追葬について検討しておこう。

蓋

Ａａ　口縁部と天井部の境は不明瞭。口縁部はやや外方に下降して端部は丸くおわる。天井頂部は狭い平坦面をなし、ヘラ削り、ナデ調整を施すものと、不調整のものがある。

Tab. 12 鉄滓供献古墳一覧（『広石古墳群』表に追加）

No.	古墳名	所在地	出土地点	個数	推定時期	備考
33	古野14号墳	粕屋郡古賀町薦野・古野	周溝	2	7C中～	註④
34	金武・吉武E 3号墳	福岡市西区吉武・長石	玄室・羨道・周溝	7	7C後～	本書収録
35	〃・〃 4号墳	〃 〃・〃	玄室・羨道	24	7C後～	本書収録
36	〃・〃 5号墳	〃 〃・〃	玄室・羨道	12	7C中～	本書収録
37	〃・乙石C 3号墳	〃 金武・乙石	羨道前面	1	7C前～	本書収録
38	〃・吉武L 1号墳	〃 吉武・塚原	周溝	1	6C未～	註⑤
39	〃・〃 2号墳	〃 〃・〃	羨道・墓道	10	6C後半～	註⑤
40	〃・〃 3号墳	〃 〃・〃	玄室	3	6C後半～	註⑤
41	〃・〃 4号墳	〃 〃・〃	周溝・墳丘盛土	32	6C前～	註⑤
42	〃・〃 5号墳	〃 〃・〃	玄室・周溝・他	159	6C中～	註⑤
43	〃・〃 6号墳	〃 〃・〃	周溝・墳丘盛土	7	6C～	註⑤
44	〃・〃 7号墳	〃 〃・〃	周溝・墳丘盛土	13	6C前～	註⑤
45	〃・〃 8号墳	〃 〃・〃	玄室・周溝	12	6C中～	註⑤
46	〃・乙石H 1号墳	〃 金武・頭ノ尾	羨道・墓道	25	6C未～	註⑥
47	〃・〃 2号墳	〃 〃・〃	前室・羨道・墓道	2	6C未～	註⑥
48	徳永・アラタ 5号墳	〃 今宿・徳永	玄室	1	6C後～	註⑦

Ab　Aaよりも器高はやや高い。口縁部は短かく、端部は尖りぎみにおわる。天井部中央に扁平なつまみがつく。

BIa　口縁部内面のかえりは、基部が太く、先端は口端部下方に突出する。天井部はナデ調整。

BIb　口縁部内面のかえりは、細身ですると い。先端は口端部の下方に突出する。天井部はヘラ削り。中央に宝珠形のつまみがつく。

BII　口径に大小の二種がある。口縁部内面のかえりは小さく、口端部に接近する。天井部はヘラ削りを施し、中央に扁平な宝珠形つまみがつく。

Ca　口径に大小の二種がある。扁平な器形で、天井部はヘラ削りを施す。口縁部は小さく下方に屈曲し、端部は鋭い稜をなす。

Cb　口径に大小の二種がある。天井部はヘラ削りを施し、中央部に扁平なつまみがつく。口縁部は下方に屈曲し、端部は丸くおわる。

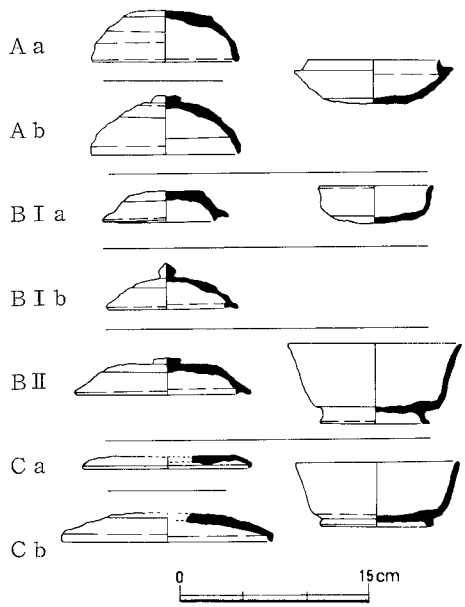


Fig. 46　須恵器杯蓋の分類

杯

A　たちあがりは短く内傾する。受部は外上方、

または水平に短くのびる。底部は狭い平坦面をなし、ヘラ削りかナデ調整を施すものと不調整のものがある。

ＢＩａ　体部は内弯ぎみに外上方へ短くのび、端部は丸くおわる。底部は粗いナデ調整と不調整のものがある。

ＢⅡ　口径に大小の二種がある。底・体部の境は丸みをもつ。深い体部は内弯ぎみに外上方へわずかに開き、口縁部は外反する。高台は垂直にのび、端部はするどく外方に屈曲する。

Ｃ　口径に大小の二種がある。体部は内弯ぎみに外上方にゆるくのび、端部は丸くおわる。高台はやや低くなり、外方にふんばる。

蓋ＢＩｂに対応する杯は明確でない。蓋Ｃａは天井部につまみがつくか明らかでないが、広石古墳群Ⅲ－１号墳、小郡市種畜場Ｓ－３号墳では、蓋Ｃｂ、杯Ｃとの共伴がみとめられている。以上の分類をもとに、各古墳出土蓋杯を対応すると次表のようになる。筑前・筑後の小田富士雄氏による編年[8]、ならびに陶邑編年[9]との対照を付した。

Tab. 13　蓋杯の分類と各古墳出土蓋杯との対照

	乙石Ｃ１号墳	乙石Ｃ２号墳	乙石Ｃ３号墳		吉武Ｅ４号墳	吉武Ｅ５号墳		小田氏編年	陶邑編年
Ａａ 類		Ⅰ類	Ⅰ類	Ⅰ類		(蓋)	(杯)		Ⅱ・6
Ａｂ 類		Ⅱ類	Ⅱ類				Ⅰ類	ⅣＢ	
ＢＩａ類	Ⅳ類		(蓋)	(杯)		Ⅰ類		Ⅴ	Ⅲ・1
ＢＩｂ類	Ⅲ類								Ⅲ・2
ＢⅡ 類	Ⅱ類		Ⅲ・Ⅳ類	Ⅱａ類		Ⅱ類		Ⅵ	Ⅲ・3
Ｃａ 類			Ⅴ類			Ⅲａ類		ⅦＡ	Ⅳ・1
Ｃｂ 類				Ⅱｂ類	○	Ⅲｂ類	Ⅱ類		

陶邑編年のローマ数字は型式、アラビア数字は段階をしめす。

各古墳に実年代を与えるならば、ＢＩ類段階、ならびにＢⅡ段階での高台付杯の出現期をめぐって必ずしも一致をみないが、おおむねＡ類は７世紀の第１四半期、ＢＩａ類は７世紀の第２四半期に、ＢＩｂ・ＢⅡ類は第３の四半期から末に、Ｃ類は７世紀末から８世紀初頭に想定されよう。石室平面図形の検討結果を含めて各古墳の造営年代を推測すると、乙石Ｃ１・２・３号墳は７世紀の前半代に、吉武Ｅ群では５号墳が７世紀中葉に近い前半代、４号墳は７世紀後半から末の段階と考えられる。３号墳からは須恵器が検出されていないが、須恵器と同形態の土師器から、ほぼ４号墳と相前後する造営と考えられる。

5　おわりに

以上述べきたったところを整理しまとめとしたい。

金武古墳群乙石Ｃ群は、一つの尾根線に間隔をおいて３基並列する支群である。各古墳石室

は、尼根線下の小さな谷地形に向って同一方向に開口し、一条の墓道に沿って形成されたといえる。出土遺物が少ないため造営時期の確定は難かしい。石室平面図形からすれば、1・2号墳にみるⅠ類型の横穴式石室は、高麗尺伝来後に成立した形式であり、正方形プラン玄室の定型化は6世紀末頃にあって各地の群集墳の石室に採用されている。Ⅰ類型石室が行なわれた期間は20年をこえなかったと思われる。3号墳石室はⅡ類型に属し、いわば7世紀代の前半代にⅠ類型石室を祖型として成立した形態であるが、充分に定型化されない段階である。すなわち、羨道部は簡略化されているものの、梱石を二ケ所に配して狭い羨道後半部を設けⅠ類型の遺制を保つ。Ⅱ類型石室は、7世紀の第1四半期に成立すると思われるが、3号墳はその初期段階にあたると推測される。出土遺物のうえではさほどの差異がないとはいえ、3基の古墳は石室形態のこうした推移を勘案配して、1・2号墳の造営は3号墳に先行することは認められるであろう。かように考えるならば、乙石C群は、当初2家族の墓域として設定され、まず1・2号墳が造営された。そしてやや遅れて、いずれかの家族の世代墓として3号墳が造営されたと考えたい。

吉武E群は、扇状地のつけねにあたる山麓突出部の南斜面に形成された支群であり、立地から1・2号墳と、3～5号墳の二つのグループに分れる。調査した3～5号墳は、急斜面の中位から下位に位置し、造墓条件は必ずしもよくない。未調査の1・2号墳は天井部を欠失し内部は土砂が堆積しているが、上部壁石から3～5号墳と同形式の石室と思われる。3～5号墳の石室はいずれもⅡ類型に属する。羨道後半部は設定されておらず、定型化した段階である。最下位に位置する5号墳は、7世紀の第2四半期に遡る可能性もあるが、3・4号墳は7世紀後半から末の造営で終末期にあたる古墳といえる。これまで知られてきた終末段階の石室と比較して、整然とした石室構造を有す点、ならびに単次葬か複次葬かの問題を含めて今後の課題である。いずれにせよ、吉武E群は終末段階に新たに設定された墓域（南面する急斜面）に相前後して小形の古墳が造営されたものといえる。金武古墳群のばあい、同様な斜面に終末段階の小形墳のみ集中する傾向が数支群にみとめられる。これは、7世紀後半～8世紀にかけての単次葬を主体とした新たな造墓があったことを意味する。

註①この分析法は次の文献による。石川正之助「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」『考古学雑誌』54巻4号　1968

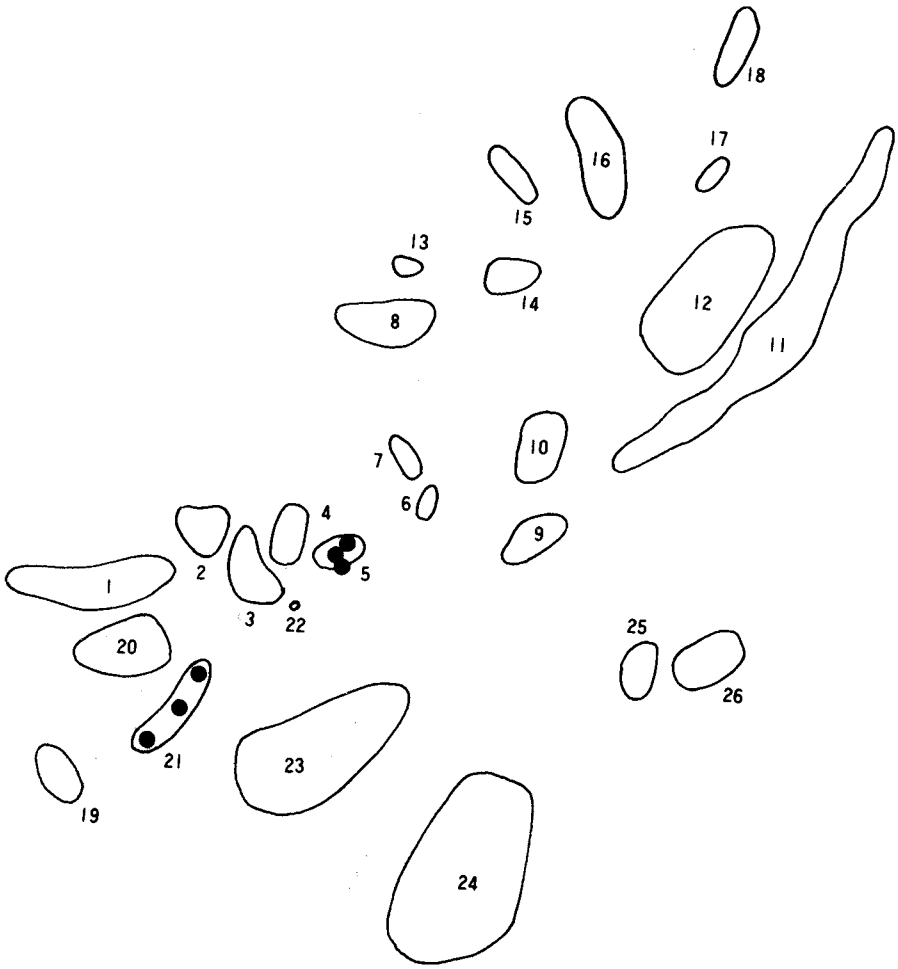
②高麗尺の偽長数値としては、約33cmを1尺とする例として奈良県岩屋山古墳石室が指摘されている。白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」『ヒストリア』49号1967、後に補筆・訂正され『論集終末期古墳』に収録（1973）。しかし白石氏の基準尺度算出については、つぎの批判がある。林紀昭「7世紀中葉使用の尺度について―高松塚古墳研究の参考として―」『日本史研究』126　1972

③柳沢一男「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について」『広石古墳群』所収（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）1977

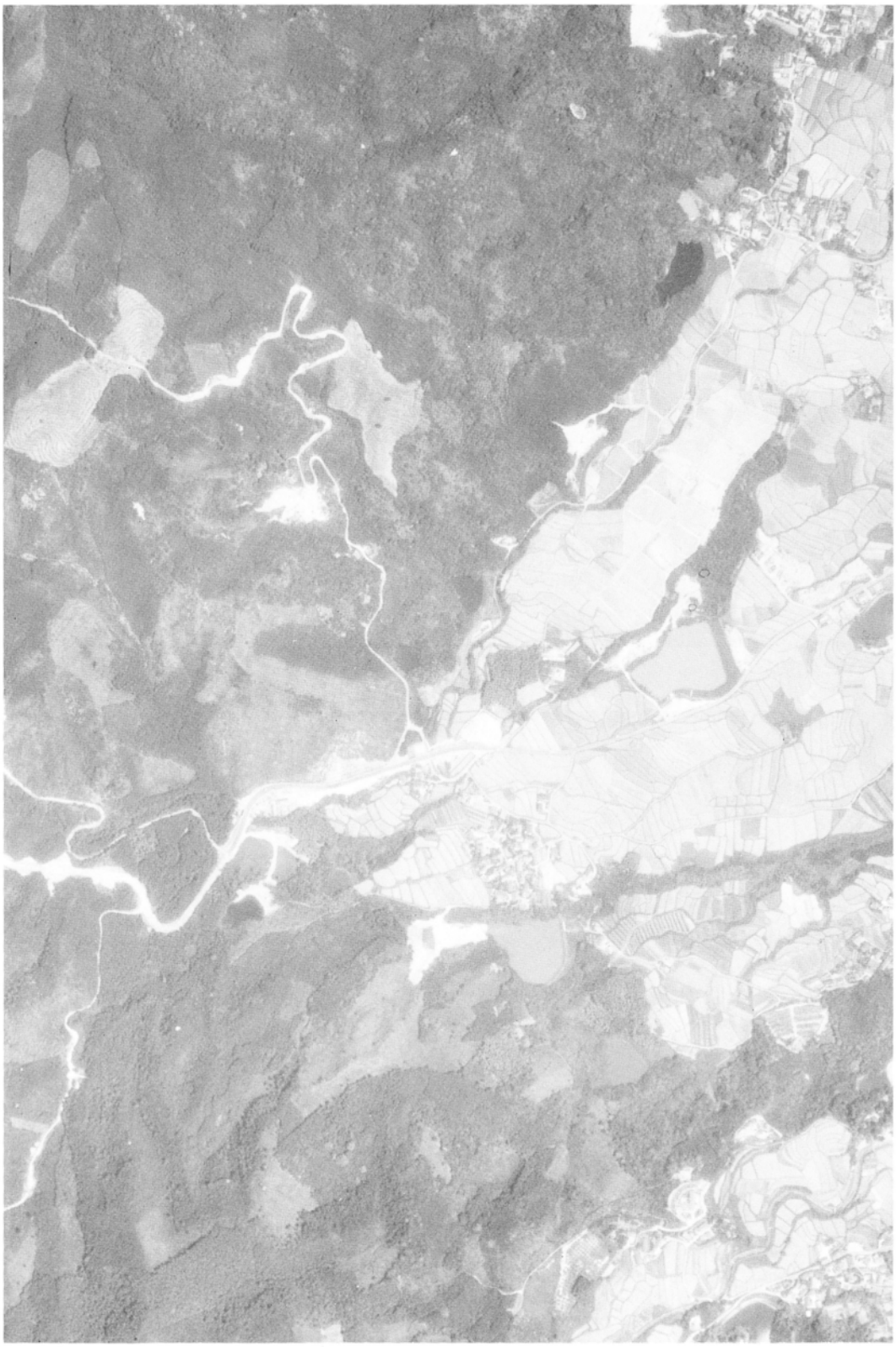
④『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』XXI　1978
⑤二宮忠司編『吉武塚原古墳群』（福岡市埋蔵文化財査報告書第54集）1980
⑥塩屋勝利編『四箇周辺遺跡調査報告書（3）』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集）1980
⑦塩屋勝利・田中寿夫『徳永アラタ古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集）1980
⑧以下の文献による。小田富士雄編『八女古窯址群調査報告』Ⅰ～Ⅳ　1968～72、小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財調査報告第43集）1970
⑨中村浩編『陶邑』Ⅰ～Ⅲ　1977～79

図　版

PLATES


18
17
16
15
13
14
12
8
11
10
7
6
4
9
2
5
1
3
22
20
25
26
21
23
19
24

金武古墳群空中写真



金武古墳群

1.吉武A群 2.吉武B群 3.吉武C群 4.吉武D群 5.吉武E群 6.吉武F群 7.吉武G群 8.吉武H群
9.吉武I群 10.吉武J群 11.吉武K群 12.吉武L群 13.吉武M群 14.吉武N群 15.吉武O群 16.吉武P群
17.吉武Q群 18.吉武R群 19.乙石A群 20.乙石B群 21.乙石C群 22.乙石D群 23.乙石E群 24.乙石F群
25.乙石G群 26.乙石H群

吉武E群遠景

(1)　北東から

(2)　近景（北東から）

(1)　調査前（南から）

(2)　調査終了後（南から）

吉武E３号墳

(1) 調査前景（南から）

(2) 表土除去後

(1)　墳丘除去後全景（南から）

(2)　玄室奥壁

吉武E3号墳

(1) 石室掘方（北から）

(2) 石室掘方（西から）

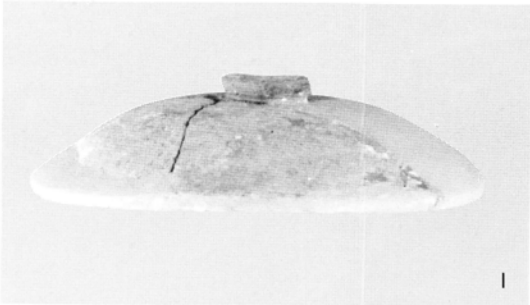
(1)　閉塞状況（玄室から）

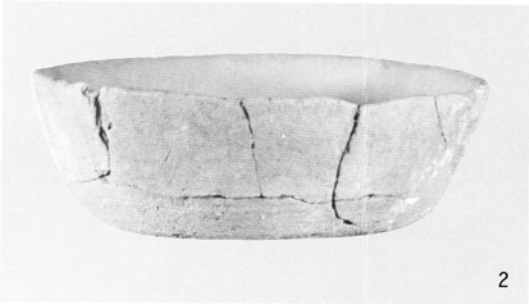
(2)　閉塞石除去後（玄室から）

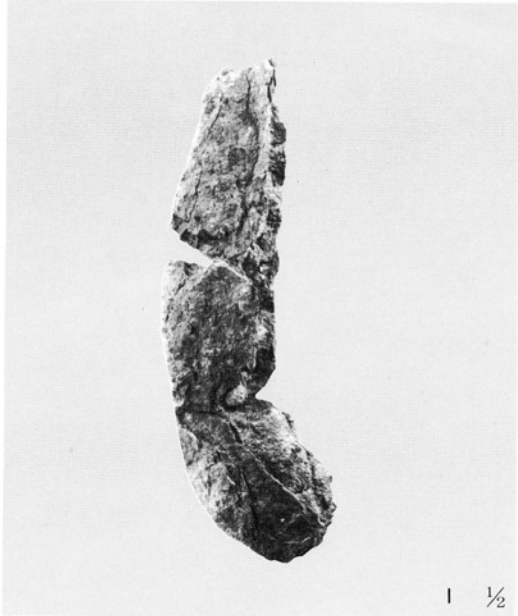
吉武E３号墳石室各部

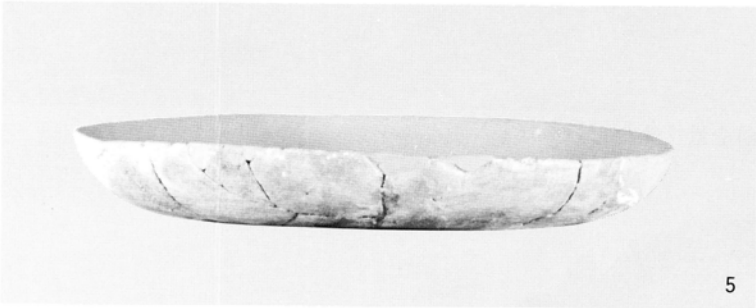
(1)　袖石（羨道から）

(2)　羨道右壁前面列石


1


2

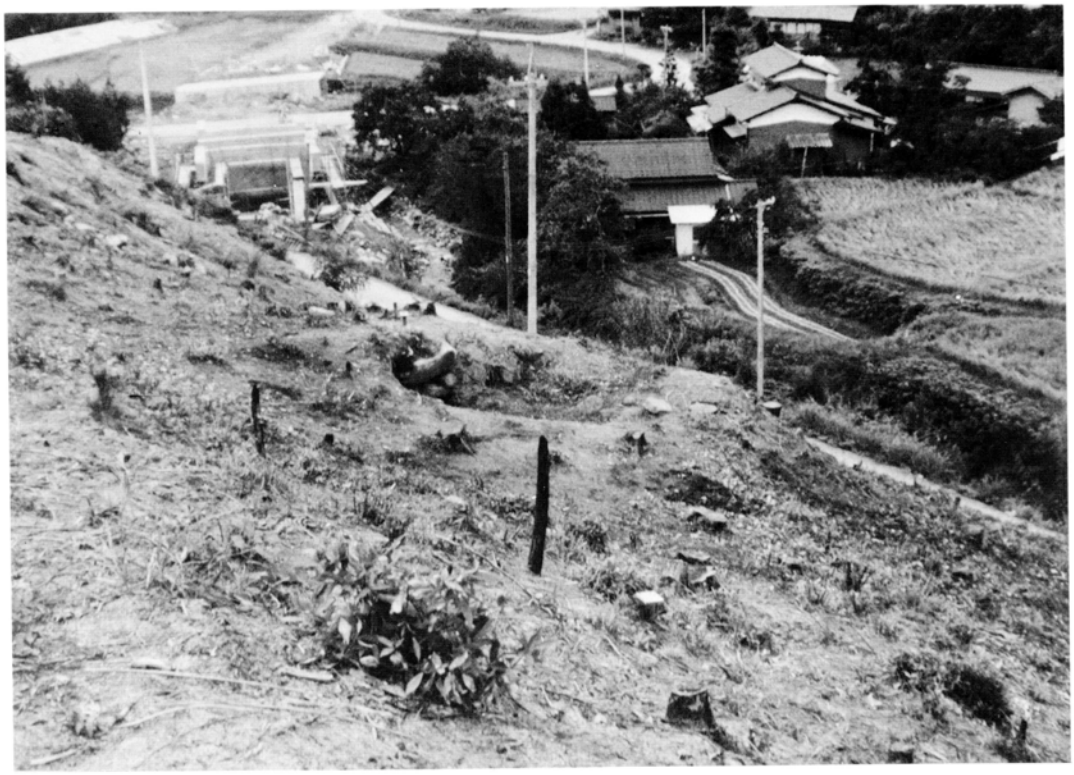

1 ½


5

6

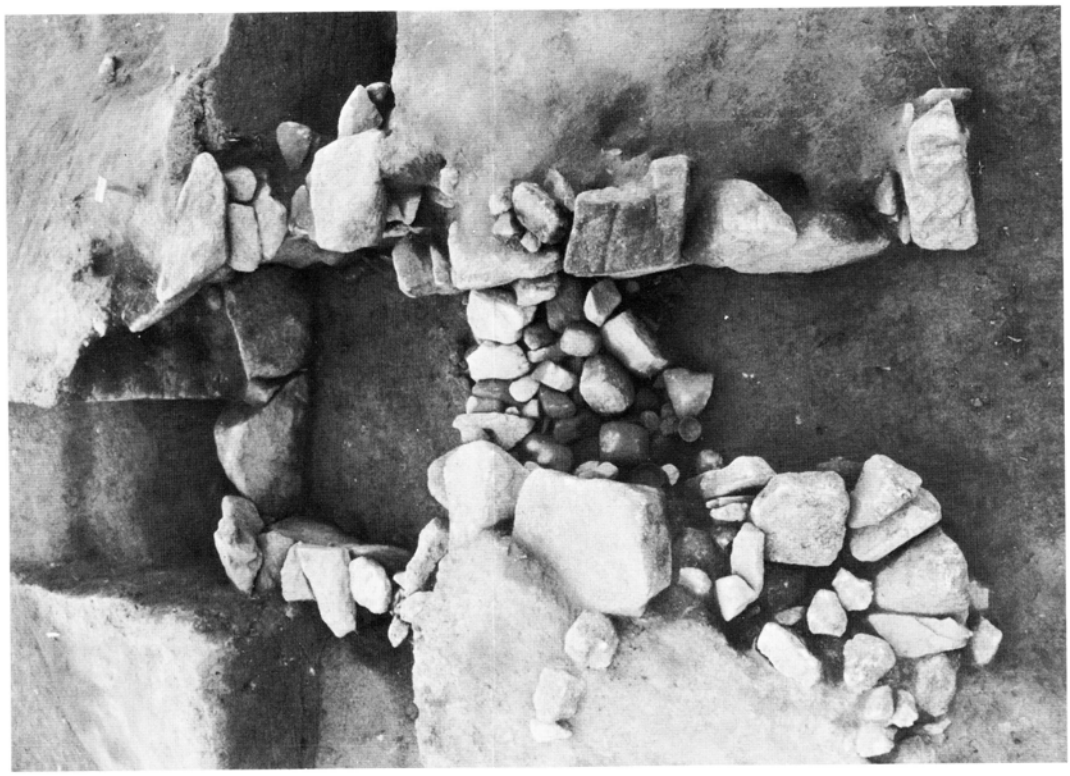
7

吉武E4号墳

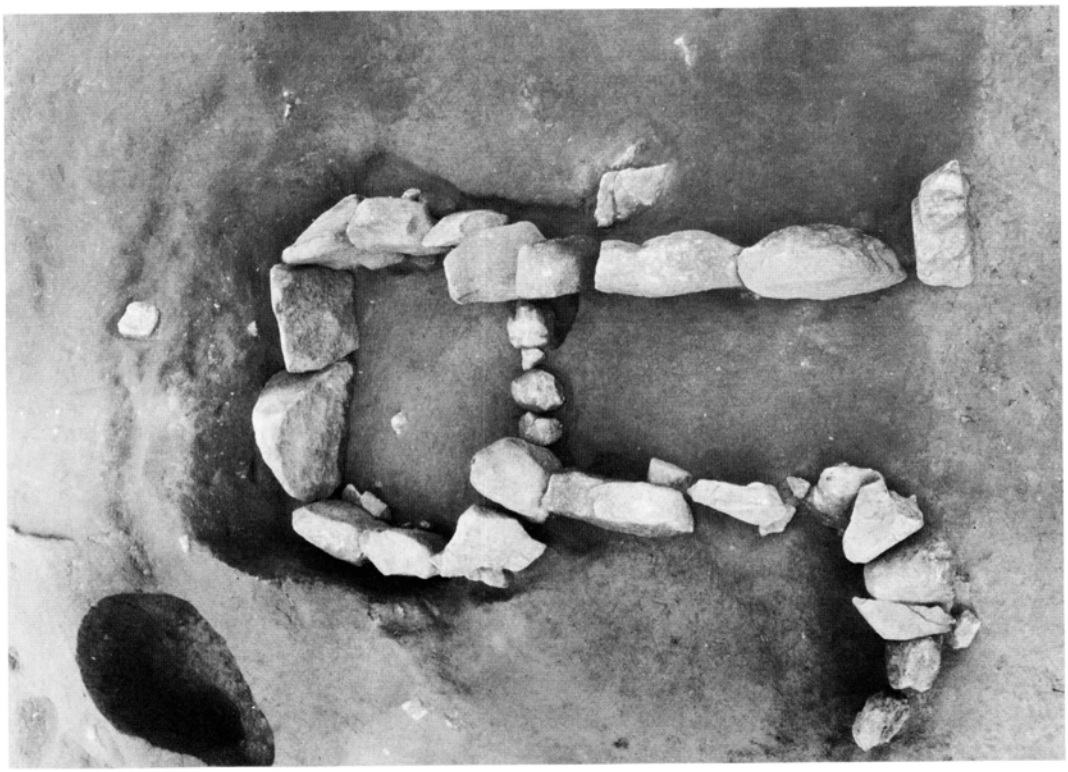


(1)　調査前全景（北から）

(2)　表土除去後（西から）

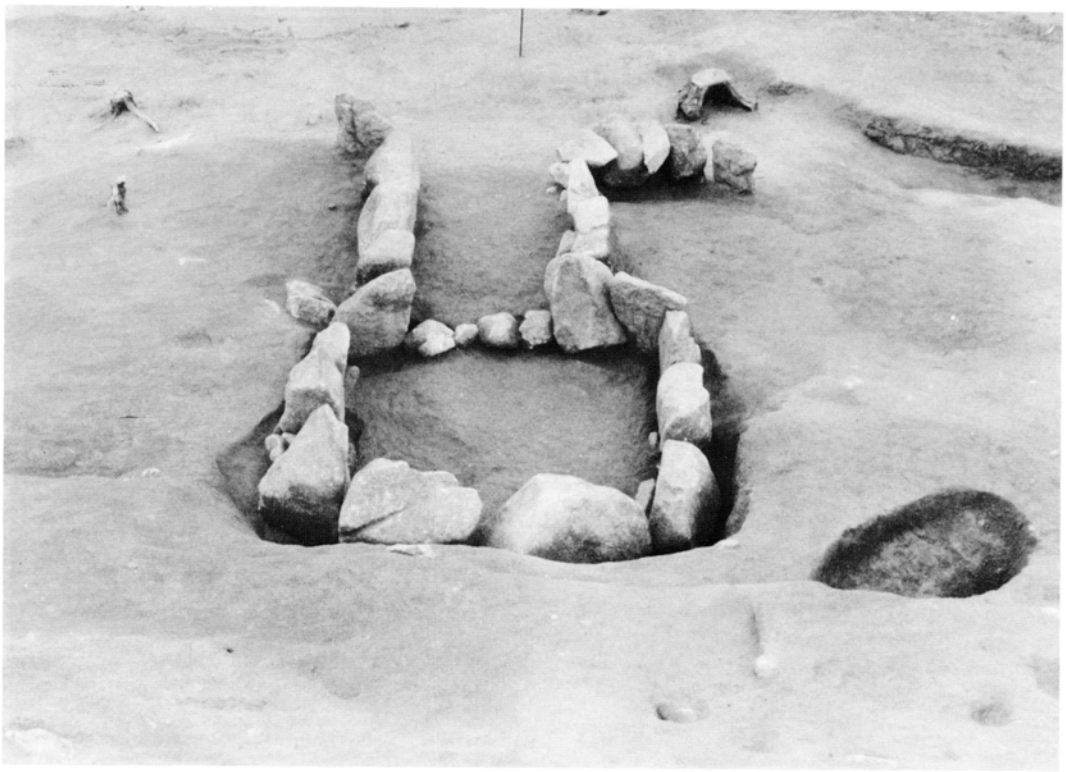


(1) 表土除去後（南から）



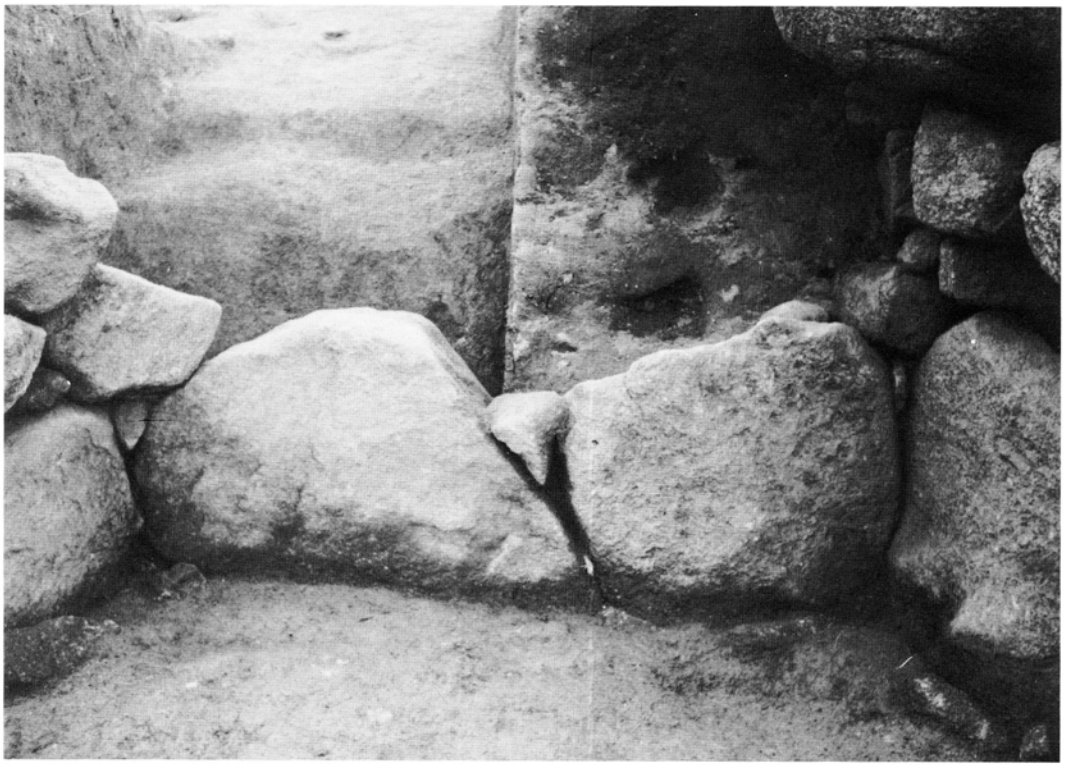
(2) 石室掘方（南から）

吉武E4号墳

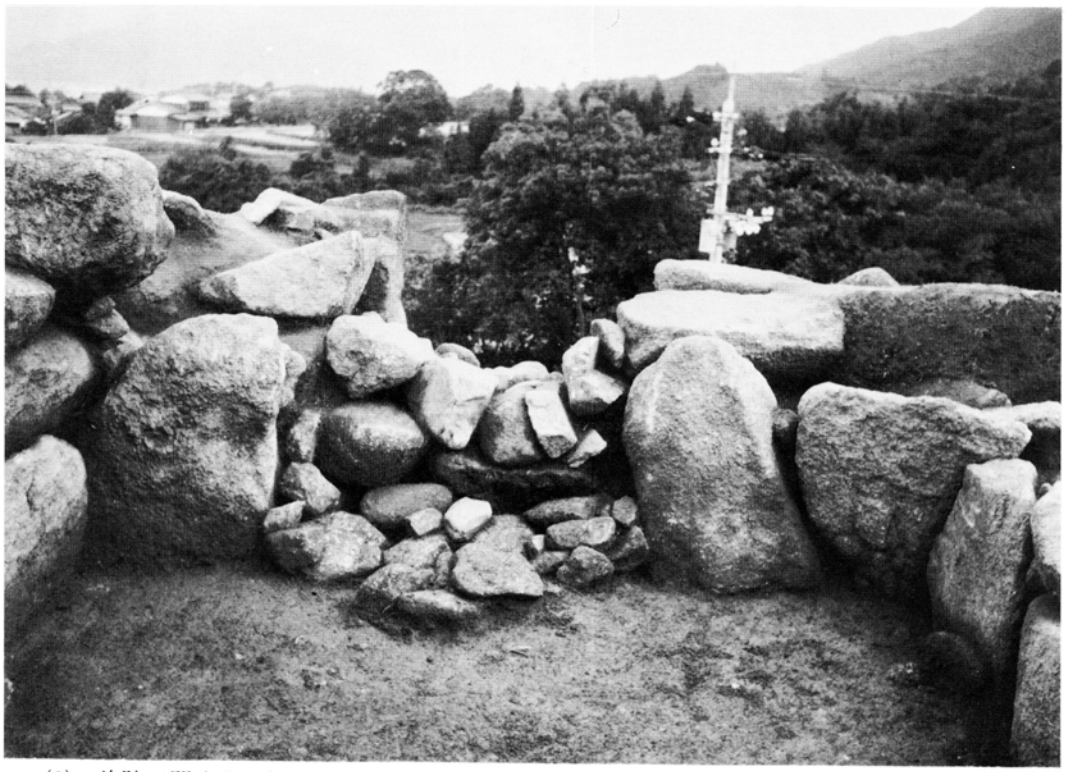


(1) 掘方と石室（北から）

(2)掘方と石室（南から）



(1)　奥壁



(2)　前壁（閉塞状況）

吉武E4号墳

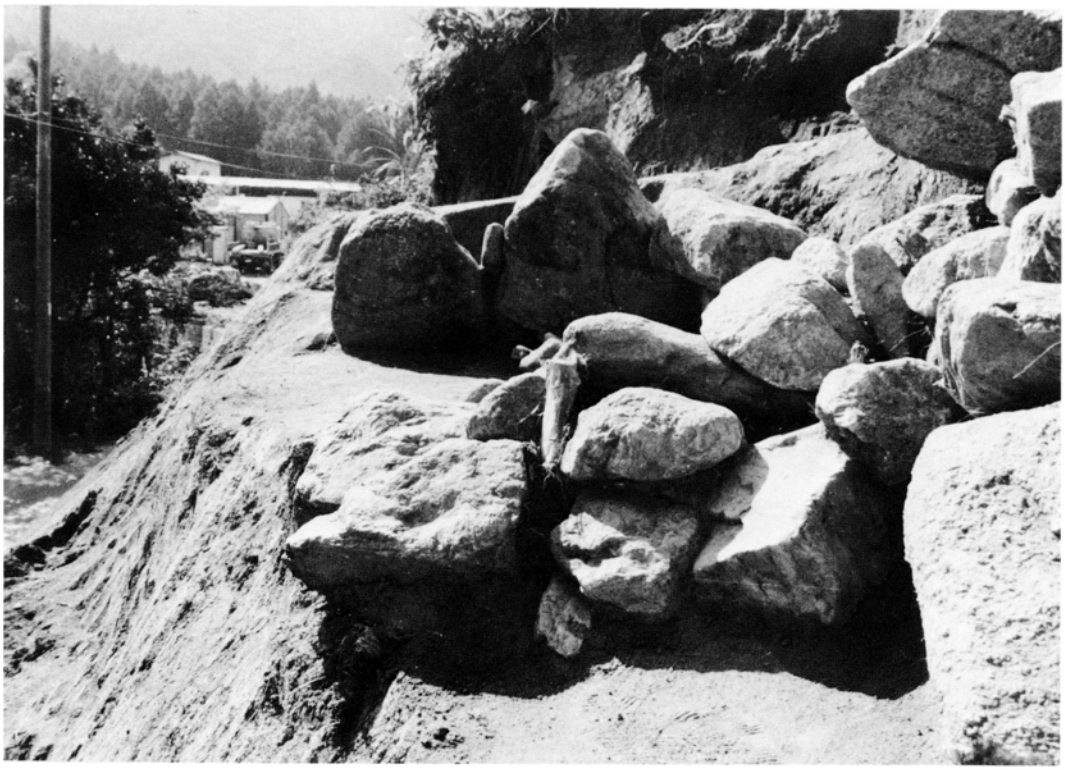
(1)　閉塞状況と遺物出土状況（南から）　波線内は鉄滓

(2)　遺物出土状況（上から）　破線内は鉄滓

(1)　調査全景（南から）

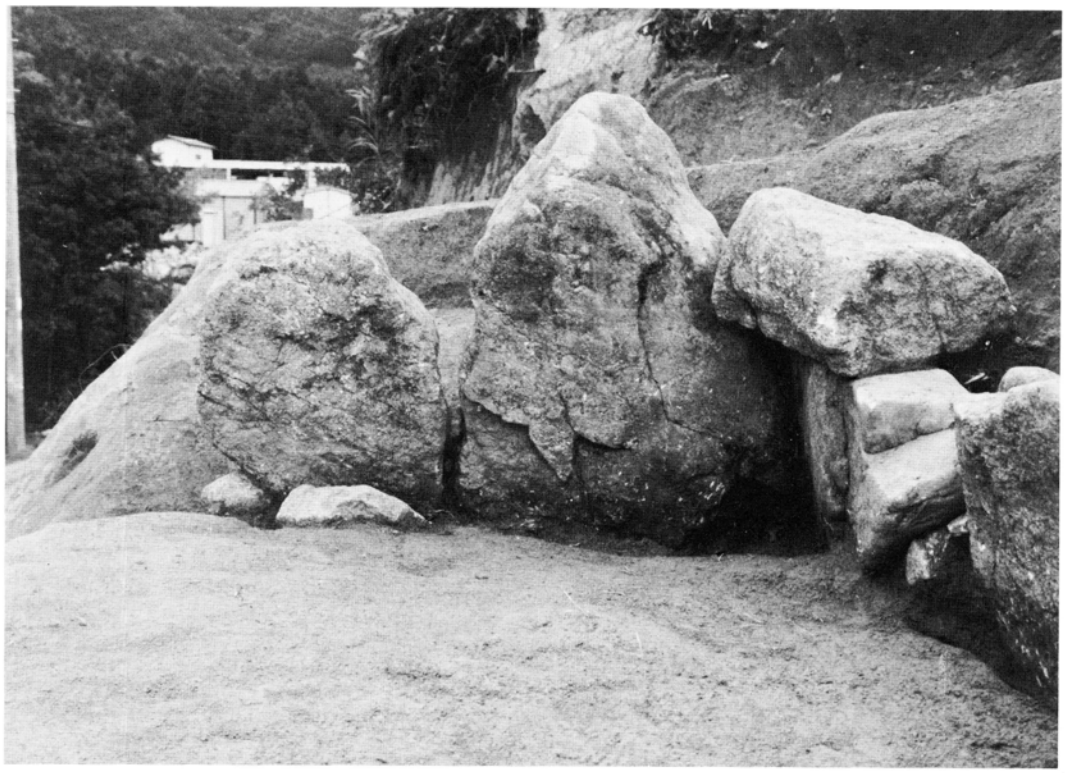
(2)　完掘後（南から）

吉武E5号墳

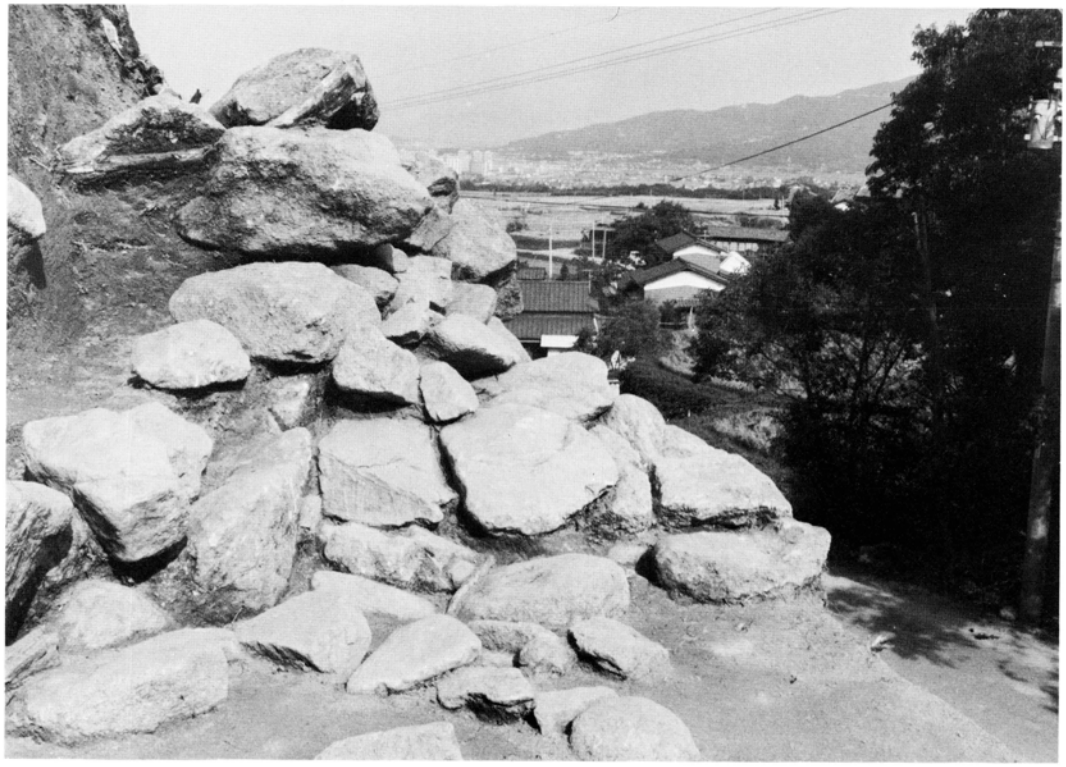


(1) 石室全景（東から）

(2) 石室全景（西から）



(1)　奥壁

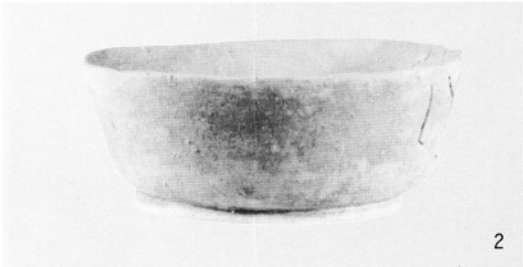


(2)　前壁および閉塞状況

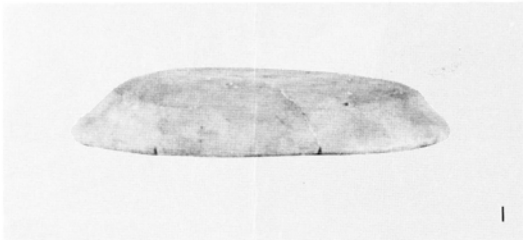
吉武E5号墳石室各部

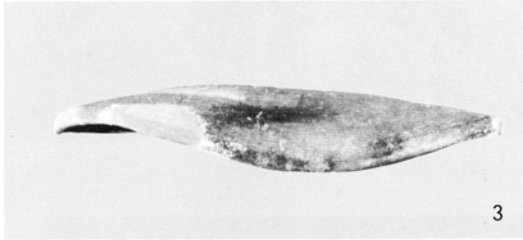
(1) 玄室（上から）

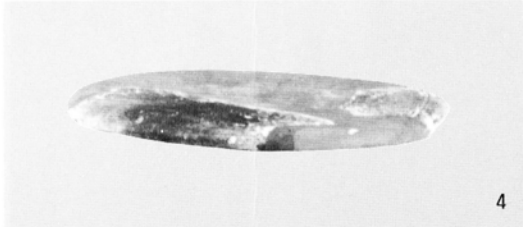
(2) 前壁及び羨道（東から）



(1) E4号墳







(2) E5号墳

乙石C群遠景

(1)　東から

(2)　調査終了後（北から）

(1)　調査前（西から）

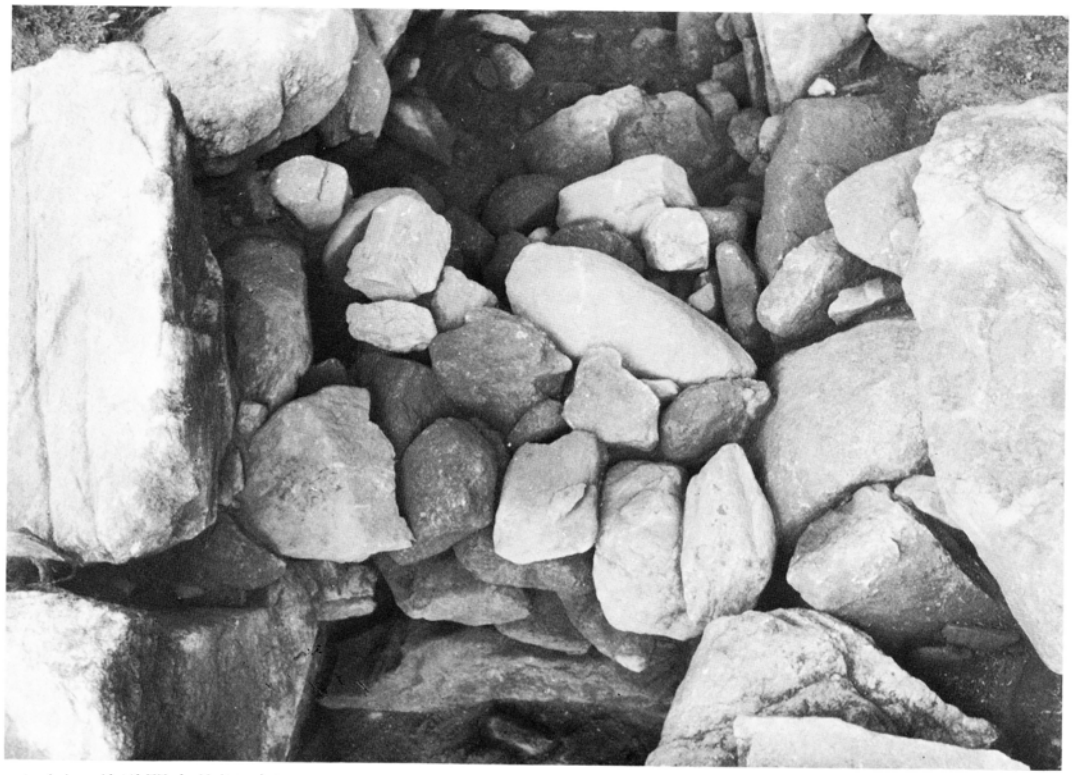
(2)　調査終了後（西から）

乙石C1号墳

(1)　石室全景（東から）

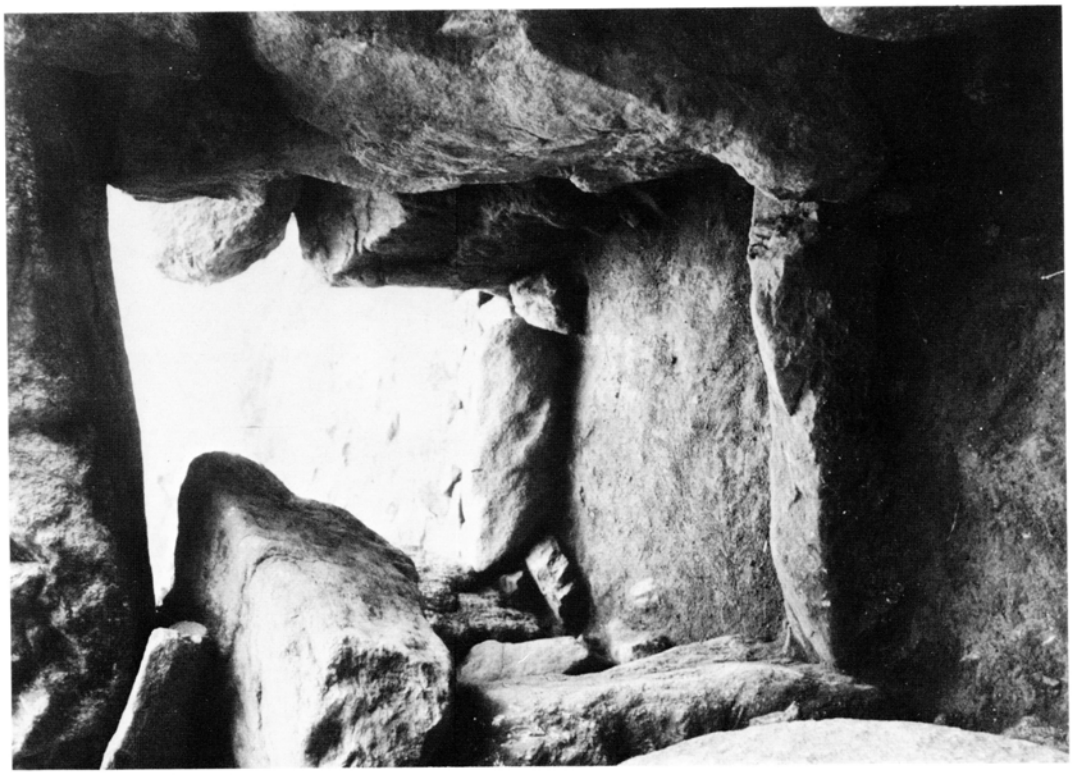
(2)　石室全景（西から）

(1)　羨道閉塞状況（玄室から）



(2)　羨道閉塞状況（上から）

乙石C１号墳石室各部



(1)　第１梱石及び第２梱石（羨道から）

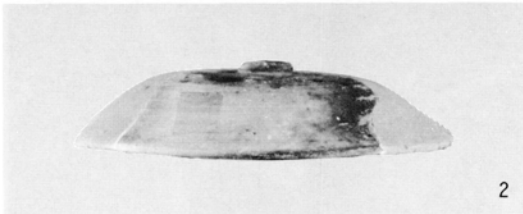
(2)　羨道左側壁壁体構築状況

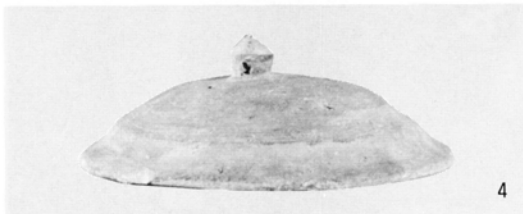
(1)　轡

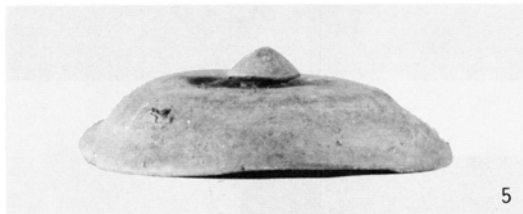
(2)　玄室右袖隅角部

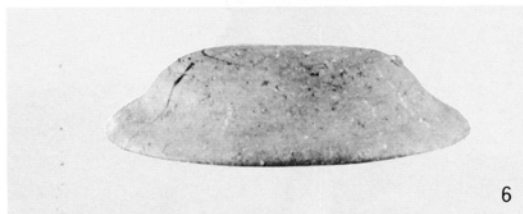
乙石C1号墳出土遺物 I

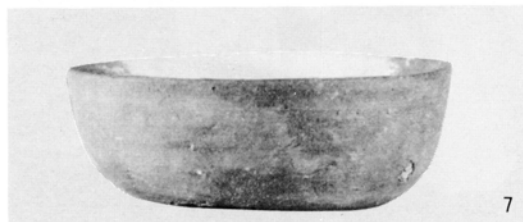
1


2

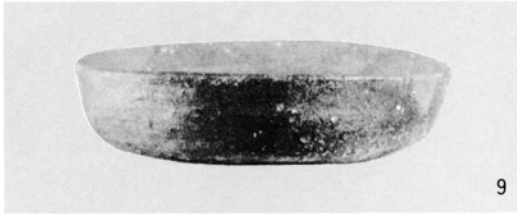

4


5


6


7

8

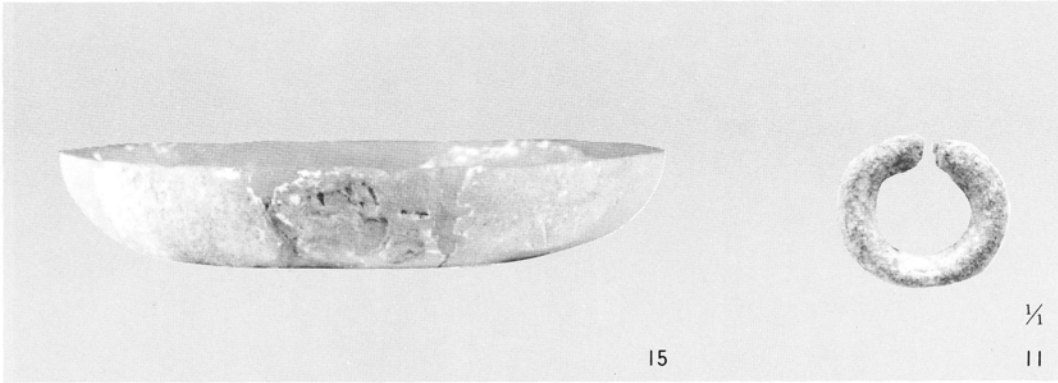

9

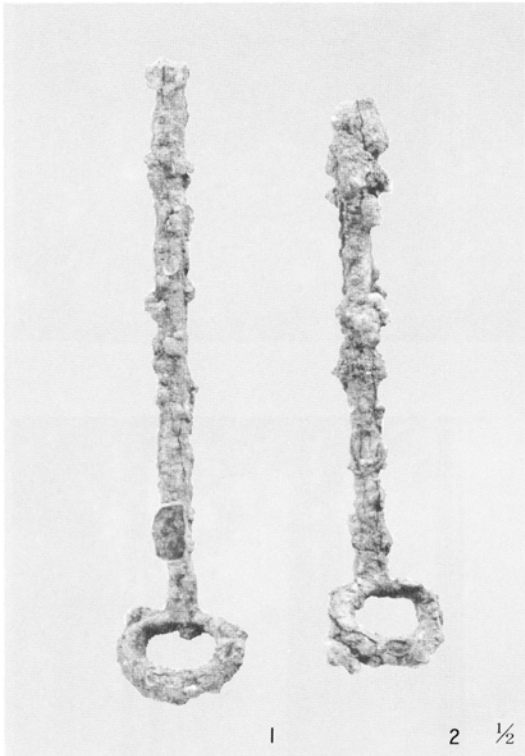
10

11

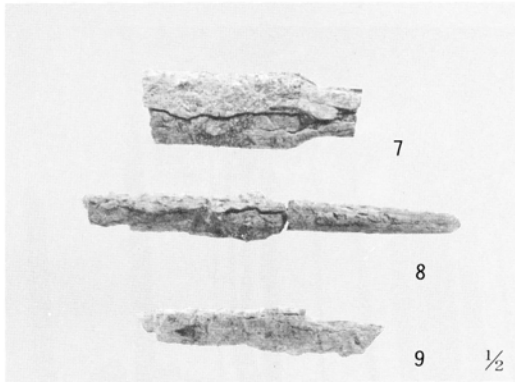
12

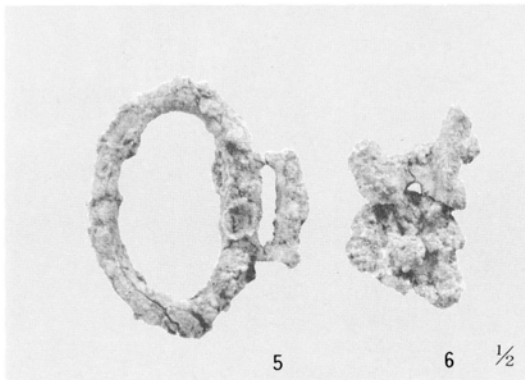
13

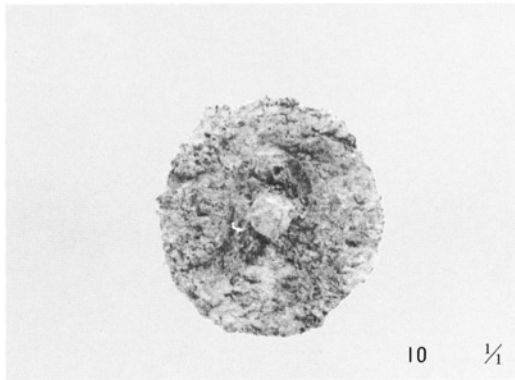

15
11
1/1


1
2
1/2

4
3
1/2

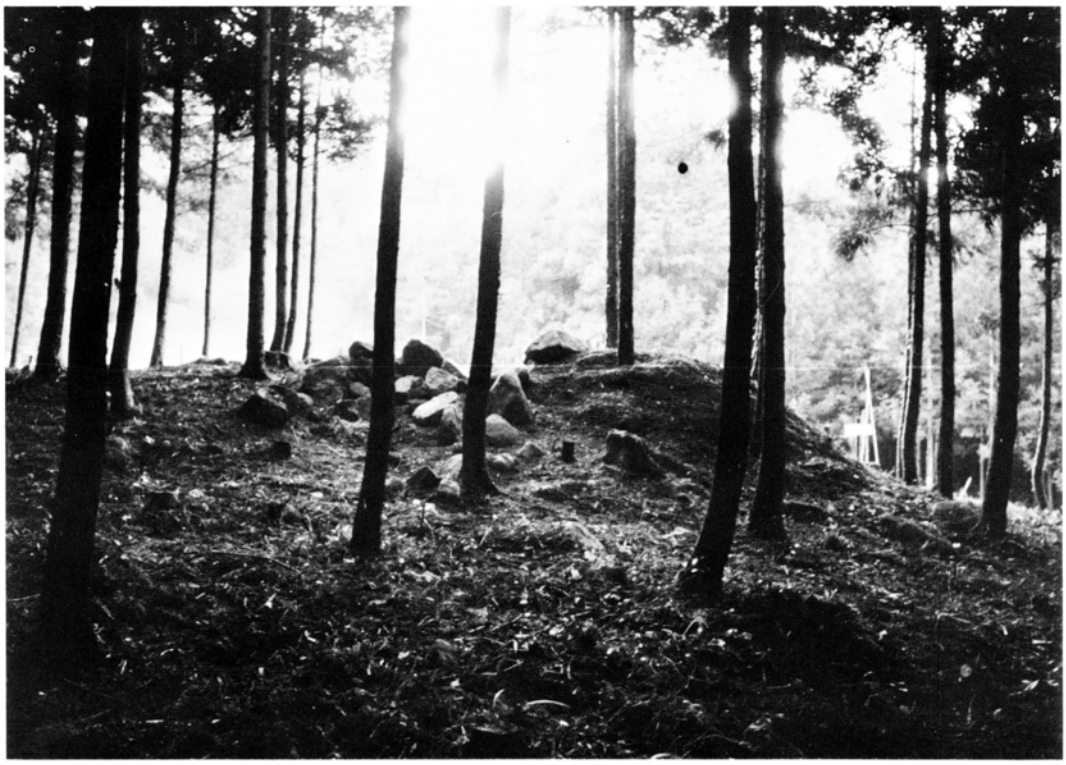

7
8
9
1/2


5
6
1/2


10
1/1

乙石C２号墳

(1)　調査前全景（西から）



(2)　調査前全景（東から）

(1)　石室全景（東から）

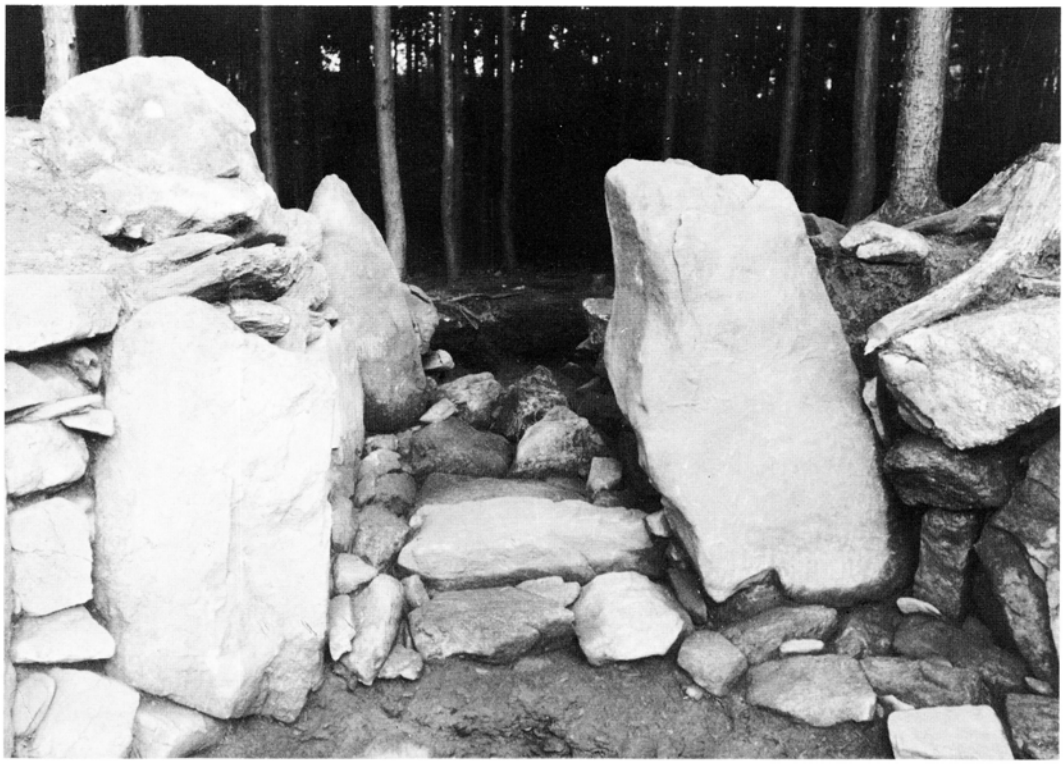
(2)　石室全景（西から）

乙石C２号墳石室各部

(1)　玄室（西から）

(2)玄室左壁（北から）

(1) 奥壁



(2) 前壁

乙石C２号墳玄室各部

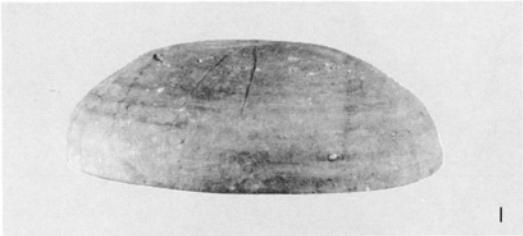
(1)　羨道閉塞状況（開口部から）

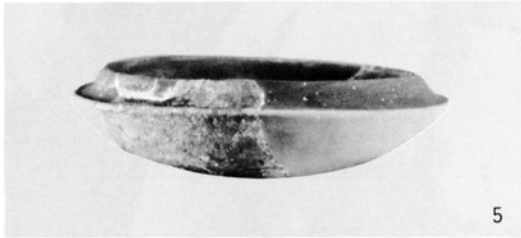
(2)　羨道閉塞状況（上から）

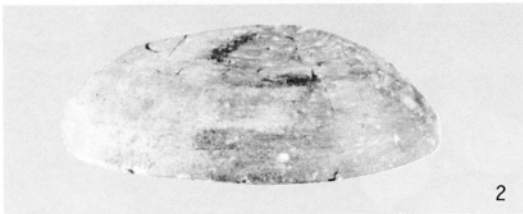
(1)　左袖隅角部分（北から）

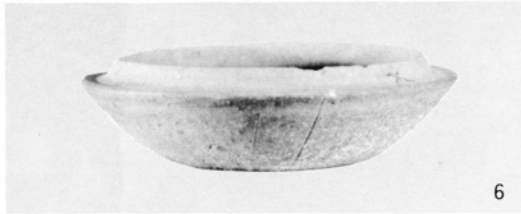
(2)　同上（近接）

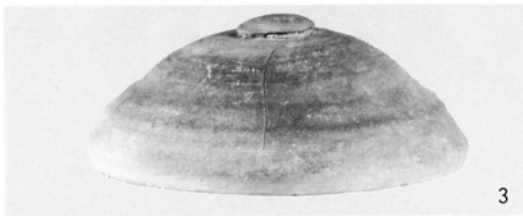
乙石C２号墳出土遺物


1

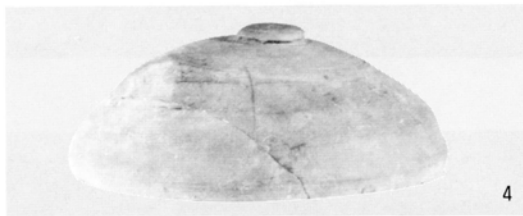

5


2

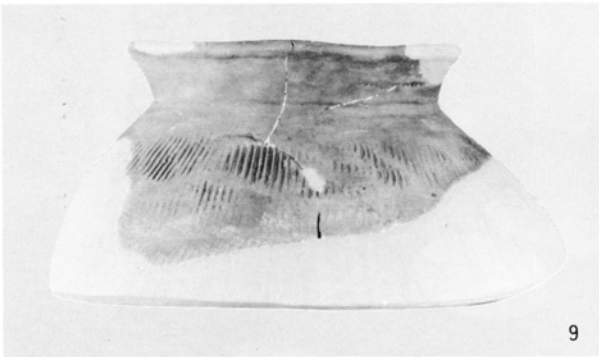

6


3

7


4

8


9

1

10

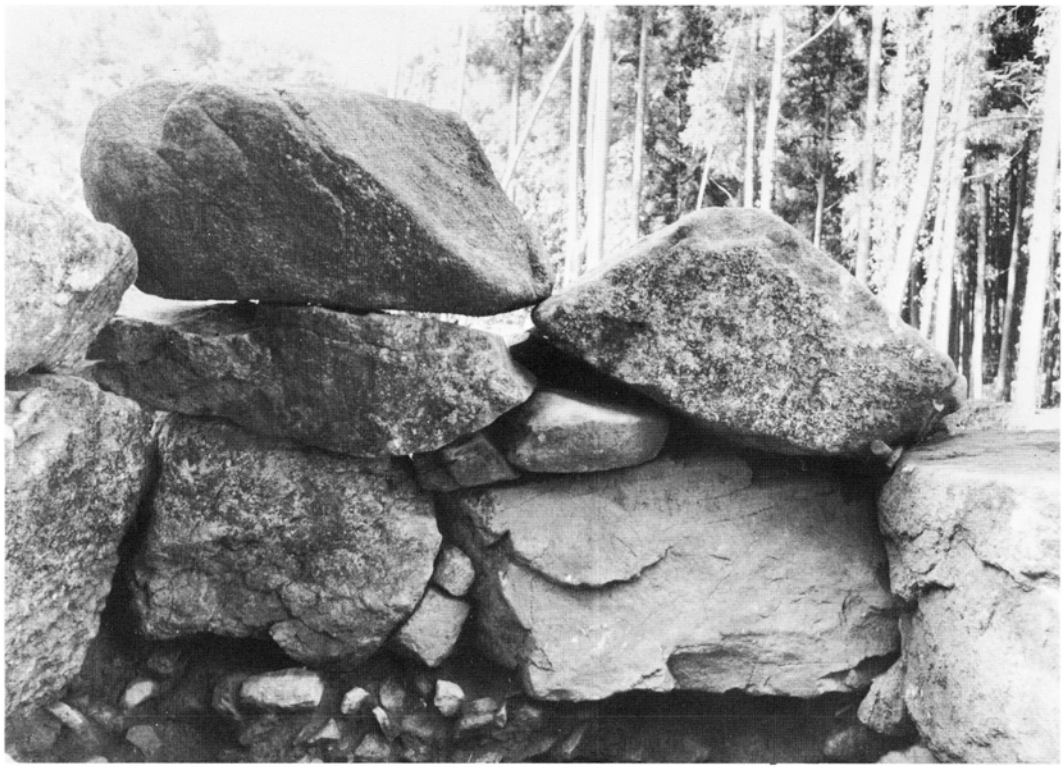
(1)　調査前全景（南から）

(2)　表土除去後（東から）

乙石C３号墳

(1)　石室全景（東から）

(2)　石室全景（西から）



(1) 奥壁

(2) 前壁及び梱石

乙石C３号墳石室各部

(1)　羨道閉塞状況（西から）

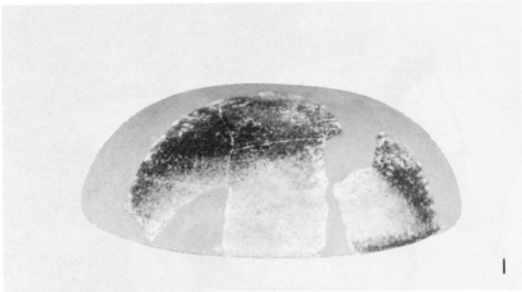
(2)　羨道閉塞状況（東から）

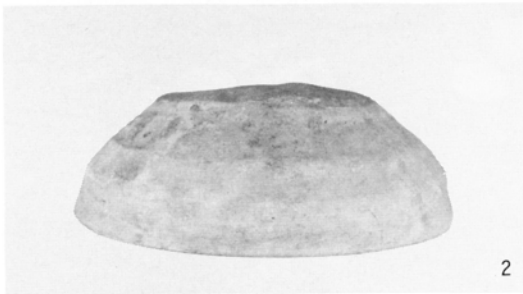
(1)　玄室及び羨道

(2)　右袖隅角

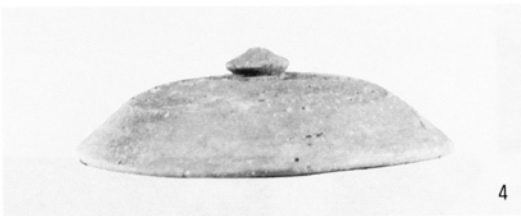
(3)　羨道内

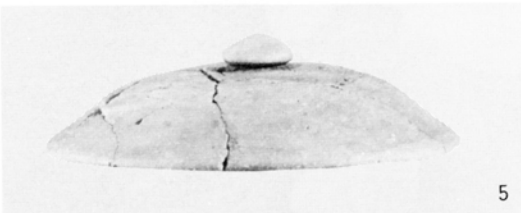
乙石C３号墳出土遺物Ⅰ

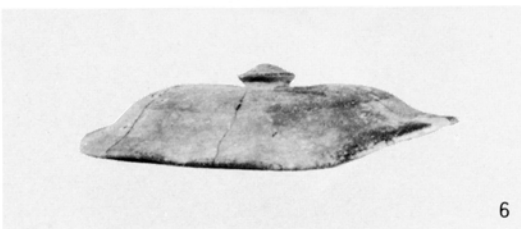

1

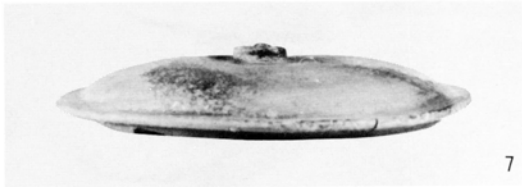

2

3


4


5


6


7

9

10

11

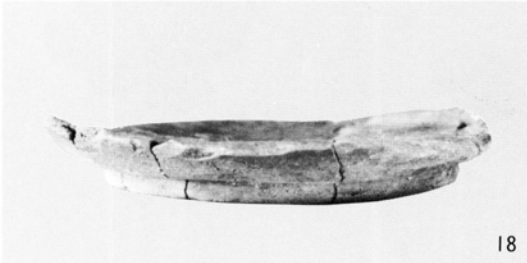
12

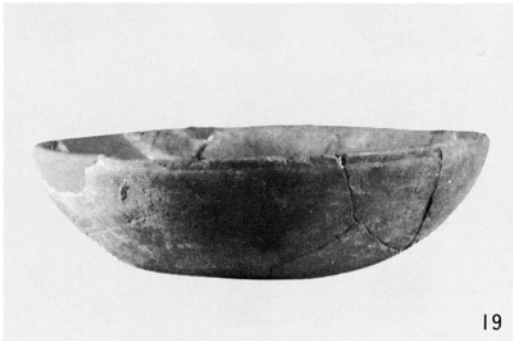
13

15

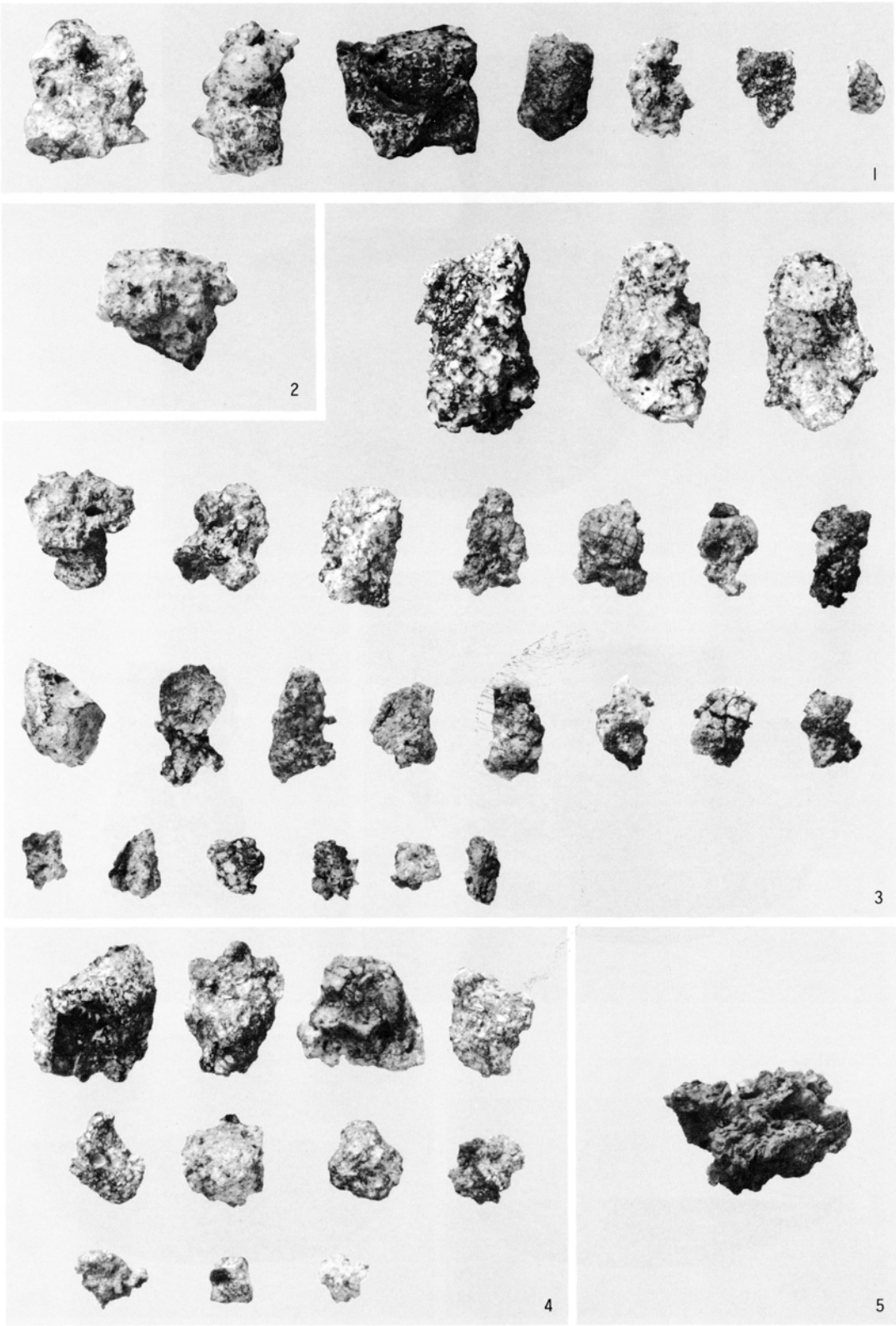
17

½


18

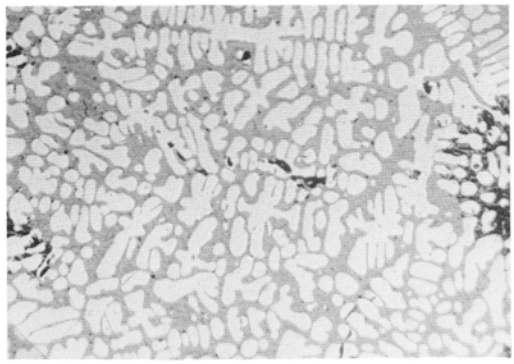
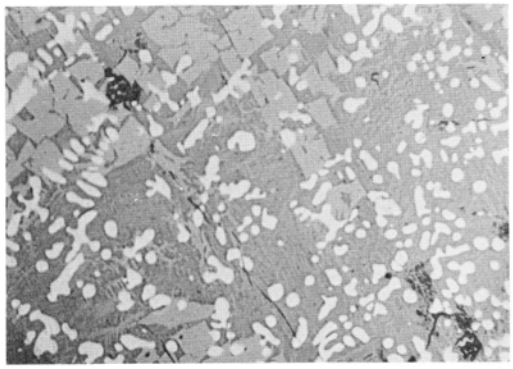
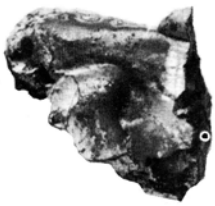
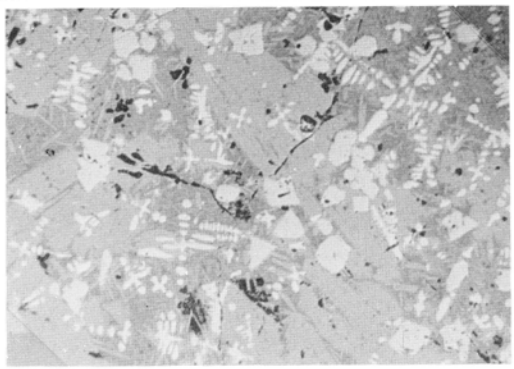
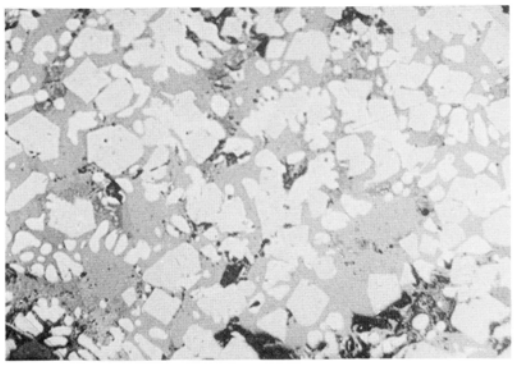

19

各古墳出土供献鉄滓（1：3）



1．吉武E３号墳玄室内出土　2．吉武E３号墳Ⅲ区墳丘裾出土　3．吉武E４号墳羨道部出土
4．吉武E５号墳玄室内出土　5．乙石C３号墳羨道前面裾出土

鍛冶滓・製錬滓の顕微鏡組織

2 I − 9 乙石C群 3号墳 鍛 冶 滓 ×100 外観写真½		
2 J −91 吉武E群 3号墳 製錬滓 ×100 外観写真½		
2 J −92 吉武E群 4号墳 製 錬 滓 ×100 外観写真½		
2 J −93 吉武E群 5号墳 製 錬 滓 ×100 外観写真½		

福 岡 市 西 区 金 武

県道大野・二丈線関係
埋蔵文化財調査報告 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第52集

1980年3月31日

発　　行　　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1－8－1

印　　刷　　株式会社　川 島 弘 文 社
福岡市東区 箱崎埠頭6—4—4

県道大野・二丈線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集

福岡市教育委員会